特71
576

蓮乃露全

于田川文海校著
靜處散士著

駿々堂本店藏

301226-000-0

特71-576

蓮乃露

靜處散士／著

M21.12

DBB-0021

特71
576

于田川文海校
靜處散士著

蓮乃露 全

駿々堂本店藏

特71
576

國會圖書館
52.4.15

913.6

77W13880

蓮の露

第壹回　網舟

撒來鳴綸水擧處獲紅鱗、五月雨の晴間を幸ひ大川筋の蛸の松の近傍に一艘の網舟を泛べて酒酌交す二個の客あり

甲「オイ源治、今日の日和では澤山獲るだらうと思つたら、其割に曜らないなア

乙「呵々々々、其不獵の原因は愚僧イヤ僕が御同船してをるから夫で鱗族が……

網打の源治は網を提げて船頭に突立ち

源「ナニ、お客さま因たものではございません、モウ少し潮が好く成てくると獲れます……

今度は一番……オイ君、モット上流へ遣て……

梶子の岩吉は源治の命令に從ひて田鑿橋の方へ船を操る、船の内なる二客は聲を低め

甲「貴君、網船はサゾ御迷惑で……雨上りで澤山獲れるだらうと思つたら然も不獵で何と

もハヤ……

乙「イヤ、到底五戒を犯すのだから、網船でも何でも其樣な事は頓着は無いが、豫て御依

組申した彼の一條は……

甲「實は其事をお話し申すのに、何分拙宅は手狹で、殊に家族も多ふございますから、當座の思ひつきで、船と世界を定めましたが、茶船もチト大層ですから、夫で網船と趣向をつけましたので……網船の説明は如何でも好うございますが、モシ不可ません、彼の品は、御懇望の品は手に入りません、モシ彼品がお望み通り、貴君のお手に入れば、余も御奔走申した甲斐がありますが、段々聞合して見ますと、既に所有主が有るそうです、他の畑にチョイと鍬入れて又も苦勞の種を蒔くといふ、文句がありますが、他人の所有品に手を出して、苦勞するのは無益ん話です、彼樣な物はお斷念め成さい、余が周旋して、彼より上等の品物を、屹度お世話いたしますから

乙「ハー、左樣か、他に、所有主が……君に然う云はれ、ば斷念するより道と無いか、此間の釋尊誕日の晩に、阿彌陀ヶ池の雜沓の中で、不圖眼に映つたのが、煩惱の起原で……三衣イヤ身分に對しても耻入る次第ですか、何分先入主となるで、僕の心には彼上の尤物は無いやうに思はれて……

甲「イヤ、夫も御尤でございますか、世界は廣く、品物は多ふございますから、孰れ近々に余かズット彼より上等な品物を……

乙「ヂヤア、夫を樂みに、彼方は强て斷念しませう、時に云ふまでも有りませんが、此事は御他言下さらぬやう、若本イヤ世間へ聞ゑると傘一本で……

甲「呵々々々其樣な奮發な事がありますものか、今日の文明世界では、此うして網船へお伴しても、又彼の品物をお手にお入れ爲されても、何も自由の權では厶いませんか

乙「イヤ、世間の人が悉皆尊公のやうに開化した人ばかりなら宜しいか、京都からは嚴刻しう云ふてくる、組合では俱詮議をする、加之に世話方は彼是云ふ、少しも油斷は出來ません、呵々々々、先刻から談話計りして、折角の御趣向だから今一網、オイ、船頭さん、此處等は如何だナ

甲「源公、空が惡く成たからモウ一網で揚げやうか

船頭は網を片手に空を仰ぎ

源「サア、此頃の時候ですから、又降りでせう、オイ岩公、好いか……オヤ、モウ、ぽろ附いて來やアがつた、オット好いか……

ヂプーンと打込たる網にか、りし雜魚に交りて何やらか、りし一品を源治は手早く把りてソッと三尺帶の間に隱し、か、りし雜魚を溜船へ投入ながら

源「旦那、モウ卽て日が暮れますが、大降に成りぞうですから、揚げても好ございますか、余は失敬だが少し用があるから、大江橋から

上るが、此旦那はヅット南で入ッしやるから、御苦勞でも東堀を空堀まで……
乙「イヤ、生も一寸道寄りをするから、然う南まで遣らいでも宜しい
甲「イエ、ナニ、決して御遠慮には及ません
二客が此の問答の内に船は流を溯つて次第に上流へ上り行けり
源次「旦那此處は築地でございますが、貴君、お上りなさいますか如何なさいます
客「ヲ、ツイ、寢て仕舞ふた、清兵衛さんは
源次「大江橋からお歸りになりました、貴君が築地へ來たら知らせろと仰しやいましたから……築地へお寄りなすつて夫から空堀までお送り申しませうか
客「イヤ築地ならモウ、此處から歩いて歸る、トキに源次さんとか、先刻は清兵衛さんが居たから、沈默ッてゐたが、アノ、田蓑橋で網に罹つたのは、彼は何です
源次「エ、、ナニ、アレですか、アレは諸魚と鰡で……
客「イエ、ナニ、魚では無い、ソレ、ソノ、お前の三尺帶の……一寸足を出してゐる、ソ、ソレは何だ
源次「エ、アノ、是ですか、ユリヤ、簪ですが、如此な事が吾等の役得です
客「イヤ、夫は然うで有う、何も余は夫を兎や角は云はぬが一寸見せて貰いたい

源次「旦那、見て如何爲さいます
客「サア、見て氣に入たら買ひ度く思つテ……
源次「如何で錢にする品物だから、買て下さるなら賣ても好うございませうすが、然し旦那お買なすつて何に爲さいます
客「少し所思が有るから一寸見せて下さい
網打源次は不勝々々に三尺帶の間より網に罹りし簪を取出して客に渡せば客は熟〻見て莞爾一笑
客「買ひませう、然し幾許で賣て下さる
源次「エー持て歸つて町藝妓にでも賣たら隨分儲かる品物ですが貴君は原素を存知ですから五圓に御負け申しませう
客「何だ、五圓、イヤ、大層好い價だなア
源次「モシ、旦那、高いと仰しやるが、珠は正物ですゼ脚、は眞鍮かキセか判りませんが珠、ばかりの代價でも、十圓は確かでせう
客「賣人と買人で、互ひに慾の違ふものだから、幾許とも價は定め憎いが、無理か知らないが、此らして下さい、今生憎懷中に三圓しか持合せが無いから、何卒三圓に負けて下

さい

源次「三圓、ソリヤ、格外強い、只今お持合せが無れば、其三圓は内金に戴いて置いて、殘金はお宅へ戴きにまゐりませう

客「宅へ……宅へ來て貰つて……マア、其樣な商賣氣な事を言はずに、默つて負て置きなさい、又何彼で埋合せをするから

源次「旦那が、然う被仰れば仕方が無い、拾は無い昔だと斷念めて、三圓で手を打やせう

源次は三圓にて其客に珠簪を賣り

源次「ヂヤア、旦那、此濱へ……

客「ア……

源次「ソラ、當りかすせ

客「御苦勞

源次は手早く棧橋替りに渡板を懸くれば客は夫を渡りて陸へ上る

蟹島の多景色樓の二階の一室に、東京の榛原製の團扇を片手に持ち、椽端の柱に身を凭せ人待顔に中の島の公園地の方を眺望めてゐる十八九の女、髪は島田に結ひ、東京の竺仙染の浴衣に、黑繻子と朱紗の晝夜帶を締め、意氣で高尚なる粧飾、藝妓かと思へば品格が好過ぎ

處女かと見れば少しく氣の利き過ぎたれど、双方にしても非常の別嬪なり、此るところへ此家の下婢が襖障子を開けて入來り

下婢「アノ……只今腕車で、お迎ひに出ましたら、生憎お不在でございましたさそうで、お手紙だけは置いて歸りましたさうで……

娘は美麗しい顔を皺め

娘「エ、お不在で書狀を、アノ、書狀を……ヂヤア、仕方が無いから一寸何かで一杯……其内にとお越しなさるでせう

下婢「ハイ左樣あら直ぐに……

と行んとするを女は呼止め

女「ア、チヨツト……アノ、妾が先刻船から揚つて來たその迹からすぐ續いて此宅へおいで爲すつたお客樣は……

下婢「ハイ、アノ、お方でございますか……オホ、、、、大きな聲では申せませんが寺町の日正寺といふお寺の……

女「オヤ、御出家ですか、大層氣の利いた……

下婢「唯今ではお頭髪が彼だのに浴衣の上にお羽織を召して入つしやるから

女「貞正に子ヱ俗人と少も變りませんネェ、ソシテ、お一人

下婢「アノお方も、今一寸、お使ひをお出しなさいましたが、矢張先方がお不在で、お一人で一杯召上つて……モシ、アノお方は、御身分にお似合なさらない粋なお方で、お酔なさると意氣な聲で清元なんぞお謠ひですが、少しもお經の節の変ないのが妙でございます、オホ、、、貴君、お顔を御覧でしたか

女「イヽエ

下婢「中々好い男子で、恰度雁沢郎の紅陽のやうですが、只御酒を少しお過しなさると、勇みに成て、東京詞で無理を仰しやる丈が御病氣で……

女「然う……面白いお方ですねへ……夏向きは格別お繁忙しくツて結構ですねへ

下婢「ハイ、お陰さまで……オヤ餘計なお饒舌ばかりしてゐて、肝心のお誂へも遲さないで、貴女少しお横にお成りなさいまし、只今お枕を……即て風呂が明きますから明きましたらすぐ申します、モウ、今に日が暮れますが、暮れると、チラ〳〵船が出ますから川の景色が少しは好くなります

折から彼方の坐敷にて手を鳴らす音ポン〳〵

多景色樓の二階にて、室は異なれど意は同じ、人を待つ身の徒然を慰めかねたる男女兩性此

方の座敷にも一個の男下婢を呼で書狀を渡し

男「折角呼に遣た河上が留主なら仕方が無い、之を平野町の清兵衛……此表面に詳しく町名番地を書いて置いたが姓氏は田中だ、好いかへ、車夫にすぐ持せて遣ておくれ

下婢「ハイ畏まりました……

下婢が書狀を持て廊下へ出るトタヽニ通りかゝりし婦人の顔を此方の男は目早く見認めて

男「オヤ貴女はお遵さん、此間堀江で……

女も其男の顔を見て嫣然一笑

お遵「オヽ貴卿と笠原さん、其節は眞に……

笠原「妙な處でお目に懸りました、イヤ、妙ても有りませんが、お一人ですか、旦那と……」

お遵「イヽエ、一寸人を呼に遣りましたが生憎不在でございまして……

笠原「左樣か、實は余も一人で徒然ですから、人を呼にやりましたが矢張居りませんを……」お一人なら宜いでせう、一寸お這入んなさい、少しお目に懸けたい物もあるので……妙な事もあるもので……

お遵「オヤ左樣でございますか、ヂヤア、失禮でございますが、一寸お邪魔を……

笠原「サア、ズット此方へ、御遠慮には及びません、大層お熱くなりました、昨今は……貴女

は書間から此樓にお遊びでしたか

お蓮「イ、エ、今日は無據ない人に誘はれて、遲くから網船へまゐりましたが

笠原「コリヤ、彌々妙だ貴は余も先刻まで網船に……

お蓮「オヤ、妙ですねへ、妾は同伴のお方が急に用事を思出して浪華橋から一寸お宅へお歸りになりまして、妾は此樓にお待受け申すお約束で……オヤ、マア、勝手な事許り申して、此間のお禮も碌に申しませんで、彼節御厄介に成りました彼の簪、よく〳〵妾の身を離れる時節が來たと見えて、今日又た川へ落しました、夫に彼の簪から御惡親に成た貫君に、又れ目にかゝるとは、實に不思議な御緣でオホ、、、

笠原「へェ、夫は奇妙、實は今、余が貫女に不思議なお話があると申したのも、ヤッパリ、其簪の事で

と言ひつゝ、笠原は最前網打の源治より購ひたる簪を紙入の間より取出し

笠原「お蓮さん、一寸是を

お蓮は其簪を手に把りてうち熟視

お蓮「貫卿是を……如何なすつたの……是は妾の……

笠原「貫女の簪に違ひ有りませんか

お蓮「ハイ、貴卿是を如何して、實に不思議でございます

笠原「先刻田錢橋の傍で打せた網の中に、圖らず曜つた此簪、此間堀江の材木市で貴女が御盗に抜れたのを、余が取返して上げた品と、玉から脚まで能く似てゐるので、若やヤッパリ彼品かと、船頭に談じて買て貰つて、明日お内へ届けやうと、心計算をしてゐたのだが、是が彼品に相違なければ、余の親切も届いたといふもの、萬望其儘お持歸りなすつて

お蓮「オヤ、マア、然らでございましたか、最前妾の乘た船も恰是彼邊を通りましたから其時夫ぢやァ落したのでございませう、一度ならず二度までも、何とお禮を申して好いやら、切めて船頭からお買ひ成すつた、其代金丈でも妾から……

笠原「マア、其樣な事は如何でも好うございます、余は貴女の簪でさへあれば嬉しいのです……貴女情人がおいでになるまでお攝ひなければ此處で一杯

お蓮「オホ、、、、情人なんテ其樣な人ではございませんよオホ、、、、貴卿こそ今に……

……

笠原「ナニ今に……憶その今にが疾病の原因……折角忘れて居た煩惱が又目前に

お蓮「エ、何でございます

笠原「實はお蓮さんアノ……イヤ堀江で始めてお目に懸つてから妙な感情が起つて……今

日網船で出掛たのも、清兵衛といふ男と話したのも、貴女……　お蓮さん貴女のイヤお蓮さん貴女何處へ

お蓮「モシ笠原さん一寸御覽、納涼船が陸續……　人間が氣が短くなるのか、但は氣候が早くなるのか、去年より今年と漸次大川の納涼が早くなりますねへ

笠原「お蓮さん、納涼の事は兎も角も、今日今云ふた其清兵衛といふ人の話では貴女は……

お蓮「マア綺麗だこと、澤山あること、洗心館の紅球燈、何かの開業式でもあるのでせう、か、モシ笠原さん、幾個有りませうか

笠原「左樣、幾個ありませうか、提燈よりは此方の話を、アノお蓮さん、余は實は南の……

お蓮「ハイ貴卿はお隱しに成て入つしやるが妾は能く知てゐますよ、貴卿は寺町の日正寺の……

笠原「エ〜貴女夫を如何して

お蓮「オホ、、、お隱し藝の清元が大層お上手だといふ事まで何も彼も知てゐますよ

笠原はお蓮が意外にも己が身分を知たるに肝を潰し只さへ酒の爲に微醺を帶たる顏又一層の紅みを添へ彼方に見もる洗心館の紅球燈に彷彿たる色を爲しつゝ呆れてお蓮の面を熟

視め暫時は物をも言ひかねたる處へ最前の下婢が入來り

下婢「旦那、田中さんと後よりすぐお越しになります

第貳回　開帳

中寺町の日正寺に身延山の御寶物の御開帳があるさうだ、同寺の御上人が綺麗な顏へ薄化粧をして毎日美聲で難有い說敎を爲さるさぢだ、大層參詣人が出るさうだ、非常に繁榮ださうだ、李兵衛さんも日參さんも御參詣なさい、ナニ熱い、何です此の位の暑氣ぐらい、御高祖樣が龍の口や佐渡の御難の事を思ふと何でも無い、汗を流して御參詣をすること眞誠の信心だ、など、江河沙數の善男善女が、互に言合せ互に誘ひ合ひ、首に長珠數を掛け、手に團扇太鼓を拵へ、妙ー法ー蓮ー華ー經ードコドン〳〵と未明より押出せば、さしもに廣き該寺の境內も人の山を爲し、大鼓の音と題目の聲と合併に成りて靑天に雷を走らし、踏立る塵埃と焚立る線香の烟りと合併になりて白日に夜を現す、かゝる繁昌雜踏も午後二時三時の間は昨今の大暑に怖れけん稍參詣人の途斷を告れば上人は方丈に返り暫時北窓の下に高臥し、世話方は交退ひて庫裏に退きて風透きの好き板の間に汗を入れつゝ

佐兵衛「兵助さん、今朝から今まで、斷絕無しに陳述り續けたので此の通り聲が枯れて仕舞ました

兵助「お開帳に日和間が好いのでお寺の爲には實に結構ぢや、此の繁昌では澤山儲かるだらう

源七「お上人樣が非常の御勉强で、アノ通り毎日御說敎を爲さるので、尙更御繁昌ぢやが、時に佐兵衛さん、兵助さん、此のお開帳の景氣の好いところから、此處の日限を打上げ次第身延山から附いて來た世話方と一所に、西國筋へ出開帳に御出張なさるといふ事だが、お前方も一緒に行く氣かな

佐兵衛「イヤ、余等は各自自家の商業を缺いで、信心の爲めに此うしてお世話をしてゐるが、迎も行旅まで出掛る理にゝ行きませんぜ

兵助「サア出開帳の事は萬事清兵衛さんが擔當ぢやから、彼人に任せて置が宜しい

源七「處がモシ兵助さん、迂濶彼の人に、お寺の事を任せられませんぜ

兵助「何故……

源七「大きな聲では言えれぬが……少し聞いた事があるので、余は彼樣な人が世話方の一人に加つてゐてはども成らんと思つてゐるので……

兵助「トハ又……

源七「お上人樣は彼の通り目から鼻へ抜けるやうな御方ぢやから……可怪な風說が立つと

そのまゝ、此の開帳を持込で、其の繁昌で胡麻かして、悪い評判を撲滅してお仕舞爲すつたが……元來其の風說の原因は清兵衛さんが製造へたのぢやさうお

佐兵衛「畏覺 余等はお寺の內幕を何も彼も知て、互に默許てゐるから濟でゐるもの、之か表面の慎家に聞えたら、夫こそ大變ぢや……夫に清兵衛さんは辯者で然も開化人だから、余等が偶にお寺の爲めを思ふて、彼是いふと、例の不留那の辯舌と、舍利弗の智惠で、うまく言ひくるめるから仕方が無い……頃來はお開帳で繁忙しないので、お上人は如彼してお寺に計りおゐでだから宜いが、其代り彼が又清兵衛さんの周旋で、二三日前から平の參詣人のやうな顏をして、ヌリ〳〵お寺へ遣つて來る樣子ですが、何と困つた者ではございませんか

兵助「へ——ソ、ヌリ〳〵遣つて來るとは何か來るのです

源七「何がッてアノ、ソノ、大黑イヤ辨財天が……

兵助「ヂヤア、七福神の御開帳も、一所にするのでございますか

佐兵衛「アハ、、、、、兵助さんは何にも御存知ないから……論より證據今にその活辨天が……

源七「ソラ何も三時過ぎになるとお召の單物に珠珍の帶なぞを締て、年紀は十七八、能く行

て二十そこ〳〵の娘が來ませう……ナア判りましたか

兵助「アノ、成程――判りました、爾うですか、フーン……元來坊さんにお寺のお上人のやうな好男子は惡い、夫に平日は月代も剃らずにでざるから、一寸見ると御出家とは見えないので……ソシテ彼の娘はお上人が何處かへ圍つて居も置いてあるのですか

源七「サア、其處ですて、清兵衛さんが平生辨解する通り、今日は十九世紀とやらの文明世界であるから、如何に出家だからと云ふて、菩提樹の木の股から生れた理でも無いから、說敎と寺務にさへ御勉强なされば、內證のお樂みぐらゐは大目に見ても好いがアノ婦人は他に立派な旦那が有ると云ふ事で、夫を御存知で有りなから御上人が……

兵助「ソシテ、その活辨天イヤお上人の爲には黑皆天ぢやか、その娘は藝娼妓か但は素人ですか

源七「サア、其處まで詳しい事は聞きませんか、何でも只の女ぢやありますまい孰れ黑と素の間でせう

兵助「ヤヤア、斑文ですか、犬や牛なら、合の子、雜種といふ處ですな呵々々々

佐兵衛「余が聞いてゐるには、其合の子イヤ半黑人の旦的といふのは、大阪の人ではないので、何か用事が有て時々阪地へ來る時だけ、娘の自宅へ遊びに來るので、其娘は旦那が來

ない間の慰みかた〳〵、清元とやらの師匠をしてゐるといふ噂です

兵助「然うすると其娘の出生は阪地では無いのですか

佐兵衛「サア容子といひ言語といひ、多分東京でせう……東京でも大阪でも人心も惡娼でも構ゑないが、何でも如彼な惡魔をお上人に周旋をする清兵衛さんが一番惡いのです

兵助「如何に世話方だからといふて、世話をするに事を缺いで……

源七「オイ〳〵大きな聲で風說は出來ませんぜ、ソレ清兵衛さんが

兵助「眞に呼ぶより謗れだ

佐兵衛「見た處は眞面目な男だが……オヤ又上人の方丈へ、ノコ〳〵と、何か胡麻かしに行きをつた、惡魔々々惡魔の使ひめが

日正寺の住職笠原道隆は方丈の縁端に蒲團を敷て坐を占め聯中の田中清兵衛と團扇を片手に額と額、四邊を憚かる密談閑話

笠原「彼と余との交情は、實に不測な因緣で、今更申す迄も無いが、過日貴公の忠告に依て、粗斷念して、歸る途中圖らず築地の竹式で、又も彼に邂逅て、其日網に懸つた珠の響、即ち前夜堀江で掏摸の手から取返して、彼に歸して遣つたのと同品、其響が緣の端、貴公の周旋で如彼成つたが、惡事千里の譬の如く何時か、風說が高く成て、果は擅中の信用に

も、關係る愛ひが有りさうだから、其惡說を撲滅す爲に、急に思附いた今度の開帳、幸ひ愚僧の目的が中つて、毎日〳〵の大繁昌、檀中の氣受けも回復たやうだが、只困るのは此二三日、只の參詣人の中に交ッて、彼が寺内へ遣て來て、目遣や手態で余を招くぢや、萬一他の講中にでも見認られたら、夫こそ余の身の上ぢやから、切望貴公から彼に言ふて、明日から出て來ぬやうに止めて下さい

清兵「止めても無益です、彼女の事は講中ぢゃこころか、日曉樣にも知れた樣子……

笠原「エヽ、アノ、開帳に附いて來た本山の役僧に……夫は又、タヽ、誰から漏れたか

清兵「人と云ふものは氣の許せ無いもので……貴僧、お蓮さんの話の出來ない前に、本町の河上に何かお賺みに成りましたらう

笠原「ムー

清兵「イヤ有たに相違ございません、其話が大体纏つた處へ、お蓮さんの話が湧いて、急に吾が周旋して、如彼いふ事情に成たところから、河上は夫を嫉妬で、今度の開帳に日曉樣の附いて來たを幸ひ、他の世話人を煽動して、内々本山へ訴訴して、事宜に依たら貴僧を退院させて、日曉樣を後住に据ゑやうと、頭に策を廻らしてゐる樣子ですから、中々油斷は出來ませんぜ

笠原「左樣ぢ……

道隆は簡短なる此の一語を答へたるのみ暫時默然として居たりけり

著者此に筆を轉じて姑く笠原道隆の履歷を記して諸者諸君に報道せいたす可し

道隆は舊幕旗下の士笠原新左衛門の長男にて幼名を新次郎と呼れしが不幸にして早く母を失ひ其後父新左衛門は同旗下なる尾形兵衛の娘を後妻に娶り程なく男子を設け、るが此の新次郎の繼母は性質極めて愛しければ尋常普通の婦人の如く、異腹兒の新次郎を憎むことなく、イヤ憎むことなきのみか義理ある中なればとて吾が生兒の峰雄よりは一層哀隣を懸けて生育てけるか新次郎は頗る利發の者なれば繼母の恩愛を感じ其胸中をも推察し且は其身多病にて弓馬の箕裘を繼ぐ可くも非ず殊に早く母を失ひたるより幼より無常觀を養へ自ら菩提心を起しければ勞以て世を桑門に避け弟に家祿を讓らんものと意を決し幸ひ母方の叔父なる某が經宗の僧にて深川妙道寺の住職になりてをれば之に便りて云々の意を告げゝるが叔父の僧も其志を殊勝に思ひ故と父よも母にも告げずして叔父の獨斷を以て出家を遂げしめ名を道隆と改めしは新次郎の十二歳の時にて卽ち慶應元年の佛生日の事にてありき父も母も後に其事を聞きて大ひに驚きたれども一回出家を遂げたるものを今更還俗もさせがたければ遂に其意に任せけり其後戊辰の變革に父の新左衛門は上野の戰爭に討死を

遂げ弟の蜂雄と繼母は舊知なる在處に引籠りけるが元來叔父の僧は道心極めて堅固なれば一回出家を遂げたるからは俗緣の交際を斷ざれば眞の修行を爲し難しと道隆にも父の新左衛門にも堅く說諭しければ新左衛門の在世の時より音信不通なれば況て新左衛門の沒後は愈〻疎遠に成りもて行き道隆は其後京都に登り本山の學校にて佛學を修め世尊成道の年に此の日正寺の住職と成りけるが斯る仕宦なれば繼母と弟とは此の數年來音信不通にて互に生死を詳かにせざる程の有樣なりき」佛家の敎誡に曰く出家は出家後の出家こそ肝要なれと儒道の訓誨に曰く始め有らざるなし克く終り有る者鮮しと噫眞なる哉道隆脩行中は道心頗る堅固にて先達の賞感に預り年僅かに三十にして早くも一院の住職に登げられしが怠惰は惡魔の宿るところといふ世の諺に洩れず此寺に住職してより衣食に事を欠ぬ身となりければ自然に怠惰の心を生せしに檀徒の中に田中河上如き惡魔ありて丁人の機を攝りて自家の利益を營んものと漫に酒色を勸めければ何時しか之に導かれて吾知らず道心の薄くなり始めは飲酒の戒を犯し次に邪淫の戒を犯し昨日の淸僧にひきかへて今日は一個の賣僧とはなりけるなり

道隆は稍有て垂れたる首を擡げ

笠原「二三の調中を始め、日曉さんの耳にまで彼事が聞へたからは、余も其覺悟をしなければならんが、夫に就いても、憎い奴はアノ河上だ、多くの調中の中でも、就中親密な交際をしてゐるのに……」

淸兵「シテ、お覺悟とは……」

笠原「サア今度の開帳で、存外收入金の有るのを幸ひ……チヨッと淸兵衛さん耳を……」

笠原は田中の耳に口を寄せて何か密々囁く折から柱時計の三時を報ずる聲響然雛僧の道圓が出來りて

道圓「お上人樣御說敎の時間になりました

第三回　予故の暗

往來の人の斷絕を談話の機會にして、甲一句、乙一語、さも親睦しき容子にて、其名も婀娜かしき相合橋筋を北へ指して步み來る、十七八の娘と二十七八の男、孰も富る家の子にてわらぬと見えて、娘は鳴海の浴衣に唐縮緬と黑の南京繻子の晝夜帶を締め、男は阿波縮の浴衣に小倉の帶を締たれど、娘も男も十人普通勝れたる美女と美男なり

男「お時さん、今夜は大層早かつたね、未十二時にはならないやうだ

娘「ア、、雇はれて行てる先が、內の親類だから偶には早く歸つても構はないが、此間から用事の都合があるから、是非泊つてくれといふのを、阿母さんが淋しがるからと言つて、

強いて此うして歸つて來るのも、貴郎の露舗歸りと一所に、此うして同伴つて歸りたいからのこと、夫に此頃のやうに雨降が多くて、獨りで歸る晩の時々有るのは實に悲しくッて物態無い事だが毎でも造物者の意地の惡いのを怨んでゐるので……然し妾と貴郎と如此な交際に成てゐる事を、貴郎の内の小母さんは未知ては居まいねへ

男「イヤ、少しも……縱令此うして同伴つて歩いてゐる處を見認られても、隣裏ではわり、心安くはあり お前が、南地の富永へ手傳に行てゐる事も知てゐるし、私が恰是その富永の近所へ舗を出してゐる事も知てゐるし、夫に又時々は道具の荷物を懇意先へ預けて、手空で歸る事のあることも判つてゐるから、互に歸る時刻が合一に成たから送つて上げると言へば夫ですむから、何にも心配は無いが……お時さん何時ぞは聞うと思てゐたが、お前の亡くなつた御父さんは何商賣をしてゐした

娘「妙な事を……、妾の阿父は八足請負でしたが、奥羽の戰爭に德川の脫走の伴をして、函館で死亡つたと阿母さんの話しです、ッシテ貴郎も元からの古道具屋さんでは無いさうで……

男「私も面目無いが、阿父は武家奉公をしたもので、今は見る影も無い商賣をしてゐるが、姓名許りは昔日の名殘で、小泉要一など、道具商には不適當な嚴格い姓名、是が士族の商業の看板です、夫に阿母は今に士族性質で、兎角嚴格い事計りいふので困つてゐるのです……お前は別に兄弟は……

娘「ハイ東京には尙一人姉が有るといふことですが、何か子細が有て音信不通で、マア無いも同じやうな身の上、妾の便りに思ふのは、御母さんと……アノ……

言と共に握りし手に力を入て

娘「貴郎さん許りだから萬望行末かけて保證者に成ておくんなさいよ……

男「夫はお互の事さ……モウ餘程往來が淋しく成た、アノ辻を曲らうと尤も睦じく話し合ひて大寶寺町を西へ來か、る向ふより月の光りに見認しか、出合頭に女の聲

女「オ、要一ぢや無いか、此處へ來るのは……」

不意に聲を懸けられて男は佇立り月に透して

男「オ、貴女と……何方かと思ひましたら永井の御隱居……此夜更にお伴もお連れ遊ばさないで、何處へおいでゝございます女は尙も要一の樣子を見て

女「滿一年程見ない内に、大層老くるしう成たのと、夜目で見たので、萬一間違はしないかと思つた……實は急な用事でお前の内へ來のだが、南區の大寶寺町の裏へ轉宅したと許

りで、番地を知らなかつたものだから、宵から彼地此地尋ねたが、ドウも判らないので、出明日直さうと斷念めて、今から腕車で宿まで歸らうと思つて、此處まで來たが、南の方から來た人影が、如何もお前に似てゐるので、夫で聲を懸て見たが、お前で有たので誠に慙しい

男「オ、然うでございましたか、神戸から夜をかけて、故々おいでとあるからは、緊要的な御用でございませう、然し夫は宅で承はる事として、至つて汚穢しうございますが、私が御案内を致しませう……お時さん憚りながら、お前一歩先へ行て、私の内へ寄て阿母に、永井様の御隱居様をお同道申すからと、一寸知らしておくんなさいな

お時は耻かしさうに永井の老婆を會釈して

如「ハイ畏りました

老婆はお時の迹を見送つて

女「温厚しさうな女中、要一、お前のお連合かへ

要一は暫時返辭に詰りしが

男「イエ、ナニ、彼女と隣裏の娘でございまして、平常心安く交通をするものでございますが、私の露舗を出しますところと、彼女が手傳に行てをりますところと、同じ土地なので、今晩も歸途が一緒に成りまして、連立てまゐりました

女「オヤ、然うかへ、妾は又、年齢といひ、妾色といひ、恰是似合の夫婦だから、お前のお上さんかと思つてオホ、、、、

此る處へお時の報知に要一の母お町は提灯を片手に忙がはしく出來り

お町「オヤ、マア、御隱居様、如何遊ばしまして、此夜深に、妾共などを故々お尋ねでございます、御用が有れば、端書で仰しやつて下さりさへすれば、妾なり、要一なり、すぐ神戸まで窺ひますのに、先の宅よりは又汚穢うて狹隘くろふございますが、マア萬望ヂキ向の裏でございます

お町要一の母子は永井の隱居を吾家へ誘ひ、茶よ、菓子よ、團扇よ、蚊遣よ、と心の限り待遇しけり

永井の隱居政子は小泉母子が昔時忘れぬ厚き待遇に滿足の色を面に露して

政子「お町も要一も毎も壯健で何時結構だのふ……ナニ氷……アノ妾は氷は嫌ないから……

……ラム子、ラム子よりは、却てお茶の方が好いから決して構ふておくれで無い

お町は團扇にて政子を扇ぎながら

お町「貧乏暇無しで要一も妾も只稼業の事に計り關係てをりまして神戸と大阪の間、滝車

でまゐれば一時間も懸りませんのにッイ御無沙汰をいたしまして

要一は新渡の茶碗に煎茶を汲で政子に進めながら

要一「毎も母と、濟ない〳〵と口では申してをりながら、本年になりまして、未一回も伺ひませんの

政子「稼業が繁忙しければ、夫程の事は無い無沙汰は互ひの事で、妾の方でも何か用が無ければ出て來ないから

お町「若樣は定て相變らず會社へお勉めで……

政子はお町が若樣と云ふを聞くより忽ち目に涙を浮べたるが額の汗を拭ふふりで汗拭にてソト押え

政子「ハイ、妾が此うして單身で出て來たのも、其豪雄の事に就いて……

お町は顏色變へ

お町「エー若樣が如何か爲さいましたか

要一は、若や豪雄に病死等の不慮の事のありしか、若然る事ならば書狀にて報知の有るべきに、後室が此く故々出來るからは他に事故の有るならん、其仔細は何事かと心の中に想像を廻らしつゝ、迂濶に物も言へねば、只膝に手を置て默然として聽居たり、政子は涙に鼻をつまらせて

政子「お前方の知ての通り、彼は去年から神戸の支店詰に成たが、未三十に間もあり殊に獨身の事だから、若登樓に身を誤つてはと、老婆心の思ひ過しをして、妾も一所に轉居して來て、お前と永井の家の次男、當然なら分家するか、又は他家へ養子に行く筈を、長男の彼れが、生さぬ中の妾へ義理を立て家出をしたので、お前は永井の家を續げたのだから、義理を立てた、長男へは勿論草葉の陰の父さんへ對しても、名を揚げ家を興して、孝悌の道を全ふせねば成らぬと、朝夕口癖しいまで誡言をしてゐたので、自分も頻りに奮發して、戰國の世の昔と違ひ、今では商業の世界だから、槍や刀を筆と算盤に換へ、生活の戰場に功名して、天晴商人の大將に成て、永井の家名を揚かすと、會社の勤務に勉强してゐたが、當一月此大阪の取引先へ、年始に來た時如何して見始めたか、島の內邊とかで淸元の師匠とかをしてゐる、露野お道とかいふ女とか、り合ひ、夫から後は打て變り、會社の勤務も浮の空、商用に假托けては大阪通ひ、其女の爲めに多くの金を使ひ、會社の金にも少しは手を附け、朋友親戚にも負債を造へ、尙その上にお前も知つてゐる、先の旦那が御存命中よ、是は新次郎へ遺物に遺るのだと、平生言て在しつた探幽の軸物、アレをば持出して抵當にでも入れた樣子、昨日彼が脫却た洋服の隱袋に手紙が入れて有たのを、何心なく引出

し見たら、お預りの探幽の軸物、然るべき買人の心當りが出來たから周旋すると書いて有つたが、書狀を出した人は、大阪の骨董商のやうに思はれ、又文意に依て考へると、彼に金を貸して軸物を預つてゐる樣子、若彼の軸物を他人へ賣れでもしたら、今にも新次郎に遲延した時先の旦那のお志を通ずる事が出來ず、彼が親不孝になる計りか、妾も旦那に辯解かれいので、種々思案を廻らして、不圖思ひ出したお前の家の稼業、今でも要一が道具屋をしてゐると云ふから、若しやお前の手で探索は出來まいか、出來る者なら仕て貰つて、內證で妾が賣受けをしておきたく彼には大坂へ保養に行てくると、程好く言て出て來たのだが、如何か工夫はあるまいか子ェ

要一は政子の方に膝を進め

要「シテ其書狀の差出人の姓名は……

政子「夫が判つてゐると都合が好いが、肝心姓名の處が破つてゐつて……今も言ふた通り大概骨董商だらうとは書狀の文句に依た妾の想像……

お町は始終を聽いて袖に涙を押え

お町「アノ若樣が爾ういふ御所業を遊ばして、貴女に御勞をお懸け申すのも、原は妾へは慨しい妾がお乳をお上げ申し、最初の御養育が行屆かなかつたからのこと、今更陳辯がでございません

政子「イヱ〳〵、彼が不品行は妾の教育が惡かつたからの事、何でお前に罪が有う、夫に附けても要一も未獨身の樣子、悴のやうな過失はあるまいが、前車の覆轍は後車の訓誡とやら、程好い嫁が有つたら早く持せるが好い、オ、其樣な餘談は偖置て、要一、今の話は何とか工夫はあるまいか

要一「ハイ、同業の者の手に、其御軸物が渡つてゐるに相違なければ、廣いやうで狹いは仲間の區域、尋ねて知れん事はございますまい、明日中には探索して吃度宜いお返事をいたしませう

政子「夫は誠に忝けない、オ、然う〳〵、先月轉宅してから未繁忙紛れに知らさなかつた、翠雄の今の住居は此處だから、その樣樣の判り次第、妾の名當で、お町の名前で、他事のやうにして報知して下さい

と多葉粉袋の中より活版摺の一葉の名刺を出して要一に渡せばおし戴き

要一「ハイ委細承知いたしました

折から一時を報知する時の大鼓の聞もれればお町は心配想に

お町「モウ一時でございます、汚穢ろしうはございますが今夕は妾方に……

政子「イヤ北濱の水明樓へ宿を極めて來ましたから
要一「デござりますか、ヤヤア、帳場へ參つて腕車を命じてまゐりませう

第四回　内談

隣室は清元の浮たる調子に反對て、此室は蕭然とした内部の相談、以前主從の交際とて、永井政子と小泉要一、親密しき中にも禮儀正しく、會席料理の膳を扣へ、好まぬ酒も談話の体裁、互ひに猪口の獻酬しながら

要一「お宿では何かお差閊が有つて、お話が出來ないから、此家までまゐれといふお使に任せて、何の氣も無く親ひましたが、此樣な御馳走に預りましては、却て恐入ります譯で……

政子「イヤ、其遠慮には及ばないよ、此間は深更に推參で種々世話に成て、其節頂た軸物の一件、預け先の骨董商が判つたといふ、お前の方からの報知が來たので、取る物も不敢取出て來たが、繁忙しい中を氣に懸けて、早速間合してくれて何苛添け無いぞや

要一「イヤ、如何致しまして、是式の事、何のお禮に及びませう……書狀でも概畧申上げましたが、お軸物を抵當に、若旦那へ、七十圓の金をお貸し申した骨董商は、八幡筋の眞田五兵衛と申す者で、其事の判りましたのは、妙な都合で、其眞田といふ人は、此間の晩、途中で一寸目通り致しました、隣邦のお時といふ娘が、毎日手傳に參つております、南地の富

永といふ青樓の客人で、一昨夜其眞田が、富永へ參りまして、酒の上の世間話に、余の内に探偵の如此々々いふ圖の軸物を、神戸の或方から預つてあるがと言ひ出したのを、お時さんが其席に居合せて傍聽て、豫て余が、お時さんに、お前の手傳に行く富永は、人出入の多い内だから、モシお客の内に、如此な談話をする人が有たら、直ぐ余に知らして呉れと頼でおきましたものだから、其晩の内に聞せてくれたので、昨朝早く、余が眞田の家へ行て、御内情を明して頼みましたら、眞田といふ人は、事の判つた男で、爾う云ふ事情なら否やは無い、利足の處も二半のお約束だけれども、二に貸て上るとまで、其坐で談話が纏りましたので……

政子は左も喜ばしげに

政子「何から何まで、一方ならないお前の心配、實にお禮の申しやうも無い、夫に就いて其の軸物を私の手許で請出して置いては後日峯雄が知つた時に、親子の間だけに止まつて、訓誡が利かない理だから、妾も種々考へて、お前の方へ知らせる前に、高麗橋二丁目の青木彌兵衛といふ親類へ立寄て、此事の内情を話したら、爾う云ふ事情なら余が請戻して、入用の時まで預つて置いて遣らうと、青木が親切に云てくれるので、万望然うしてと頼で來たが、其眞田の方へは如何いふ通びにしたものだらう

要一は縣へ手を置て暫時考へ

要一「眞田の方から其御軸物を青木樣へ持參して、品物と引替に、直接に金子を請取らせたら、一番捷徑でございませう

政子「オヽ、成程夫が好からう

要一「當然なら余が毋でも、眞田さんと一所に參ると好いのでございますが、後日若旦那に此事が知れました時に、何だか都合が……

政子「品物と金子を引替にするのだから、別段立合人も入らないやうなものだが、お前が爾う思ふなら此うしたら如何だヘ、此事を聞き出してくれたアノお時さんとやら、アノ娘はその眞田といふ人とも知た中で有うから、お前の代りに眞田に附添ふて、青木の方へ行て貰ふとしては……

要一「夫はモウ、余から賴めば容易い事でございます……

政子「ヂヤア、爾うして下さい、妾の方から青木の方へは、眞田といふ骨董商は知らないが、一緒に附いてくる娘は、年紀容顏は如此云々だと、委しく云て置きませう、全体なら此取引の濟まで、妾が此地に滯留してゐると好けれども、生憎社の用事があると云て、峰雄も此地へ來てゐるから、ソウ〳〵二人とも內を明けてゐる譯にもゆかず、夫に妾が此地に暴く居て、峰雄に可怪く思はれても都合が惡いから、妾は青木の方へ宜く賴み置て、今晩は神戸へ歸ります、青木は妾の內へ來て、アノ軸物を數回見たことがあるから、決して間違はあるまい、總ての事は何分お前に賴でおくから、此上ともに宜しく……

要一「ハイ委細承知致しました、只今も申します通り、預り主が品物を持參して、引替に金を請取るのでございますから何の事はございません、然し念の爲でございますから、先夜戴きました若旦那の御名刺を、眞田に持して遣りませう……ソシテ眞田の方から若旦那の方へと、貴先の方から、急に都合が有て謝絕て來たから、とか何とか、程好く取消してきへ貰へば、失敬ながら、お話の若旦那のお手許では、急にはお請戻しはおむづかしふございませう……又其內に機會を見て、及ばずながら吾共母子から若旦那樣へ、貴女樣が御心配の程を申し上て、宜しく、御諫言いたしませう、根が御發明の若旦那でございますから、何日まで御放蕩も遊ばしますまい

政子「汝も峰雄も同じお町の乳で成長ち、殊に峰雄は學校へ通はせて、普通の教育も請けさせたのに、汝は實貞に稼業を働いで、一人の親へ孝行盡し、峰雄は放蕩に身を持崩して會社の勤務も怠りがちで、一人の親に心配懸け、其行狀は雪と墨、是も全く此の妾が、一個の子ぢやと放任し、學校の教育に計り依賴せて、家庭の薫陶を怠つたからの事、れ町に對し

ても而目無い

翠一は額の汗を拭ひて

翠一「御後室様、何を仰しやいます、余の働くのは、働かなければ其日が過せんからの事でございます、結構な御身分な若旦那と、其日稼ぎの余と、貴女、何で一つになりますものかあ、い、い、阿々々此の大暑の砌に、格外御心配遊ばしては、御身体の爲めに悪うございますから、成丈御保養遊ばして……オ、彼方の座敷で又清元が始まりました、アレをお肴に今一盃お過し遊ばしませ、失敬ながら持合せを……

政子は倘も眉を皺め

政子「アイ、難有う、然し妾は清元は……

翠一は政子が清元は……の一語に脳を刺撃され、ホイ失措た、清元と若旦那の敵だッけと、思ふトタンに手が慄へて今しも獻んとせる杯を壜よ取落し

翠一「オ、是は失敬を、飛だ疎忽をいたしました

第五回　妾宅

島の内壘屋町の中程にて、表構へは二間間口、格子造作に女竹垣、簡潔とした意氣な住居、家元書風にて清元連と書る票札を打ち、驛鈴を附けたる門口を手輕く開けて入來る男は、年齢二十七八にて白の薩摩上布に、唐紹の羽織、薄き鼠色の奈翁形の帽子を脱いて片手に持ち西陣織の絹の汗拭にて額の汗を拭ひながら

永井「オイお蓮さん、水を一杯

主人お蓮は竺仙染の浴衣に縮緬と黒繻子の畳夜帯を斜に引上げに結び美しき顔に笑を帶て出迎へ

「オヤ永井さん、何ですッテ、入口から水なんテ……マア、お上りなさいましな、大層赤いお顔、何處で飲酒ッたの……

客人は白晒革の鼻緒の表附の下駄を脱却て中の間へ上り

永井「イヤ、酒は飲まないが、格外急いで來たものだから……今朝から眞田さんと來おいか、一回も……

「眞田さん……眞、アノ梧葉さんの事ですか

永井「左様、アノ五兵衛、イヤ梧葉さんに預けて置いた物があるのを、好い買人が出來たから賣ては奈何だと故々書狀を寄來して置て、人を馬鹿にした

「旦那、マア奥へ入しッて、御浴衣とお着替遊ばして、緩々りなさいまし、モウ稽故は仕舞ましたから

お蓮は卽て冷しヲムヲを硝子盃に汲でハイと捧ぐるを永井は一息に飲み干しそのまゝ奥に通りて浴衣と衣替へ下婢の汲來る金盥の水にて手拭を絞り總身の汗を拭ひて紅革の座布團の上に豐かに坐を占めお蓮が差出す深草團扇にて胸の邊りを扇ぎながら

永井「如此な事をお前に話したくは無いが……と言ひ懸けて永井はお蓮の顏を見るお蓮は莞爾笑ひ掛け

お蓮「何ですねへ、他人行儀な、話したくは無いなんテ……此うしてお世話に成てゐる妾に、何故其樣な水臭ひ事を仰やるの……

永井「又心經症が始つたよ、ダカラ、何も話さないと言ふのでもないやな、ソラ、先月……下寺町の日正寺に身延山の靈寶の開帳が有て大層賑かだとお前が話してゐた時……何だか急に金の入る事が出來たとお前に頼れた時、生憎少し都合が惡かつたので阿母に內證で阿鉛の紀念の貴重の軸物を銘と持出して、アノ梧葉さんと商賣柄だから內情を明して抵當に取て貰つて、暫時七十圓貸して貰つたが、百五十圓で買ふといふ人が有るから賣つたら如何だと五七日前に言て寄來したので、余も少し金の入る事も有り、お前にも豫て約束の繻珍の帶も買て上げたいから、寧そ賣て仕舞はふと決心して出て來たら今朝宿へ書狀を寄來して、急に違約の謝絕だから、逢ふて實際の樣子が聞いて見たいので今內へ行ッたら不在だといふので萬一お前の內へ來て居りはせんかと思つて……

お蓮「オホ、、、、夫は飛だ違變で、妾までが失望とやらの御相伴で詰りませんねへ……

永井「然し軸物一幅で百五拾圓に賣れるとは、サゾ美麗なものでございませうねへ

永井「ア、絹地へ探幽か水中の鯉を二尾畫いたので、大きサガ……床の間に懸けたる松年の筆の瀧の軸を指し

永井「横物でアレよりは少し幅が廣い、表裝は蜀江の錦で、軸と一角で、何でも余の先祖が將軍家から拜領の品ださうな、探幽の畫には龍虎だの、人物は能くあるが、鯉なぞは滅多に無いので、夫で格別價が好いさうだ

お蓮「お話を伺ッたいけでも結構だらうと思はれますから、寶物を拜見したらサゾ……

お蓮は永井が脫却たる衣裳を衣紋竹に掛けて樣端の軒に釣下げ時計と紙入を桐の小箪笥の抽斗に入ながら

お蓮「今日はお名刺入は……

永井「名刺か、名刺は紙入の中へ入て來たから別に……

お蓮「オヤ然うでございましたか

永井は煙管に紙卷煙草を狹みて戴らしながら

永井「お蓮さん昨日と書間から御愉快で……
お蓮「貴卿、昨日おいでなすつたの、妾の留主へ、マア眞正に困るんですよ、お梅の忘却つぽいのには、妾に何にも言はないで……
永井「今度は阿母と一緒に出て來て同じ宿に居るので出苦くッて困つてゐたが、昨日晝後に阿母が高麗橋の親類へ出掛けたので、すぐ其迹から宿を飛出して此處へ來たら、南吉へ行たと云ふことだから、除程押懸やうかと思つたが、待て暫時、嫉妬じみてゐると思はれても遺憾だと思ひ返して空しくお歸りサ
お蓮「オヤ然う、實はお客に誘はれて、會席の御相伴といふ食氣の方でして、オホ、、、、
永井「フン、如何な食氣だか、此の熱いのにノコ〳〵出掛けて行く位だから、大概御客は笠原とかいふ人だらう
お蓮「オホ、、、、否ですよ
永井「口で輕蔑して心で賞賛てか子……イヤ冗談ぢ冗談アノ笠原といふ人は稽古に來る連中の中かへッシテ何處の人だへ
お蓮「オホ、、、、無三四の演劇のやうに笠原々々ッて、アノ人は、ホラ過日、貴卿と網船のお伴をして、其歸りに貴卿が、何か御用が有ッて、浪華橋から船をお上りなすつて、爰に

築地の竹式で待慾を喰はした時……
永井「大層長い冒頭だなア、彼時は生憎船から上ると直に高麗橋の青木の老人に執つて、其樣な事は如何でも好が、夫から如何した
お蓮「彼時妾が珠の簪を川へ落しましたらう、アノ簪を拾つてくれた人で、夫から一寸心安く成たので、道中でも何でも無いのです
永井「エ、簪を拾つた、簪を……其簪をお前の所有と知てるのが不思議だねエ
お蓮「ハイ、夫で、アノ……
折から下婢のお梅は無遠慮に暖簾越しの高聲
お梅「お師匠さん髮結さんが……
永井「何だ今頃から
お蓮「明日一寸
永井「又御愉快筋か呵々々々
お蓮「笠原ぢやア有りませんかオホ、、、、おまやんかもじを出して解きかけておくれ

第六回

軸物

丁稚「旦那樣、此名刺を持て、綺麗な娘と、强らしい老爺と、二人連で……

主人「コレ、〳〵、何と云ふ物の言ひやうだ、娘だの、老爺だのと、ソシテ、何の御用が有て……」

丁稚「ヘイ、今朝端書を出して置きましたが、エー、アノー眞田……幸村……イヤ五、五兵衛と申す者だが、一寸御主人にと云て參りました」

主人は丁稚の渡したる名刺を手に把て「永井畧雄フーン」と口の内にて默讀して

「此方へお通し申せ……コレ〳〵、奥の離室へ御案内しろ」

前記の手續にて高麗橋二丁目の青木彌兵衛方へ入來りし男女の二客は、一客は年齢四十七八の骨董商風の男、其名は眞田五兵衛、一客は十七八の中等以下の商家の娘風の女、其名は米津お時、男は萌黄の風呂敷に軸物と箱かと思はるゝ物を包たるを横へて先に立ち、女は左も耻氣なる樣子して其迹に從ひたり、丁稚の案内につれて廊下傳ひに中庭ひとつ隔てたる離室に通れば、主人彌兵衛は坐を構えて待てをり、主客互に寒暄の挨拶を了るが否や、五兵衛は少し詞を改め

五兵衛「エー私は御親類の永井樣と豫て御懇意に致します、眞田五兵衛と申す八幡筋の骨董屋でございますが、同業の小泉要一から委細を承はりまして、此においでのお時さんを證據人にお伴れ申して、例の軸物を持參いたしました、何卒お改めの上、お請取を願ひます」

彌兵衛も詞を改めて

彌兵衛「私は青木彌兵衛ですが、永井の隱居の内情から、アノ、要一どのとやらを以て、御無心た儀を申し上げたが、早速の御承引で、千萬忝う存知ます、シテお前さんが要一殿の心安う成されるお時さんとやらで……」

お時は顔に時ならぬ紅葉を散してさも恥しげに

お時「ハイ、妾が時でございますが、要一さんのお賴に依りまして……」

彌兵衛「夫と御苦勞樣……眞田さん、今朝は又、御叮嚀に御端書を……」

五兵衛「イヤ、別段御照會申さいでも、永井樣の御隱居から萬々御承知とは存知ましたが、此樣な事は至急に事を辨じる方が都合と心得ますのに、若今日推參して御不在でいもある」

と、双方の……

彌兵衛「イヤ、實は私方から伺ふのが本意ですのに御多用のお前さんをお喚附申して……」

折柄丁稚が運ぶ煎茶を五兵衛は叮嚀に戴きて

五兵衛「何卒、お構ひ下さいますな……早速ながら御主人一寸品物を御點檢下さいまして……」

彌兵衛「ハイ、此の幅は永井の先代の秘藏品で私も一二回見た事があるが、真田さんには嫌はれる方ですが、書畫や骨董はあまり好きんもんですから、ツイ碌様氣にも留ませんで呵々〻〻〻〻

と言ひつゝ、五兵衛が包みし風呂敷を解いて恭しく差出す箱の蓋を開け、白地の絹に包みたる一軸を把出し、手早く紐を解きて軸物をおし展べ

彌兵衛「永井の隱居が貴重がる筈だ、成程華美だ如何にも、綺麗だ、氣のせいか、鯉が活てゐるやうだ、大きな鯉だ水の上から姿の透いて見ゆるところ妙々……探幽齋筆か……表具の錦も美くしいものだ、全是新らしいやうだ

お時もうち見て感じ入りたる樣子にて

お時「妾は只今拜見いたしますのが初めでございますが、實に美くしいお軸物で……真正に鯉が動いてゐるやうでございます、法界坊の演劇に鯉魚の一軸と云ふ寶物がございますが、如此なのでございませう

五兵衛「御承知の通り探幽に如此な圖は珍らしうございますのに、非常の出來でございますから、格別結構でございます

彌兵衛「イヤ拜見いたしました、確かに……

と云ひつゝ、彌兵衛は軸物を卷納め豫て用意して置たる十圓紙幣七枚と外に一對金を五兵衛の前に差出し

彌兵衛「品物は確かに落手いたしました、拜借の金子七十圓何卒お改め下さい、エー又是は、甚輕少でございますが御謝儀の印章ばかり

五兵衛「元金は頂戴いたしますが、先刻の書狀にも申し上げました通り

彌兵衛「イヤお志は忝く承りましたが是は眞の、何卒左樣仰しやらずに

五兵衛「折角のお思召でございますから、本意でございませう、シテ、品物とお引替にいたしましたが左樣なら頂戴いたして置きませう、シテ、品物とお引替にいたしましたから別にお請取はいたしません……永井さんとは格別の御交際で一時の御融通をいたしたので、實は此のお幅もお預り申しません位の心得でございましたから、別段証書もいたゞいて御坐いませんから……

彌兵衛「イヤ、此樣に貴君から直接に品物をお請取申す以上は、請取と互に不用でございます

五兵衛「早速です、少々他に商用もございますから

彌兵衛「氷水の換りに麥酒を呈る目的で、命令でございますから、マア、最う暫時

五兵衛「折角の御心遣でございますが、取急ぎますから、夫にお時さんも餘儀無い用事が……

萬望永井の御隱居樣へ宜敷……

彌兵衛「イヤ、申し聞けます、然し意外お構ひ申しませんで……お時さんとやら御苦勞さま、此邊へお出での節は又お寄ンなさい、今日は生憎娘が學校へ行て、彼でもそると、お話相手に成るのに……」

五兵衛お時の兩人は挨拶さへもソコ〳〵に青木の方を立いで、足早に西の方へ赴く折から、規車に乘て向より來かゝる男が、二人の樣子を見て何か、思案をしつゝ、行違ひても尙躊躇りて後姿を目送る間に、車夫は懲て心得たりけん青木の門口に楫棒をガタンそのトタンに郵便の配夫が青木の店頭へ對書を投込みて

「郵便――」

五兵衛お時の兩人が立歸りし其迹へ引違へて青木の離室へ入來りし男は森川信三といへる金貨の周旋を業とせる人物なるが主人彌兵衛とは平素親睦き交際と見えて格別遠慮する容子も無く

信三「青木さん、イヤ御主人、今御邸家から、五十位の男と、十七八の娘が、同伴ッて出たがアノ男は、疾うから御交際ですか」

彌兵衛「ナニ懇意では無いが、一寸用事が有て……時に今日ど君に見せる物がある、余の所有では無いが、君は豫て書畫などが好きだから……余は名人上手の筆を揮つた繪でも、繪双紙屋の店頭に釣下てある錦畫でも、同じやうな感覺で、只奇麗でさへあれば、好いと思つてゐるのだが、マア一寸御覽此品を……」

彌兵衛は五兵衛が置て行きたる一軸を信三の前に差出す折しも丁稚は郵書を持來りて彌兵衛の傍に置き

丁稚「神戸から郵便が……」

彌兵衛「ウン良し〳〵大概此の軸物の事だらう……」

彌兵衛は郵書を手にも取らず、森川が展覽する軸物の方に眼を注ぎ、森川は此の名畫に向つて、如何なる賞贊を爲すか、如何なる品評を下すか、定めて其妙に駭くならん、定めて其美に感ずるならんと、吾が所有他の所有の差別も忘れ、滿腦の智覺を双眸に籠め、ヂッと見詰めて居たるが森川はひとわたり見て莞爾一笑

信三「成程、如何にも感心です、能く是程に……御購求成すつたのですか」

彌兵衛は此答を聞て尙得意然と

彌兵衛「如何です森川さん……捨賣にしても百五十圓なら、即刻よも購買人が有るそうです書も却々輕蔑れないものですなア」

森川は冷々然たる樣子にて

信三「呵々々、、、百五十圓……左樣――正筆なら二百圓にも賣れませう

彌兵衛は尙も莞爾に

彌兵衛「ヂヤア、百五十圓に買人のあるのは當然かな呵〻〻

信三「エ、、何品をです

彌兵衛「此の軸物をサ

信三「呵〻〻、御主人、落欵は有りますが、此の軸物は全く僞筆です……感心に似せてはあるが……

彌兵衛は少し遽てゝ

彌兵衛「エ、、ナ、、ナニ、是が僞筆……

と言ひ掛けしが又莞爾一笑

彌兵衛「戯言を言てゞ不可ない、余が何にも判らんと思つて……失でも君、現在七十圓の抵當品に取てゐた人があるのだものを……然も歴然とした骨董商が……

信三「誰が是を呵々々、是を誰が呵々々、七十圓、七圓でも呵々々、ソシテ貴君誰からお購です

彌兵衛は眉を皺めつゝ

彌兵衛「イエ、購求たのでは無いので、今君が尋ねた、娘と同伴ッて來た、眞田五兵衛といふ骨董商が持參したのです

信三「今の男……眞田五兵衛……ハテナ、吾も判然とは、記憶ませんが彼の男は露店出しのガラクタ道具屋で、此間も松島の天神の緣日の晩に、客と喧嘩をしてゐたのを見懸けました、今お店の門で摺違ふた時、何でも見た顏だと思つた處から、松島の喧嘩を記憶して、今日は大層華美な粧飾をして、お店から出て、何故アノ男が、と不審に思つてゐたのです

彌兵衛は之を聞いて小首を傾け

彌兵衛「夫は怪しからん、ハテナ、是は妙だ、然し永井の老婆が、道具屋は知らんがハ年紀十八九、容貌は云ふの、名はお時と云ふ娘が附添ふて、峯雄の名刺を持ッてまで云ふて置れたが、其通りの娘が附いて、名刺を持て歴然に、姓名を名乘つて、豫て見た事のある軸物を持て來たのに……ハテナ如何も合點が行ぬ、峯雄が萬一始から僞物を、イヤ〳〵、マサカ、其樣な事も……

彌兵衛が思案にくれてゐる顏を森川は眺めて

信三「御主人、是には何か深い仔細が有りませう、何にしろ、今の二人が怪しいやうだ、吾の考案では……ユリヤ事に依ると詐僞かも知れない

此時彌兵衛は始めて神戸より來りたる郵書に心づき急き封を切り讀下し

彌兵衛「フーン」

と溜息を吐いてゐる森川は左こそと膝を進め

信三「夫は永井さんとやらの御書面ではございませんかい何か此事に付いて異條は……

彌兵衛「左樣――申し置くのを失念したが懸物の箱の裏には、家名が書附てあるから、念の爲め御報知申すと書いてある

と言ひつゝ、彌兵衛は手早く箱の裏を改むるに何事も記し無く然も軸は一角と開置しに是は尋常の象牙なる事まで發見しければ愈〻偽物なる事の判然せしが爰に至りて考え見れば、附添ひ來りし娘も何處やら違ふやうなれば兩手を組で益〻五里霧中に分入けり、森川も共に恐を凝し

信三「御主人、此樣子でと、何でも、アノ露店出しのガラクタ道具屋が、何處かで此事を嗅つけて、一杯やりに來たに違ひ無いから、早く警察へお屆けなさい、差當り其他の分別はありません

彌兵衛は組たる手を解き

彌兵衛「御助言は如何にも添け無いが、熟々考へて見ると、永井の老婆の話では、此事を托した男は、小泉要一と言ふて、以前の家來筋の者で、今に昔の恩義を忘れず、若いに似ない實直な人だと云つて居たのに、お時といふ娘が持主の名刺まで持て來たのだから、萬一此小泉と云ふ男も協謀かも知れん、夫是の事を考へると、僅少の金で、多勢の罪人を造へるのも本意で無し、夫に然うなると自然永井の家名も余の家名も、其他に少し言ふに言はれぬ永井一家の内情も世間に暴露とする理由だから、マア、公邊沙汰にする事は後にして、其要一の住宅も聞いてゐるから、先づ要一の容子から窺と詮索しませう、結局ところ、余が七十圓の損をすれば夫で事の濟むことだ、詐偽に來た奴輩と惡ひべきだが、其原を糺せば、此方にも不注意の過失は免ないから、七十圓只取れても仕方の無いのを、散々偽物にもせよ、華美に表裝した、絹本の軸物が一幅殘れば尚可い内だ呵々々々

森川は金滿家の度量は又格別と心の内に感心して

信三「イヤ恐入りました、貴君が然らいふ寛大なお考なら吾も其氣で、アノ露店道具屋に少し心當りがあるから、密に探索して見ませう

彌兵衛「万望宜しう、然し成るべく穏便に……イヤ是に附けても實に油斷の出來ない世の中です呵々々々

源七「佐兵衛さん、サテ此ら成て見るとお氣の毒なのはお上人様です、夫はモウ、酒に狂ひ色に迷ッた揚句に、今回のお開帳の收入金を掠奪さうとしたのだから、謂はゞ邪淫飲酒の二戒を犯した上に、妄語倫盜の二戒まで犯したやうなもので、貴重な五戒の内で、犯さないものは殺生の一戒許り、其點から云へば罪人に相違ないが、佛陀で無い以上は、イヤ、如何に出家だからと言て、如何に一院住職の身だからと云て、阿伽凡夫だから、只の人間だから、然う完全な理には不可い、殊にお上人様は法臘も少い事だから、格外無理は無い、組合寺院のお住持の内でも、五十六十の高齢をして、眉毛に雪山の雪を集め、頷に功德池の波を寄せ、繪に畫いた羅漢よりは、一層殊勝然な相貌をして居ながら、兜率の内院に活辨天を安置して、羅侯羅の五六人も生、方丈の持せ佛の下檀に、貧乏德利と玉子と松魚節を、常住不斷に貯蓄てゐる人も隨分あるから、夫にお上人は、瑕瑾も多いが光明も多いお方で、學問ばあり、說教は能辯なり、智惠はあり、愛嬌はあり、容貌は美し、澆末の僧侶には珍らしい人物、瑕瑾と光明とを加減たら、ヤッパリ可貴人物だのに、只瑕瑾許り指摘て退院させるとは、惜いものでもあり實にお可愛想だ

佐兵衛「サア、其學問や、能辯や、智惠や、愛嬌や、容貌が、却て嫉妬の基因で、組合寺院の憎惡を受けてゐる處へ、アノ河上と云ふ惡魔めが、己が慾心から、アノ日曉さんと惱謀して、組合寺院を教唆て、トウ〳〵如此な事にしをつたのだ、お上人さんの墮落の本尊を周旋した清兵衛さんは、流石お上人さんに、氣の毒だと思つて、今日は遠慮して出て來んが、アノ河上の獅子身中の虫は、平氣な面で、イヤ得意然と人先に出て來て、本山の御使僧や、組合寺院のお住持達と一緒に、横柄な顏をして、お上人に退院の命令狀を讀で聞せてゐるが、實に殘刻い奴だ、平生お上人に格別御愛顧に成た身でありながら、然し未來は到底善果は得られまい、墮地獄は確かに保證する、なァ源七さん

源七「吾もお前さんも、何も破戒のお上人の肩を持つ理は無いが、河上は憎い、彼奴は惡魔だ、何ぶ何でも從來の御交際を思ふとお上人に對してお氣の毒で、吾等はアノ席には連なつて居られない、オヤ、モウ、退院の命令が濟だと見えてお上人がお方丈の方から、悄然とアヽヤレ〳〵、妙法蓮華經〳〵

佐兵衛「お上人は是から何處へ、お蓮とか云ふ、女菩薩、イヤ、如夜叉の處へでも……

源七「處がその如夜叉は、旦那が二三人も有つて、賣淫的同樣なものだといふから、お上人が此姿に成たら、恐く七里結界寄せつけずとくるだらう

佐兵衛「俗緣の家は、出家なされた以來音信不通で、今は親子兄弟共、生死の程も定かで無いと、平生言ておゐでなすつたから、差當り何處へ行くといふ目的も無やうな理だらう

源七「女の名が阿蓮で、淫賣を働いてゐれば、お上人は所謂紅蓮大紅蓮の地獄へ、活ながら墮落したといふものだ

佐兵衛「經宗の上人が、阿蓮の色香に迷つて、破戒の罪を犯すとは、小説でいふ名詮字性ぢや、オ、段々此方へ出ておゐでなされた、切めてお玄關まで……妙法蓮華經〜〜〜

源七「ア、爾うしませう、妙法蓮華經〜〜〜

日正寺の住職笠原道隆は、阿蓮に通じたる邪淫の過失と、開帳の收入を私せんとしたる倫盜の過失の二罪を、檀中及び組合寺院より摘發上伸され、本山より使僧出張して、一應取調を受けしが辯解の道立ざるを以て方式の如く退院を命ぜられけるが、元來多少學問も修め、道心も磨きたる者なれば、爰に至つて深く其身の非を悔ひ、煩惱の雲始めて散じて、性月重て光を放ち、迷惑の垢漸やく去て、心華再び香を發しけるにぞ、迷故三界城、悟故十方空、本來無東西、何處有南北、いづこにも住れずは唯住でわらん柴の庵のしばしなる世に、と觀念して、一衣一鉢の外は些少の時金を懷中にせるのと、衣類調度等は、客僧弟子雇人等に紀念して盡く分與へ、元の斗數行脚の僧となり、只其身の過失を慙るのみ、敢て他人の讒訴を怨とす、仇恩兩乍ら忘れ、愛憎共に退け、玄關まで見送る人々に叮嚀よ挨拶して片雲野鶴飄然として、寺門を立出しが、流石年來住馴たる吾寺なれば、坐に執着の念を動かし久に經て吾後の世を問へよ松、迹忍ぶ可き人も無き身ぞと口吟さつゝ、思はず練塀の内より枝さし出す、老樹の松を顧るトタン、門内より「お師匠樣と呼はる聲のすれば眺いて其方に目を注げば、平素吾子の如くに愛育したる一人徒弟の道圓が、双眼に涙を浮べて出來り

道圓「お師匠樣、今から貴僧は何處へお出になります

道隆は道圓が此一語の爲に忽ち法海に情波を動かせしが又吾から之を沈めて

道隆「余は今日から、身を雲水に任す斗數行脚の身であるから、樹下石上、何處を宿といふ定めは無い

道圓「萬望吾も お伴なすつて……

道隆「是迄の恩誼に泥んで、然う思ふのも尤だが、今余と一緒に出ると、余の脩行の妨害にもなる、又汝の學問の邪魔にもなつて、双方の不利益であるから、左樣な事を申さずに永く此寺に止り、誰が後住に成るか知らぬが、其人を余と思つて、イヤ其人を師と觀て、學問脩行に勉强して、天晴名僧智識となり、アノ人の先の師匠は、破戒無慚の賣僧で有たが、アノ人は彼樣な立派な人物に成たと、道俗兩樣の人に信仰され、萬望余の恥辱を雪いでくれ……余も此身の病身と、一家の事情の二ッに依て、出家得道をした時は、恰是汝位ゐの年齡で有た、今更昔時が忍ばれて、一層汝が不便に思はれる、然し今悉ひに余が恩を懸れば、

却て汝の仇に成るから、余は汝の爲を思ふて決して汝の願は許さぬ、汝の精神を誤解へて、無慈悲な師匠と怨むなよ、イヤ怨でも大事ない、怨まれるのが却て親切ぢやから……破戒無慚の余の口から、如此な事を云ふのも異なものぢやが、今佛法は腐敗して、澆末の衰世に陷つてゐるに、耶蘇の宗教は夫に引替へ、宛然旭日の登る如く日に日に勢を増す許り、實に危急存亡の秋で有るから、死ぬる一事を習つて而して後に諸事を習ふへしとある、教祖の誡規を服膺して法の爲まは喪身失命を避けず、念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊と教祖が畢生の力を盡して、危險を侵し、厄難を顧みず、邪宗を破り、正理を顯はし玉ひし、勇猛精進の心を心として、佛法の衰微を救ひ、邪教の跋扈を禦ぎ、兼て吾國道德の腐敗を治め、明治のイナ、十九世紀の日蓮と崇められよ、返すく〻も此の道隆が破戒無慚を殷鑑にして、苟にも飲酒と邪淫を慎めよ、云ふべき事は山々あれど、長く此場で時刻を移して、檀中の者に疑れては、將來汝の不利益であるから、最早是で別れるぞ

道隆は慇懃に訣別の訓誡を述べ、道圓が今暫時と留むる手首を振拂ひ、何處とも無く立去りけり

第八回　無分別

無端なき驟雨のために、橋下の妓を載する船も、橋の上の氷を賣る店も、東西に散り、南北に

去り、さしも宵の間と不夜城かと怪まれ、歌吹海とも云ふ可かりし、繁昌雜沓も、數萬の毬燈の火と共に消て跡無く、今しも雨は稍休たれども月は猶雲に藏れ、四顧寂寥としたる天神橋の上を南の方より足早に駈け來りたる一個の女、西側の欄干に身を寄せて「南無阿彌陀佛」といふより早く身を躍らせて水中に飛入んとす、此時遲く彼時早し、北方より徐々と渡り來りし一個の男、暗に透して進み近き、そのまゝ、女の帶際おさへ物をも言はず引止むれば女は精神の錯亂せるより、吾身を追人に來りたる、其人違の所業とや思ひけん

女「萬望、死して下さい、委細は書遺してありますから、夫を諦で下されば判ますから……力を極めて男の手を振放し尙も欄干に攀上るを此方は强て抱き下し

男「コレ、女中、何處の、お方か知らぬが、貴重な命を捨てやうとは、何か不得已な事情で有らうが、氣を鎭めて、役には立つまいが、余に子細をお話なさい、暗黑で判然映睡ないが、今のお聲では、年紀の娘御らしいが、此ら申すと失敬なれど、大罍痴情の迷ひか、但は貧苦に迫つたか、此の二つの内の一つで有らうが、双方にしても、死ぬには及ばないア、、コレ、浮雲い、此ら お前の死を止める此の余も、實は此世を捨て又此世にも棄られ、味氣無い人間ぢやが、マア滅多には死なぬ目的ぢや、ッシテ、全体お前の死のふといふ決心は如何ふ理ぢや、萬望話して聞せて、其上で又……アヽ、モシ、其手を放して、マア、此方へ、惡い

事は云はないから……

男は力任せに女を抱きて橋の中央へ連來り

男「見ず知らずの余が、此うしてお前を止めても、お前は安心をすまいから、余が身の恥からお話し申しませう、余は昨日……今日までも一院住職の……此ういふては解るまい、寺町の一ッ寺の住持で有たが、不圖した心得違ひから寺を逐れて、今は傘一本の果敢無い身の上、天滿寺町の或寺の和尚は、平生兄弟同樣にしたものだから、尋ねて將來の相談をしようと、變つた形粧か恥かしいから、夜に入るを待て、往て見たが、余が不行狀に愛相を盡たか、淵が瀬となる飛鳥川、浮世の人情と一般に、余が零落を見限たか、過去の交情は昨日の夢、未來の事は儲置いて、現在一夜の宿も貸さぬので、一回は他人の不實を怨んだが、是も全く此身の過失からと、再度心に思返して、宿貸さぬ人のつらをなさけにて、臘月夜の花の下ぶしと道月尼の詠歌を思出しつゝ、何處でありとも、今宵を明し、明朝に成たら、身の方向を定めやうと、悄然歸て來るその途中で、端無くお前の死を救ふたも、所謂宿生の因緣で有らう、余も恥を捨て是丈の事をお話し申したから、サアお前も、定めて言ひにくからうが、死ぬる事情を、簡短で好いから、余に話してお聞せなさい、少しの金で事が濟むなら、幸ひ私に儲の持合せもあるから……今も云ふ通り、余は出家の身ぢやから、

決して人に云ふて惡い事と云はぬ、又お前の爲めにならぬやうな事もせぬから……最親切ある男の詞に女も少し落附きたる樣子

女「貴僧の御親切を無にして、强て死なふといたしましたも、種々事情のある事でございますが、今此處で……イエ、お話し申しても妨碍でございませんが、然らしてゐる內に萬一追人が……

男「ナニ追人、イヤ、時宜に依たら、余がお前に代理て應接をして上るから、兎も角も、簡短にでもお話しなさい

女「ハイ、然うまでに、仰しやつて下さいますなら……妾が像て懇意にいたします、要一さんといふお方に、少し事情が有て、軸物の事から、飛た間違ひが出來まして……何處の女か妾の名を欺つて、鯉の繪の軸物の僞物を遣へて、或る方でお金を詐欺取財た事から、其要一さんと妾の身に嫌疑が掛りまして、其上に從來信用して、ジッコン好いお方だと思つてゐた、其正物の軸物の預り主の、奥田さんといふ人が、思ひも寄らない惡い人で、最初から……妾の身を、アノ、妾の身を、自由にした氣で有た樣子で、其軸物の間違から、却て反對の位置とやらに立て、種々の難題を言ひ懸けますが、肝心頭みに思ふ要一さんは其事からして神戸へ行た限りで、歸つて見えず……

男「アヽ、モシ鯉の絵の軸物とお貰ひだが、其絵の畫者は若や探幽の筆ではありませんか

女「ハイ確か……妾は詳しい事は存知ませんが……

男「若し探幽の絵の鯉の軸物なら少し心當りがあるので……余も些か事情が有て、偽筆ではあるが探幽の鯉の軸物を秘藏してをつたが、或る婦人が此間其軸物を一寸貸してくれと、持て歸つたまゝ、今に返さぬが、今思ふと如何も可怪しい、若や夫をアノ……ヤツパリ彼女が、アノおれ……イヤアノ惡魔めが……嘘思ふまい〳〵色卽是空、空卽是色、外面如菩薩、內心如夜叉、道楽の凋りにしまぬ心もて、などかは露を玉とわざむく、大概お前方も、アノ惡魔に、イヤ、惡人の計畧に悪つて、今の難儀をしてゐられるで有う、眞にお氣の毒なものぢや

男は女の顏を暗に透して見る折から雲間を漏る、月の影、思はず眼を眼と見合して男はハッと不審の体

女「ヤア、お前は……ハテナ……

雲間を漏れて出る月と共に、橋間に繫ぎて有りし一艘の屋根船、築地の方へ漕出せるが、中にて妓の乘りてをると覺しく、聲さへ節も清元の音色も冴し三絃の、波上に響く水調子

淨瑠璃「雲脚早き雨空も、思ひがけ無く吹晴て、見かわす月の顏と顏

此時男は始て女の容貌を見たるが、只さへ色の白さに死を決したる事なれば、や、青みを帶たるに、月の光りの照添へば宛然透き徹るが如く、島田の髷は後へ斜めに反りて蘭麝の香りを吐き、鬢の毛は前に亂れて柳の絲の花の朶を掩ふが如く豐かなる頬にかゝり、五天竺第一等の美人と聞える邪愉陀羅女も此くやと思はれ、剩へ己が意中の人にさへ而影の彷彿たれば、吾知らずに見惚て、精神恍惚となりしが、折しも船の淨瑠璃は斷續に風に吹送られて又も聞ゑけり

淨瑠璃「只何事も是までは夢と思ひて清心は今本心に立歸り

卽て彼男は吾に返り心の內にて、此の女の顏の美くしく見え、此女の姿の彼に似て見ゆる、皆是煩惱の然らしむる處にてそ、往昔書寫の性空上人が江口の君に逢ひたる時、目を開けば君がさゝら涙立つといふ小歌を謠ひをる嫋娜なる姿に見え、目を閉れば普賢菩薩が白象に乘りたる端嚴美妙の相に拜まれたりとか、吾も觀念の足らざるにそと、强て氣を沈めて目を閉れば生憎に又意中の人の姿の判々と前に現ずれば、ハッと思ひて再度目を開くトヲソ又も聞ゆる斷續の清元

淨瑠璃「今さら言ふも愚痴ながら、悟る御身に迷ひしは蓮の浮氣や一寸惚れ、浮いた心ぢやでさんせぬ

彼男は再度女の顔を熟と見て、ぶる〳〵と身を震はし

男「迷ひの雲の吹散て、照らす眞如の月影に、折角晴た煩惱が、再度曇すも不思議な悪縁、是もお前がアノお蓮に、能く似てゐるのが互ひの不幸……」

と言ひつゝ、男は女の手を執つてヂッと引寄せる、女は是に驚きて其手を拂ひ

女「エ、何ですと、妾か誰に……ソシテ卿何を……」

男「イヤ何もいたさん、眞に愧かしい事ぢやが、余はお前に……」

女「エ……」

男「見たが煩惱、惚たが因果、萬望余の所望を聞いて……」

女「アレ、マア、何を……」

記者是まで只男又は女とのみ記して其名を掲げざる兩人の無名氏は、記者が其名を掲ぐるまでも無く、諸君先刻其誰なるやを御承知なる可けれど、今爰に強いて説明の勞を取れば、男は破戒の爲めに寺を逐れし笠原道隆、又女は卽ち小泉要一の情人お時にて、或る曲者が僞筆の鯉魚の一軸を道具に使ひて、青木より七十圓を騙取りし爲に嫌疑かゝり、其辯解に苦みて此くは死を決せるなり

此時道隆は振拂ひたるお時の手を取て把て身を寄せたるが、道隆は身に加賀絹の單衣を着、紹の法衣を着けたるが、是も色の白き顔を月に照されたれば、凄きまで美くしく、東京俳優の尾上菊五が清心とかいふ墮落僧に打扮たるも、此くやと思はるゝ許りなれど、元來死を決したるお時、且は要一より他の男は、目に映らず、イヤ映るとも腦に感せざれば、道隆の美くしき顔は却つて怖しく見えて

お時「アヽ、モシ、御出家樣、アレ向ふから提燈を持て多勢の人の參りますのと、妾の追手に違ひございませんから、萬望此の手をお放し爲すつて……」

笠原「イヤ、此う成ては、誰が來ても放さない、余も今から築地へでも行て宿らうと思つてゐるのだから、幸ひお前も一所に行て宿るが好い、尙閑淺した事も有り、又話したい事もあるから……此う見えても余は懷中に多少の金を持てゐるから、若お前の身の難儀が金で濟むことなら如何でも話をつけて上るから……」

道隆はお時がお蓮に似たるより、再度心裏に煩惱の炎を燃し、吾から慾情を押ゑかねて、お時「其御親切は忝け無ふございますが」と逃んとするを逐ひ廻す折しも空にも迷惑の雲の立拖ひて、重ねて眞如の月を藏せば、此方は暗黑さより愈々暗黑に迷ひ入り、強てお時の手を執へ、既に猥りがはしきにも及ばんとする處へ、提燈の火を振照して此場へ駈來りし五六人の男、常に南地の富永、卽ちお時が手傳に行く青樓へ出入なす消防方にてお時の追手に來

りし者なるが、暗黒と急劇し紛れに道隆をばお時の情人と見誤りしか、但は他の曲者とや思ひけん、矢庭に道隆を突倒しお時の手を把て運蹄らんとすれば道隆は追縋り

笠原「コレ理不盡な、人に挨拶も無く、其娘は余が助けたのぢや

と喚べど追手の者は聞かばこそ、

追手「ナニ、理不盡だと、糞でも喰へ、人の娘を運出して、理不盡も何もあるものか……

と其内の一人にて尤も逞しき男が追縋る道隆の胸部を力まかせに突飛せば、元より柔弱き道隆なれば如何で耐るべき、蹌々跟々とよろめきて後ろの擬干に當つて尻持つくを、追手の者共は見返りもせず、泣入るお時を引立て

追手「南の諸に尚人車が有たやうだ、彼處まで連て行て乗せて歸らう

と最元來し方へ打連て足を早めて立去りけり

男「ヤイお露、吾りや、此の阿父の眼を忍んで、夜半から、自宅を飛出しやァがつて……昨夕彼程事情を分けて言つて聞せたのに未納得が行かヲエのか、ソシテ、何處へ行く心算だ、朝未明から……

娘「アノ……アノ浦江の聖天様へ其事に就いて一寸御願を……

男「ナ、何だと、何ン吐すのぢや、毎も已の事を壓制だの、頑固だのと、開化ぶつた事を吐しやァがる癖に、其様な舊弊な事を……大概野里村の伯母の處へ逃げてうせる心算だら、今更吾れが其様な事をさらすと、折角堀りかけた話が又ペケに成て仕舞うから、サア、今から已レと一緒に裏町の樹兵衛の處へ行け、此の足で直ぐ決定て仕舞うから

娘「阿父ッさん、切望娼妓奉公だけは堪忍しておくれ、昨夕お話のお金が是非入ると云ふことなら妾が如何な下司な奉公をしていも……

男「ヤイ〳〵、又其様な馬鹿な事を……美樓正經的な奉公をしたッて、幾許の給金が取れるものか、何時でも相談が出來か、ると再恣な事を吐しやァがッて……娼妓が否なら否でも、好いが、そんなら吾レが盡力た、何處かで旦那でも見附けて來い

娘「其様な……其様な無理な事を言ッたッて、妾のやうなものを、世話をして下さる旦那が……

男「無れば仕方が無へから、已レの云ふ事を聞いて、娼妓に出ろ、ナニ……ナニ浦海の掛茶屋から觀遊の客人が見て居る……べらぼうめ、見たッて聞いたッて、何の構ふもンか、親が子を折檻するのだ、誰に遠慮も入ら無へ、サア、人に聞れるのが否なら、已レと一緒に歩け、サア行ら、サア歩かンか、勘兵衛の處へ行ッて、尚詳しい訓讓をして遣るから、ナ、ナンダと、未練てゐる、氣樂な事を云ふな、此の切辛い世の中に、何時まで寐てゐる奴がゐ

るもノか、四時にはモウ夜が判然明けてるらア、縱令殺てゐたところが先も商賣だ、○に成一件だ……

娘「ダッテ、お前、親類にも相談しないで……萬望娼妓だけは堪忍して、他の事なら如何な辛い辛抱でもするから……

男「ヤヤア、汝の策略で、今日中に金を工面するか

娘「其樣な無理な事を……

西成郡沿江村なる妙壽寺の東北の小流に沿ひし路邊に親子と見ゆる男と女が夜の未だ明けきらぬに喋々として前記の問答を爲せるが、男は五十四五、顏色赤黑く筋骨逞しく眼圓く、鼻低く、口濶く、頬骨出張て、一見頑器の相を顯はし、女は十七八、色白く、顏圓く、眼耳鼻口の位置權衡極めて好く且つ自然溫和の容を具へて若哲學者をして之を見せしめば形の美と心の善とを兼て眞の美人ィナ完全の美人なりとの評をも下す可く思はる

話頭一轉其近傍なる浦清と云へる料亭の掛茶屋に兩個相對して酒酌交す觀道の客あり、一個は年紀二十七八にて、結城紬の紺飛白の單物を着し黑繻の羽織を被り白地多の無地の夏帶を締め、金鎖つけたる金時辰器を夫に卷附けたる、髭は生さねど容貌風來中等の官員と見え、一個は年紀三十二三にて銘仙の縞の單物ま上布の羽織を被りたるが言語舉動何處と無

く對間奥味を帶て官廳へ出入の商人と思はる此兩人は肝心目的の道花の方には視線を注がずて却て他の解語の花ィナ那の前記の娘の方にのみ注ぎて低聲に品評をしてゐたり

前者「川上、君は彼等を何と鑒定する、僕の推測では、アノ矢口の頓兵衛然たる老爺は、アノお船手たる娘の養父だぜ、屹度……

後者「ィヤ、中らずと雖も遠からずでせう……何にしても感然の至りですな、小說句調で言へば、兀頭の壓制惡む可し、愛娘の愁嘆憐むべしですかな呵々々々

前者「小說と云へば、アノ親子の問答は取も置さず人情小說だ、今日文明の社會と云ふけれども、其文明は皮相イヤ一部分の文明で、其內部を覗つて見ると、アノ頓兵衛阿爺のやうに、吾子の涙を賣て、自己の樂を買ふ頑器の親が澤山あるのは困つたものだ、君の云ふ通り惡む可きと老爺で、憐む可きは少女だ……イヤ飛だ方に精神を奪はれて、肝心の觀道ィヤ觀道より肝心の北地の彼奴の周旋一件が其處退けに成たが、アノ問題は取消として更に一新問題を提出して、君の周旋を願む事にしよう

後者「何です一新問題とは……

前者「君の苦勞人にも似合は無い、君、ソラアノ、感然一件サ

川上と呼る、男ェッ、と點頭て莞爾一笑再度彼の親子の方ま視線を注ぎて

後者「イヤ解りました、了解しました、ヂヤア、貴君も、小説中の人物にお成り爲らうといふのですネ、能うございます、僕が曲亭馬琴……是は格外嚴正しいから、爲永春水……是は格外猥褻だといふから、ダット新奇に春の屋先生に成て一番艶筆を振ひやせう何の遺作も無いことです、複雜だ脚色は入らないです、阿爺の方と、黄金の力で云と言はせるから、仔細はありませんが、只娘が……イヤ是も僕が弗留奈の辯で……エ、好うございます僕が現場へ出張して……

前者「ア、コレ、君……君又一杯機嫌で例の輕卒をやつては不可ソせ、モシ談判が駄ふやうなら、此席では不都合だから、邸宅の横町の青柳(料亭の名)へでも伴て行て……最初から僕の姓名を言つては困るよ

後者「委細承知兎も角も作者に委任してお置きなさい結局のつゐないやうな事はしませんから……オ、早く行かないと阿爺の腕力に訴へても少女を伴て行きさうだ

前者「オイ何をしてゐるだ、口ばかり急て、池の水で水鐵ぽぞを見て……

後者「イエ、ナニ、今ポンと言つて、アノ花が開くところを……

前者「呵々々々此う夜が明け切てから、何の花が開くものか、夫よりは、アノ苔の花を……

後者「オット、承知、ドレ、全權大使と出かけやう

折しも朝の讃業の始まるにや歡喜天の堂の方にて梵鐘の音ボーン

西成郡難波村百何番屋敷と云へば、イト、否、餘程田舍臭けれども、酒屋は向ふ豆腐屋は隣り、數奇屋建築の家商の隱宅と、西洋風模造の紳士の別莊と軒を併べ、鉄眠寺の早晩の勤業の梵鐘の聲と、停車場の出入の汽車の汽笛の音と響を競ひ、學者は閑靜を愛するとは表向き、其實際は賑樂を好で居を占め、藝人は洒落を喜ぶとは逆辭、其内證は減税の爲めに家を移せば、郡部と云ふは名のみにて、其實は區部の繁處方は却て繁華にも、只時鳥の初音の人々先に耳に入るのみか、初松魚も(若有らば)隨分口に入るべく、風雅と華美を混交て又是府下の一小都會、その都會の中央にて、蝸殼の喰附たる船板の塀の中より、植込の赤松を覗かせたる小意氣なる住居、樣木門の右手の柱に三洲流にて、渡邊嚴と書せる標札を貼附けたり、名字と言ひ、名前と云ひ、天晴羅生門にて鬼女の片腕を斫取り、太江山にて酒顚童子の首を獲、源家四天王の隨一に數へられし筠田の源治綱の後胤よと推察せらるゝと共に、祖先の武勇を遺傳して、定めて一個の剛者ならんと想像されども、社會の進化に伴ひ、時世の變遷に隨ひて、武は文に、勇は智に、漸次に變化して、嚴は綱とは打て變り、華奢風流の柔弱男子にて、鬼女の腕を斫るの技は無れど、妓女の心を撮る術を好み、酒顚童子の首を獲る勇力は無れど、酒顚童子の綽名を得る酒量を備へたり、今日は土曜日にて常より退廳も早ければ

夕陽前より椽端に坐を占め、庭の景色を眺めて、新來の妾お露と云ふ美人に酌をさせ、閑に一盞を傾けつゝ

渡邊「お露、一杯位飲めるだらう、眞に嫌ひか、玉に疵だのう……佛家で能く因縁といふ事を言ふが、お前と僕との交際も、卽ち因縁とでもいふのだらう、浦江の觀遊に、お前が養父に壓制されてゐるのを、見懸けて氣の毒やら可愛想やらで、川上に周旋させて、今では此ういふ事に成て……イヤ養父と云へばアノ、小兵衛とかいふ頑固老爺は、再後僕の出勤の留主にでも、此の内へ來たか

お露は美くしき顏に愛ひを含みて

お露「ハイ、一昨日も參りまして……妾は眞正に困ッてゐますのですから……妾の口から如此事は、何ですが、萬望何どかして……

渡邊「お前の籍は深見小兵衛の養女ま……

お露「イヽエ

渡ナ「ヂヤア、如何成てゐるのか

お露「ハイ、實はアノ人が、勝手に娘に貰ッてあるなゝと言てゐますので……

渡ナ「フーン

お露「妾の兩親は東京の者で……兄が一人ございますが……阿父が此大阪へ移住て來てから……詳しい事は知りませんが……

お露は細く眞白なる無名指にて一寸瞼をおさへ

お露「何でもアノ人にお金を借りましたさうで、其お金の爲に妾を養女に……

渡邊「成程……兩親が無なッてから、自分の方へ貰受けたといふ事は此間の談話の時に、小兵衛も萬助、イヤ、川上に謂てゐたといふ事だ、然しお前に兄のあると云ふ事は……

お露「ハイ、夫りやア、申しますまい、其兄は今は何處にをりますか、妾も知ら無いくらゐでございますから……

渡邊「ヂヤア、お前の籍は、小兵衛の内の同居か、何でも早く僕の内へ引て仕舞はなくては不可ン、如彼な道理の判らない人間は、從來如何な事をするか知れンから

お露「然うして戲けは眞に結構でございますが、アノ人が……

渡邊「アノ人とは、小兵衛のことか

お露「ハイ、縁を斷るには、イヤ籍を出すには、又屹度彼是と……

渡邊「夫は因より……少しの金で縁を斷る事が出來れば、イヤお前の自由と幸福が買れば、夫こそ安いものぢや

お露「デモ、此間、此う成りますに就て、既に百圓といふ大金を、妾のやうな者の爲めに……此上御迷惑を懸けましては、實に……

渡邊「イヤ其樣な事は構はんが、然し何程位金の無心を申すか知ンて

お露「サア……

渡邊「イヤ、夫はマア、話して見た上の事として……ホイ、餘り談話に精神を奪はれて、酒の方がお留主に成た……

懷は杯を傾けつゝ、お露の顏を斜視に見て微しく笑ひを含み

渡邊「お前は閑靜な土地に住みたいといふので、此處へ轉宅したが、何分邊僻で出勤其他の用事にも不都合だから、成る可くは、東區か若くば西區の方へ轉宅したいといふ、感じが起ッてゐるが、お前と又何故此樣な片田舍が好きなのだ

お露は兩方の頰に小指の先にて突きし程の笑靨を寄せ、眞赤なる唇の間より眞珠の如き前齒を一二本露はして

お露「ハイ、妾は市中……

渡邊「は何か差閊でも……

お露「イヽエ、眞に偏屈な人間でございまして、兎角熱鬧な土地が性に合ひませんので、前

栽の廣い土地や、樹木の多い土地が好きで、どざいまして……然し提卿に御不都合を掛けましては……

渡邊「イヤ、僕の都合よりお前の身体に障ると不可から……樹木の多い土地と言へば、ソラ、過日邦丽寺、イヤ茶臼山の雲水へ行た歸りに、千日前を逍遙した時、途中で摺合ふた男が、お前の顏を見て、お蓮と言ひかけたやうだッたが、お前は齊お蓮といふ名でいも有たのか

お露は此の一問に少しく心臟の鼓動を感じたる樣子なりしが、顏には愈々媚を呈し

お露「オホヽヽヽアレハお蓮ではございません、お傳と言たので、妾の實母の名で、多分妾の實母を知てゐたお方で、お傳さん處のお露さんでは無いかとでも言て、尋ねる心算でしたのでせう

渡邊「然うか知ん、尤も晩景の事で有たから、僕にも判然とは分らなかッたが、其男は尙若い人で、然も、白地に、何だか大きな字のやうなものを染めた、大層華美な浴衣を着て、頭は確か五分刈の意氣な……

お露は此談話を打消す如く、手に持てる團扇を動かしつゝ、庭の一隅に視線を注ぎ、少し調子の高き聲にて

お露「チョイと旦那、宿が、アレ、アノ橙の木に……可愛らしいではありませんか、然も二羽

比翼で、大概夫婦同伴で塒を求めて來たのでせう、此方の櫻や梅の木に留らないで……

渡一ヲ、成程……橙の木の方が櫻や梅より繁茂てゐて身を藏すのに便利だから夫で……

ソシテ、保護色と忘ふて總ての動物は自己の毛色や羽翼や鱗の色に似たものに身を藏して、危險を防禦ものだから……

露一ヲヤ、門の扉の音が、お梅(下婢の名)が歸つてゐるッたのか知ン

第九回　墮落僧

親分の綽號が鶴亀の銀次で、住居ッてゐる土地が松島の近傍、竹林寺の北に當る、梅本橋の西詰の邊で、鶴亀松竹梅と人名地名の揃ッてゐるのは目出度と、舊弊にも緣起を祝ふ、博徒社會の評判の好き俠客、イナ破落戸の家に、身を寄せ足を駐めてをる壯年等は、所謂目の寄る處へ玉の寄るの喩にて、孰も目は有れど文字の讀めぬ盲者、耳は有れど道理の聞えぬ聾者、口は有れど正經的な談話の出來ぬ啞者といふ癈人の集會、本籍も亦、眼耳口と同じく有れども無きが如く、人も姓名を呼ねば、己も名乘しこと無く半染の昔ソ公(紋身を半分せし故か)遠磨の文治(歩行を嫌ふ故か、イナ〜〜不斷に錢の無き故なるべし)天保錢の常州(當時に通用の惡き故か)など異名のみを呼び喚れて事を辨ずる、一騎當千の雲公連中、是も其内にて當夏以來加名せし一個の男は、綽名を法華小僧の新吉と言へど酒を飲ひとダップを

極める故ともあらず、又躰軀の小サキ故にもあらず、全く幼少き時より七字の題目にて成長せし、坊主還俗といふ己が履歴を題表せるものなるが、流石に長袖成育として他の子分に比すれば人品も好く、字も讀め、話も出來、物も判れば、親分の顧問イナ片腕と頼れ、新加入ながら他の者にも兄貴と立らるゝは、十九世紀文明の氣運、彼等文盲社會にも波及して自然學識ある者を貴ぶに至りし者ならん歟、親分の銀次は辨慶縞の浴衣に黑縮緬の三尺帶を締め、居間の中央に花筵を敷て其上ま丈六組み、團扇の風にて胸の毛を戰がせつゝ、子分の新吉と密々談話

銀次「汝が鼠屋町の一件を探索してくれと云ふから、今日往て嗅附けて來たが、アノ宅は始めから、深見小兵衛と云ふ奴の抱屋で、露野お蓮と寄留に成て居たのだとよ

新吉「ウン然らだらう、如彼な惡漢だから、自分の名で家を借りては、不都合な所も有たのだらう、ソシテ、僕イヤ我チが此間千日前で逢た時と、束髮に醜微の簪、淑女然とした化粧で、何だか官員めいた野郎と同伴て歩行いてゐやアがつたが、アノ神戸から鼻毛を讀れに通ッて居た、永井とか云ふ旦的は、モウ後足で砂と濺らかしやアがつたのか知らん

銀次「ウン其鼻の下の永井とかいふ奴に逢ふと何だか、都合の惡い事が出來て、急に東京へ歸ると瞞着して、アノ家を上げたといふ事だ、勿論夫に附いて幾許かの離緣金をせしめた

といふ噂も聞いた

新吉「念が入てゐるなア、自分の方から、紹縁を喰ゝして斷交金を取るとは……ソシテ彼奴の今の旦的の住居といふのは

銀次「未少し知れ憎いが、夫は明日或る男に詳しく探ぐらせる筈に仕て來た、汝の鑑定通り官員に違へ無へさうだ、官廳は何處へ出るか知れねへが、以前は北區に居たのが、今は何でも南邊へ移居したさうだ

新吉「ソイツハ難有へ、其處まで判れば譯は無ェヤ……我ナが過日の晩、大川で既に土太的往生をする所を、折好く親分が、船で例のを遣てゐて、不意に助けて下すつて、此うして內で御厄介に成てゐるも、其原を糺せは彼奴故です

銀次「日正寺のお上人、笠原道隆さまとも云れたお前が、浴衣に平ぐのけ其姿に成たかと思ふと、己ア實に氣の毒で、鬼の目も涙だア

新吉「何だナ、親分、お前でも無ェ、日正寺の上人だナシて、モウ其樣な長い戒名は言ッこ無し

銀次「イヤ、惡い事を言出して、汝に無常氣を出させた……時に汝は過日の晩、天神橋で、投身を助けた女といふのは、何處の娘だらう、其兒がお蓮に似てゐたといふのも妙ぢやア無か

新吉「アノ時、我ナハ氣が轉倒してゐたから、姓名も町所も聽いたか知ら無へが、何だかナッとも覺へてゐねへ……夫りやア、如何でも好いとして、何にしろ彼女の居所が知れ次第一番狂言を書いて、國十郎、イヤ菊五郎を極めなければ成ら無へ、其時は親分、お願み申しやすセ

銀次「願むも願まれるも有るもんか、其時には一番己も腕に縒を懸けて骨を折て遣らア時に新公、己も願みが有るが聽いてくれねへ、アノ一何よ、己の朋友でも何でも無へ、眞の盃の上で一二度逢た事の有る、本名は知らねへが名通を、クサ小といふ奴に、此夏の掛りに全く顏オヤ男づくで、拾圓といふ金を立替へて遣たことがあるが、其奴の己への願み口上には、錢儲けの事に附いて、衣裳を調へなくッちやアおらチェから、是非用立てくれろ、其事が首尾好く行たら、直ぐに返すからと吐しやアがつて、其金を持て行た限り、今日の今まで皿の途切より、己も鶴亀の銀次だし、向ふもクサ小といふ異名の附いた男、殊に盃の上の懇親だから、マサカ、男の腐敗るやうな事も仕めへと思ッて、証書は勿論町名番地も聞ずに、綺麗に貸して遣たのに、あんまりな事を仕やアがるので、貸した金は惜しくは無ェが、了簡が惡いから、賭博士社會の懲戒に、强く談判て遣ふと思ふが、汝も知ての通り、

内の子分の奴輩に、腕の利く奴は幾個もあるが、口の利ける人間と手許りだから、汝萬望己の代理、イヤ汝に感化れて時々漢語が出るのが大笑ひだ其クサ小めは小理屈を陳述る奴だと云から、己に成り替つて談判してくんヲエ、頃來は工面が好いと見へて、露店も休業でゐるから、尚更探し悟いがッコを一番何とか工夫して……

新吉「クサ小とは妙な名だヲエ

銀次「大概品物を客にクサマス事が上手だからの名だらう

新吉「何を露店に出す奴です

銀次「古道具屋だ

新吉「フーン道具屋でクサ小……小の字の附くのは小兵衛ではあるめへか

銀次「チ、、然う〳〵確か小兵衛だ

新吉「ヂヤ、前刻お前の言た、深見小兵衛といふ奴ぢやァあるめへか

銀次「年は五十あまりで、色が赤黒くッて、酒肥に肥て、前の方にモヂヤ〳〵と毛の生てゐる兀頭の……

新吉「尚逢た事は無ェから、年も顔も知ら無ェが、お蓮の話では、其小兵衛から、餘程狡猾な野郎だといふ事だ、深見だらう、其道具屋は、小兵衛に違へ無ェ、其クサ小は確か西口邊に居るといふ事だ

折から二階より他の子分の者が動揺々々降り來れば新吉は聲を低め

新吉「親分、お蓮の事は他の兄弟分にやア、内證に頼みやすせ、外聞が惡いから

第十回　再會

西橋町から芝居裏へ抜ける路次の西側にて瓢簞形の行燈を掛けてある料亭へス來り姉さん今日はと粋な挨拶をして二階へ上りし十八九の垢除けのせし娘は一室の障子を静に開けて内なる客人と顔を見合せ

お時「オヤ泉原の旦那だと思ッたら……

娘之俄然に滿面に笑ひを含み左も嬉しげに

お時「要さん、貫郎、何日お歸り爲すッたの……此處の、イヱ、番半の使の人に、如何なお方かと念を押して聞いたら、洋服を着た、髭の生えた、肥満たお客だといふもンだから……此方の客人も眼と口に充分喜悦と愛憐の色を表はし

要「お時さん、余だと言ふと、富永の内の都合も有るだらうし、少し又体裁も惡いから、故意と使ひに言含めて遣たのサ、マア、互ひに無事に顔を見る事の出來た祝賀に、チョッと一杯……

互に杯を取交して客人は更に女の顔を熟視め

要「「時に貴卿は彼から、大變な事をしたぢや無いか……余も始めて聞いたときは、イヤ半分聞いた時は實に驚愕したよ、夫でもマア能く救助けてくれた人が有て……然し何も死ぬ程の譯でも無いでは無いか、イヤ、余も迷惑を懸けて、如此な事を言ては濟ないが……お互ひに、アノ軸物の間違から嫌疑を受けて、余も長く神戸へ行てゐた次第だが、元來永井の御隱居や青木の御主人が、格外御慈悲深くッて、余等の事を愛護ふて下さるのが、此ういふと物態無いが、却て愛顧の引倒しと云やうな譯で、アノ時青木の御主人が、直ぐに警察署へ屆けて下すッたら、貴卿に化て行た奴も知れたかも判らないに、然し夫では御家名に關係るといふ御遠慮もあるだらうが、第一不了解ッのが、眞田五兵衛といふ、アノ、富永の客人だ

お時「妾も、貴郎に逢ふたら、其の事を話さうと思つてゐたのを、段々聞いたり考へたりして見ると、アノ、五兵衛が永井の、若旦那に、軸物を目的に金を貸したのは、懇意づくと云ふのは口頭ばかり、其内實はヤッパリ慾得づくで、アノ軸物は捨賣にしても、二百五十圓以上の價値があるので、若旦那を欺して賣らせやうと思ッてゐるところへ、妾が貴郎に頼まれて、アノ話をしたものだから……

此處まで言ひかけて娘は恥羞しさと、憤怒しさと、二重の相を面に顯はして

お時「マア、嫌な、馬鹿らしい、アノ五兵衛は、疾から妾の事を何とか思ッて居たかして……

要「「フーン、アノ眞田が……

お時「利足は入らない、元金だけで返してやるなんテ、体裁の好い事を言ッて、妾に充分安心させて、恰是アノ日の午後に、五兵衛が富永の内へ出て來て、サア今から青木さんの處へ行ふといふから、妾は何の氣もなく、御親切にマアと禮を言て、富永の内へは、入らない氣樂までして、同伴ッて出かけると、門口にチャソと相乘の腕車が待して有て、無理に妾をその腕車に乘せて、そのまゝ東へ行くから、ハテナ、と思ふと又南へ行くから、愈々不思議に思ッて、眞田さん、何で此方へ行くのですと尋ねたら、此の方角に軸物が預けてあるからと、眞面目に人を欺して、トウ〳〵アノ一ッ家へ妾を運て行て……眞正に今思ッても、腹の立つ、妾の顔が自分の罔惚してゐる、清元の師匠とかに似てゐると云て、只さへ下ッた目をいとい下げて……

要「「ソシテ軸物は……

お時「「ナアニ、最初から軸物を返す氣は無いので……

要「「ヂャア如何したのだ

お時「休裁の好い事を言たのは狂言で、妾を其處へ連出して、口説く目的で……可厭らしいぢや無いか、好い年をして……全是演劇の敵役といふ見えで、軸物が欲しけりゃ、己の言ふことを聽け、夫が否なら此方も破談だ、アノ軸物を見込が有て、七十圓といふ金を貸したのだからなんテ、氣障な臺詞を陳列た上に、妾の帶の端を捉へ、無法な眞似をするので立腹紛れに散々恥を掻して、そのまゝ逃げて歸つて、すぐその足で此事を、貴郎なり小母さんにお知らせ申さうと、急いで大寶寺町へ行て見ると、生憎お二人とも留主だので、孰れ晩の事として富永へ歸つて見ると、眞田が平氣な顔で先へ歸ッてゐて、富永の姉さんに如何な話をしたか……

要「實に憎い奴だな、夫から如何した

お時「姉さんも平生愛願になる客人なり、內々資本の融通もして貰つてゐるもノですから、夫是の情實もあり、夫に妾を附けて置けば、將來の都合も好いので、却て妾に否な事を勸め……眞田は亦、何でも望みを遂げる氣で、洗通をしてゐて、妾を敷居一寸外へも出さないやうにするので、妾は腹も立ち、悲しくもあるが、此事は今日まで貴郎にも言はないが、實は妾の宅は又、富永に少許の借金が有て、妾が毎日加勢に行くのも、只親類の交際許りで無く、夫や是やの因縁もあるので然う、情愛無くもされないので、遺憾涙を飲込で一日二日耐忍してゐる內に、彼事から嫌疑が掛つて、貴郎も小母さんも神戸へ行てだと云ふ事を聞いたので、悲しいのと、喫驚したのと、貴郎方に辯解が無いと思つた苦惱と一所に成て、ブーと變な氣に成て……

要「ダッテ何も……餘り無分別でこと無いか……貴重な人の生命を……

お時「然うお言ひだけれども、男と女とは分別も違ひます、夫にアノ時は、何だか夢のやうで、全是で精神がイエ魂魄が、轉動して、奮發風に言へば、死神でも附いたといふやうな理で、何の思慮も無く、ツイ彼ンな氣に成たので……

要「呵々々々イヤ其樣な事も强ち無いとは言へない、今日は世が開けたといふのに、ナニパリ、新聞紙に、時々情死だの、投身や、首釣の話が出てゐるから……其樣な事は如何でも好いが、實に憎むべきは其眞田だ、ソシテ其晩助けてくれたのは、誰だ、富永の追人かお時「イヽエ、妾が天神橋から飛込ふとした時不意に後ろから、抱留てくれた人は……アヽ思ひ出しても悚然する……

要「何で其樣に、怖いのだ、ナヽ話に時を移して酒が冷めて仕舞ッた手を叩き音ポン〳〵下にて乾婆の返辭ハイ——

二人は倚も睦じげに杯の献酬しながら

要一「今聞きかけた、彼晩貴女を助けてくれた人は……」
お時「御出家さんでした」
要一「坊主、イヤ、坊さんか、何處の」
お時「アノ時は、氣が轉動してゐたから、確かに覺へませんが、寺町の日正寺とかいふお寺のお上人だとか……ア、思ひ出すと……」
要一「又悚然するか呵々々々」
お時「眞正に……お月樣が出てから、妾の顏を見て、最初とは人が変ッたやうで……ア、怖い思ひ出しても……」
要一「坊主の癖にヤッパリ何とか言ったのか」
お時「ア、……お蓮とか、確かお蓮とかに似てゐるとか言て……夫にアノ鯉の軸物の事を如何とか如此とか言てゐたやうで……」
要一「フーン其坊主が、軸物の事を、ハテナ」
お時「夫から、貴卿、天神橋の上で、妾を捕へて、何だとか、彼だとか言てゐる處へ……妾の遺書を見て喫驚して、富永から大勢追人が來て、妾を執へて歸ったので、其助けてくれた人は……」

要一「如何した、歸ったの」
お時「其時は知らなッたが後で聞いたら、其時に逃へ殘た追人の者と、其御出家と妾の事で喧嘩をして、トウ〳〵其御出家を川へ陷たとか、川へ陷ッたとか」
要一「ナ、、夫が正眞なら、可愛想に……人の身投げを助けて、自分が水に陷るとは……佛家の所謂因緣とでも云ふのだらう、先方か坊主だけに尙奇妙だ……夫から其人と如何成たらう」
お時「サア、今思ふと眞にお氣の毒で」
要一「お前、少しと顏を覺えて居るだらう、其坊さんの……」
お時「其人の不幸が妾の幸ひに成て、妾の身は雨降て地固るとやら、アノ眞田さんは、妾が死ぬと決心した事を聞いて、氣の毒だとか、可愛想だとか思ッたか、又は自分で恥たのゝ、富永の内へ謝罪書狀を寄越して、商賣用だと言て東京へ行たので、富永の内でも、氣が折て、其後は大層可愛がッて……然し貴君の安否が……」
要一「余は又、アノ事の失措を辯解の爲め、神戸へ行て、御隱居樣にも委細をお話し申し、又若且那にも事情を打開けて、眞田の方へ改めて引合を入れると、逃げたのか、避けたのか、五兵衞は商賣用で、東京へ行たといふので、一時は尙更嫌疑が重ッたが、段々……阿母と

二人で段々仔細を申上げたので、御隠居も、若旦那も、漸く少しお疑ひが晴たので、眞田の方は、五兵衛が歸阪の上の事として、先づ不取敢お前と五兵衛に化た、二人の曲者を内々探索しようと思ッて歸つた來たのだ

お時「ソシテ、若旦那は

要一「チヤ、若旦那で思ひ出したが、先刻お前の言たお蓮……夫と同じ名のお蓮とかいふ、若旦那の爲めに惡魔、アノ惡魔めが、トウ〳〵本相を現はして、若旦那に、モウ金氣が無いと斷念めたか、マア憎い奴ぢやア無いか、散々絞取た上に尚百圓といふ離縁金まで取て、自分の方から、絶縁にしたと……然し若旦那の爲に却つて御僥倖で、アノ惡魔を放逐ふのに、百圓は安價いものだ、夫から少しお眼が覺たかして、今日の處では、神戸のお店で、マアお眞面目ぐらゐな譯サ

お時「夫は、マア結構ですが、其お蓮と云ふ女はモシや……

と言ひ懸し折しも此家の下婢が障子の外より

下婢「富永さんの……アノ貴女……

と呼ぶ聲にお時は障子を開けて嫣然一笑に

お時「何です……姉さん

下婢「アノ、お内からお使ひが見えまして、一寸アノ……

要一の前を憚りてお時の顏を眺むれば

お時「姉はん、此のお方は構はない、お客ですから、内から何と言て來ました

下婢「左樣でございますか、オホ、、、、アノ——貴女に……お客樣は何誰だか、早くお伴して歸りなさいと……ソシテ、お内にもお客樣が有るさうで……

要一「お時さん、夫ぢやア、早くお歸り

お時「姉はん、夫では、今直に歸ると……憚りながら……ソシテ、お客樣は、妾が歸へつて、アノ……

下婢「ハイ、然う申して、お歸し申します、お畑を直しませうか

お時「イエ……お煎茶を、ソシテ、姉はん

と言ひながら帶の間より小半紙を取出して、傍に置し莫入の隱しより、十錢銀貨を三ッ許り拾りてソッと渡し

お時「眞に少しで……

下婢「オヤ、毎度難有う、唯今直に煎茶を……

下婢は降りて行く迹にて

お時「要さん、モウ、今日から、大貿寺町の、お宅においでなさるの

要一「ア、

お時「夫では又、阿母がと言て、今夜から自宅へ歸らうか知らん

要一「不可ん〳〵、其樣な事をしては不可ン、頃來に余が、一度公然富永へ行て話すから、眞田さんの事を……お前何も忘れものは無いか

お時「此家の事と宜しいから、貴君は一歩お先へお歸りなさい

要一「宜いと云ッて永計算書を

お時「宜しいと言たら、要さん

要一「貴卿……氣の毒だねェ、余から呼に上けて……モウ日が暮たから、早くお歸りよ

お時「貴卿こそ、道草をしないで……小母さんに宜しく

要一は何か尚物足りぬ心地すれども餘程の時間をお時に費やさせければ、富永の都合も案じけるにぞお時の意に任せて一歩先へ此家を立出で、芝居裏の方へ歩みしが、拾歩以外向ふの方へ、二個の男女が話しながら歩み行く其姿は星明にて確と見ねざれども男の聲にて

男「ユレお露……今も亦彼處で、お前の顏を見て、若男が、お蓮と云ッたやうぢやア無いか

女の聲にて

女「虚……虚を仰しやいまし

要一は此の問答を聞いて心に點頭き此の兩人に近かんと足を早めて西の辻へ出るトタン一輛の人力車が出合頭に走來り

車夫「アイ〳〵、エ、浮雲子エ

第十一回　露店

△「小兵衛さん、長い事休業で居なすつたが、何か他に得益い事が有りましたか

小兵「イヽエ、煩ッてゐたのです、お前、此不景氣な世界に、何を仕たッて、樂をして錢の儲かる事は有りやア仕ない

○「露店出しといふやつは、道樂商賣で、夜深しと朝寢が定例だから、到底藏を立る事はむづかしい

△「むづかしいと言へば、又空が惡く怒て來た、頃來の日和は此方等泣せといふ天氣だなア

小兵「久し振で、店を出して、十一時まで石炭を焚て、氷拾錢の錢の顏も見ないのに、是で降られ、ば立ッ目は無い

○「松島でふられて歸れば、眞正に澤山だ阿々々々

小兵「平野町や南地とは客筋が違ふから、元來此廓は骨董商は不適當ない方だ

△「余は夫でも、宵の中に二三品賣たから、石油代だけは有附いた……小兵衛さん、愈々空が危險だから、先へ閉店にしますせ

○「余も起立贊成とやらかさう

小兵「余一人殘つたところが、目的は無い、此上雨にでも降られ、ば、澤山だから、一所に歸りませう

松島仲の町の片側に、露店を出したる、骨董商仲間が、空に催す雨より先に、互に愚痴を溢しながら、今しも店を片附けんとする所へ、酔客と見ゆる廿二三の一個の男が、口に小揚枝を嘶へながら、小兵衛の店頭に佇立り

客「オイ、ソ、其時計は……一寸見せて

と云ひつ、前へ蹲踞り

客「夫は損じてゐるのか

小兵衛は客の足首より頭上まで一度ズッと眺むで

小兵「何を仰しやります、無疵も無疵、倚新しい品です、機械を御覽なさい、上等です

客「何程だ

小兵「エ、、左樣六圓に……へイ、モウ、終結商賣ですから、お負け申して置きます

客人は手に持し時計を放棄し

客「六圓ぢやア、相談は出來無へ

小兵「幾許かお附けなさい、終結だから、成丈けお安くします、元來余の店に如此な時計は不似合ですが、是は全く素人から、イヤ懇意先からの頼れもので、ダカラ、出所が確かで、原品は請合です……、アノ、モシ、一寸、マア、幾許か附てごらん、默つて行ては……

客人と二歩三歩行過しが、此時計の心に適ひしか、又立歸ッて再度時計を手に取上げ

客「ザナア、幾許にする

小兵「見切て、イヤ又他品で埋合して頂くことにして、左樣、モウ一圓だけ引いて置きませう、何分近來時計が安く成たからッて、如此な恰好な物はありません

客「五圓……夫ではヤッパリ五圓が無いのだ

又立上る客人の袂を小兵衛は確と引留め

小兵「モシ、余の方も商賣だから、マア兎も角も、附けて見て下さい、幾許ならお買なさるのです

客「三圓に負けたら買う、無理か知らないが、持合せが無いから

小兵「三圓、夫は格外……

と云ひつゝ、小兵衛は吾が品物を今始めて見たる如くイナ、人の品物を買う如く、表裏を幾度か返へして、剰へ裏蓋を開けて機械まで視し

小兵「此の通りの器械で……ヂヤア、斷然ともウ一圓引いて四圓にしませう、大負けにお負け申して……

客「余も素見すと思はれると不可ンと思ッて附けて見たが、實は懷中に三圓より持合せが無いから

小兵「宜うございます、然う仰しやれば仕方が無い、お負け申しませう、貴君は眞に買上手といふので、如此な時計を三圓、外國へ行たッて、此價では買へますまい、如此な商賣計りしてゐては、骨董商は、口が干上ります

小兵衛は何か喋々云ひながら、客人ゑ時計を渡さんとする際に、客人は懷中に手を入れ、又は袂を探りなどして、頻に物を尋ぬる樣子せるが、忽ち面色を變へ、少し遽込みて

客「サア、仕舞た、飛んだ事をした、ヌ、、拔れた、財嚢を……

此く言ひしまゝ、矢庭に驅出さんとするを、小兵衛は遽てゝ裾をおさへ

小兵「モ、、モシ、價を極めてから、迯てゞ不可ません、無理に三圓に負けさせておいて、今更其樣な事を言て……最初から人の店を素見に……サア、價を極めたからにやア、買らて

貰はにや、歸さんのだ

客人は尚も遽込み

客「其樣な事を言たッて、肝心の財嚢を……金が……

小兵「ヤイ、イヤ、何かお前は、錢無しで、人の物品に價をつけたのか、ヤイ、此野郎、ド、何處へ行きさらす

といふより早く小兵衛ハ立上ッて客人の胸襟を把り

小兵「サア、此處に持合せが無れば、お前の内へ往て買て貰はう、ナニ、何だ、雇人だと、雇人が錢を持た無へといふ規則もあるめへ、雇坊めへ、錢が無けりやア、何で價を附けた、買ら氣でつけたか、其金を取られたと、虚をつけ、取られた覺ゑがありやア、何故巡査に屆けねへのだ、ウヌ、そんな事を吐しやアがッて、機會を狙ッて人の品物を窃盗す心算だらう、ウヌ……

客人は小兵衛に窃盗とまで罵られたれども、失ひし財嚢の方に精神を奪はれて、稍知覺の渺うなりたれば、敢て之を辯解イナ駁撃せんともせず、只管小兵衛の執へし手を振放さんとのみすれば、小兵衛は愈々圖ヌ乘り、益々亂暴を加へんとる折しも、是より先に、年紀二十五六、頭髪は五分刈、身には大形の浴衣を著、平ゲタの帶を締めたる男が十歩以外處に身を加

めて、此様子を覗ひをり、又年紀三十餘りにて、カスリの單物にスキヤの羽織を被たる、商人風の男が、南より來かゝりて、是も同じく小兵衛の顏と、此場の景況に目を留めて行過ゾとするトタン、先刻より催したる時雨の今は耐へかねしか、俄かに沛然と降り來れば、此の騒動に喧嘩と共に店洋燈の光まで、一時に突然と消失せけり

第十二回　强談

お露の旦那なる渡邊嚴は、暑中休暇の日子も最早殘り少なになりしころ何を思ひいだせるにや郷里なる父の許へ、小生暑中休暇の中に、京阪縱覽かたく、一度御上阪は如何と申し遣りしに、父の源左衛門は之を見るより、官吏登席の辭令書より難有く思ひ「悴の處から呼狀を寄來してくれた、嚴は孝行なやつぢや」と親類中へも披露して、取る物も取敢ず上阪して、頃來より難波村の邸宅に滯留せるが、此源左衛門は當年六十三歳、封建制度の內に人と爲り、服從主義と舅屈風俗に飽まで感染したれば、前は兀、後は白髮、恰是藥罐を灰に埋めたる如き頑乞、舊弊と頑固に充滿され、今に於て舊知事樣が御在城の砌はと、動もすれば返らぬ昔を言出で、由無き懷舊の涙に獨り袖を濕す純然たる士族性質、其癖非常の子煩惱にて、三十を越たる嚴を見ること、倘十代の小兒の如く、悴が嚴がと、目に入るも痛みを感せぬまで、道理も無く可愛がり、其擂妻たるお露の素性イナ贋物たるを知らねば、舊同藩の某より、結納の取交をして、三々九度の儀式嚴重に四海波諸ふて立派に貰ひたる嫁と一般に心得て、嫁女、お露と嚴格な應接、お露は左も無くてさへ、嚴が時々官員風を吹せて、而倒なる事を言ひ、加之に近來流行の女風改良論に、感化れて、歐米の婦人は如何だのに、吾邦の女子は如此だとか、紛擾しき事を言へば、內々五月蠅思つてゐる所へ、今又頑固老爺の添物まで出來たれば一層の窮窟を感じ、格別の困難を窮れど、洗石の老練家なれば毫も色に顯はさず、今しも他より歸りたる源左衛門に玉露製の茶を入て勸めながら

お露「アノ、貴老、今日は何の邊へ……

源左衛門は煎茶を啜りて

源左「ハイ、心齋橋筋まで買物に……

お露「オヤ然う、お一人で能く御勝手が……

源左「余か、余はお前、御一新以前、此大阪に藩邸の有た時分、暫時在勤した事が有たから天滿天神や道頓堀、ニ、アノ住吉神社ぐらゐは、再度參詣した事がある、其節は伊丹屋……オ、伊丹屋と言へば今は無く成た、其頃は駕籠や船で住吉へ參詣したもんで有たが、今では人力車や馬車、加之に瀛車まで出來て、非常な變遷やう、イヤ大層便利に成た呵々々、時に悴は、嚴は尙午睡かな、格外長いでは無いか、夜分又寢られぬと翌日疲勞を覺えて、夫

が爲め疾病でも悲起すと不可ん、モウ起たら好らう、然し平日はイヤ休暇の間で無れば午
睡も出來まいから仕越しておくのか阿々々々、ソシテ大層閑寂ぢやが、梅は……
お露「ハイ一寸使ひに……モウ即て、オヤ、門が開きました、アレが歸つたのでございい……
梅か、歸つておいで
此時臺所の方にて、男の聲、而も盛辛聲にて
小兵「アノ小兵衛ぢや、余ぢや、お露……
お露は此の聲を聞いて眉を皺め、ハイと答へて立上る、源左衛門は其聲の高さに不審を抱け
る樣子
源左「誰ぢや、お客か
お露「イエ、ナニ、アノ、一寸……
お露は其座を外して急ぎ臺所へ出來れば小兵衛は無遠慮よも六疊の間の中央に大胡坐をか
き、片肌を脱かぬ許りに胸部を開き、七輪用の澁團扇にて、急しは無くわふいでをるは、細濕
と貧乏神の像を合併にしたるが如く、恐怖と汚穢の感情を一時に人に與へ、見るも可厭有樣
なり
お露「オ、小……阿父さん、何處へ

小兵衛は右の手に持たる團扇の働きを少しく緩め、左の手にて白髮交りの顎の髭を拔きな
がら、默然つて正面の氣壁を白眼ンでゐる、お露と倘も言ふ總ぎて
お露「何處へ行ッたの、お父さん
小兵衛は尙左右の手を働かせたるまゝ
小兵「何處へ……何處へ行くものか汝の内はイヤ娘の内へ來たのよ
お露「オヤ、然ら
小兵「オヤ……オヤとは何だ旦那は、渡邊さんは
お露「今アノーお不在です
小兵「フン、又か、又例のか、汝ー今奥で話して居たでゝ無いか、アレハ誰だ
お露「アレかへ、イヤ彼のお方は、頃來お國からおいでなすつた、旦那のお父ッさんです
小兵「渡邊さんの老爺か、道理で聲が能く似てゐると思ッた、ソシて渡邊さんは、何時歸る
のだ、國から阿爺が來てゐれば、マサか夜泊りもしめへ
お露「サアー如何だか、其處は……
小兵「カウ、お露、好い加減に馬鹿にしておけ此間から何遍來ても、不在だとか、來人が有る
とか、何日でも旦那に逢はせないやうにするが、元來汝は如何いふ了簡だ、今更言ふまで

も無へが、アノ万助とか云ふ野郎が、旦那は妾任官で、幾許々々の月給、モシ云とお言ひなさりやア、娘御の幸福お前の僥倖だ、支度金は何程でも望み次第、月々の手當は拾圓出すと、甘いことづくめで勸めやアがるから、折角談話の纏りかけた勘兵衛の方と、破談にして、萬事アノ川上に任せたら、始めの法螺とて大違ひ、望み次第と吐した支度金が僅か百圓

お露は嚴さへあるを源左衛門の前まで氣を兼て、眼つきと手眞似で止むるを小兵衛はなかなか聞かばこそ尚も調子を張上げて

小兵「好いやナ、何の構う事が有るものか、何だ可怪しな手眞似をして、痴漢が本拳を打つ樣に、親指何ぞ出しやアがつて……。箆棒めへ、娘を抱き寢すれば、渡邊さんは已の婿だ、婿の親なら、その阿爺さんとかは、已と相やけ同士だ、聞えたつて好いぢやア無へか、何のつけ面白くも無エ、已も来の六十日が樂がしてへから、僅少百圓の支度金で、何にも言は無エで、結納替りと思つて辯しておいたのだ、夫に……其後尚三月にも成ら無へのに、又萬助を寄來しやアがつて、モウ百圓やるから、信音不通にしてくれッて人を馬鹿にしやアがるのも程が有らア、此の長の年月面倒を見て、容色を磨いたり、技藝を仕込んだり、大阪で藝妓に出しても一百半や二百の前借は出來らア、增して下へ娼妓に遣りやア、三年の年期で三百は朝飯前だ、夫を儲々二百圓の金で親子の縁を斷てくれろと、汝の方は夫で都合が好いだらうが、此方は間尺に合ア無エや……已ア本年五十五だが、此の通り壯健だから、尚十年や二十年は新藝行きはしねへ目算だが、ソコを大負に負て六十まで、活るとした處が間迹が五年有らア、月に拾圓づゝの約定で、此月が八月だから……エーと五年と四ヶ月よ是を月にすると恰度……むづかしい計算だが六十四ヶ月にならア、好いか判ッたか此金高が六百四拾圓だ是を又大負に負けて、半金三百二拾圓だけ、今が今耳を揃へて渡したら……然うサ當分の間ア來ずに居て遣らア、旦那が不在なら仕方が無エ、幸ひ國から來てゐる阿爺さん、その相やけどのにお目に懸ッて嚴さんに代替ッて談話をして貰はう、サア、その爺に逢しやアがれ

小兵衛は口から出任せなる文句を述べつ、澁團扇の横にて疊を叩き立てけり

新吉「オイ親分彼處だ、アノ船板の塀の上から、松の枝の出てゐる内が夫だから、お氣の毒だがお前さん先へ這入ッて、一番程好く掛合ッておくんなせへ……

「フン、否に斬れ與三を氣取ッてゐやアがらア……已が蝙蝠安の役廻りか……夫は好いが、二人が二人、四十郎を極めちやア、妙味が無へから、已ア成丈け中鶴で、イヤ、成丈け温和しく遣ッつけるから汝その心算で……

源吉「親分、お前さん、這入るなら、その頃の手拭をドウかしねへと、鶯蕎のお化けやうで、見ッとも無へから……」

銀次「オッと承知だ……」

那の笠原道隆の法華小僧新吉は蟠龍の銀次の朋友が先日芝居裏にてお蓮のお露が旦那の渡邊と連立て歩いて居る處を認め、夫より迹を附けて此の難波村に住居する事を探知り、此くと銀次に報じたる由を、銀次より聞いて、即ち銀次と相談なして、今日しも二個連立て此くは渡邊の宅へ強談に來りしなり、銀次は新吉を門の小陰に忍ばせておき、其身一人案内も請はず玄關の前まで進み入り、密に家内の様子を覗ふに、勝手の方に當りて、何か男女の談判する聲の聞ゆれば、案内へ廻ッては却て面倒なりと考へて、突然玄關より聲を懸け

銀次「へイ一寸御免……モシ、一寸お願ひ申しやす……モシ、一寸……」

銀次「モシ一寸、一寸モシと幾度か音問へども、答への無きも道理にて、下婢のお梅は最前使ひに行きて今帰らず、お露は小兵衛と舌戰最中なれば、少しも耳には這入らず、主人嚴の耳には聞かに響けど、小兵衛にお露が留守と言ひたれば、今更立出るに由なく、又父なる源左衛門は先刻より臺所にてお露と小兵衛の談判をマンザラ耳にせざるにもあらねど、少しく耳の遠ければ、その應接の委細の聞とれざるが、居間に亜龍たる嚴が却て始終を洩聞いて結局の如何を案ずる程の感じもなけれど、格外小兵衛の聲の高きに些少不審を抱きたるが、即て身を起して玄關と臺所の隔ての間まで立出たる折から、銀次があまり返事の無きに少しヤレ迂で調子を張上げ「一寸お願み申しやす」と叫びたる聲にフト蹴膜を打れ、何の感じもなく通常の來客と酌量てそのまゝ「ドーレ」と嚴格を守し古風なる返事をして、徐に紙障を開けて玄關の板敷近く立いで、案内を請ふたる人を見れば、年紀五十七八、壯健造りの兀頭、一癖ありげなる老人が、別染の浴衣に八反の平ぐけ帶を締め、手拭を鷲掴みに持ち、玄關の横手に小腰を屈めて居るにぞ、源左衛門は何處やらから、使ひに來りし者ならんと迎了して、横柄然イナ武骨然と身を構へ

源左「汝は何處から……何用が有て……」

銀次は下婢か左も無くば お蓮のお露が自身に取次にいづるならんと、豫て其意して來りしに、思ひ掛けなくも、最頑固らしき老人が、然も袴を穿ちたるまゝ、嚴然として突立たれば、那か案に相違して暫時躊躇せしが、何時まで默止ッても居られねば即て口を開き

銀次「此家は渡邊さんと仰しやいますか」

源左「ハイ、嚴の宅は此方ぢやが、お前は……」

銀次「エー、ヂヤア、何ですか、旦那はお宅に……」

源左「殿ですか、殿は生憎アノー、不在ぢやそうな
銀次「へエー お不在ですか、ヂヤア、奥様に一寸……
源左「お露か……
銀次「おつ……唯今の名は、何と仰しやるか知りやせんが、舊の名は確かお蓮さんと……
源左「舊の名は蓮か、圓か、左様な事は心得ぬが、露なら、アレハ今、除儀無い來人が有つて、勝手で應接中であるから、用向きがあるなら、此方が承はらう……何用ぢや、エ、、元來汝は、イヤ、お前は何處から參ッたのぢや
銀次「私ヤですか、私ヤは……
源左「イヤ、ばつちでと無い、其方の事ぢや
銀次「困るなアー、私ヤとは、私ヤの事で、ばつちの事ぢやア有りやせん
源次「ナニ用事が無いと、用事が無ければ何しにまゐッた
銀次「困るなア、お前ぢや、話が判るめへー
源左「コリヤ、貴様何と申す、此方では話が判るまいと、失禮な事を申すな、舊藩の時分はお使番をも勤めた此源左衛門、年こそ寄たれ、使ひの口上くらゐ判らんで何と致さう、過言を申すと其分には置ぬぞ

銀次は源左衛門がトンチンカンなる挨拶に、殆ど持餘して、門外に待せおきたる新吉を手招きして傍へ呼寄せ、云々と囁けば新吉は了承で源左衛門の前に至り、故意と慇懃に頭を下げ
新吉「私共は御當家の御家内の事について、御主人にお目に懸ッて少し承はりたい儀がございまして伺ひましたが……
源左「ハイ、今も此人に云ふ通り、殿は生憎不在だから……
新吉「ヂヤア甚た恐入ますが、此のお玄關を拜借して、お歸りまで、お待ち申す事に致しませう……長平御免下さい、親分上ッて待てゐやう……
と新吉は銀次と共に不遠慮に玄關に上れば源左衛門は此の勢に呆れて
源左「コレ〳〵お前……玄關へ上ッて……悴は不在ぢやと云ふに……
新吉「サア、お不在だと仰しやるから、上ッてお待ち申すのです、モシ御隱居さん、お氣の毒ですが、一寸煙草盆を、お火が無れば、燐火でも大事ございません……ア、御立派な御造作だ、頭來御普請が出來たと見えますな、エヘ、、、、
と氣味の惡き目を光らして四邊を見廻し左も沈着たる樣子にて扣へをれば源左衛門はさすが強いて逐出す理由にも行ねば、そのまゝ居間に歸り殿に向ひて聲を低め
源左「疑ひ人物が、勝手へ來て、お露と何か紛雜た談話をしてゐる處へ、妙な人物が、二人同

伴で、玄關へ來て、お露に用が在て、主人に逢ひに來た、主人が不在なら、歸るまで待てゐると云ふて、二人あがら不遠慮に、玄關へ上ッて坐ッてゐるが、元來彼等は何者だらう、お前知てゐる人か

露「如何な風体な人物です

源左「サア、縣下ではあまり彼樣な風体な人物は見慣ンから、何者で有うか、余には鑑定がイヤ、考へが附んが、お前アノ次の間の紙障の陰から覗いてくるが好い

露は父の言に任せ玄關の次の間まで立出紙障の陰より覗ひ見れば兩人とも曾て見知らぬ男にて、然も破落戸然たる風体なれば頗る不審を抱き暫時思案を凝せしが、卽て心に點頭き、源左衛門を元の居間に伴ひ行き、耳に口を寄せて、何彼囁き合ひけり

「お道のお露と、已が名の淫情なる女なれば、イナ淫慾なる婦なれば、骨董商の小兵衛と示し合せ、身賣塲の狂言を書きて、今の旦那なる渡邊嚴を欺き、百圓の支度金に拾圓の月給にて、妾に住込みたるが、嚴が自分の身分を厭ふ爲めに、小兵衛の出入するを甚く嫌へば、夫を幸ひ又も一狂言仕組み、小兵衛の厚緣を名として、今百圓か二百圓も占めんものと、又も小兵衛と喋し合せて、故意と小兵衛に强談に來させ自分と小兵衛と同謀ならぬ事を覗さん爲め、殊更に嚴の爲に留主を使ひ、奥へ聞ゑよがしに談判をしてゐる處へ、思ひがけ無く玄關へ、新吉と銀次の二人が出來り、源左衛門を執へて頻りに應接の樣子、元よりさして廣くも有らぬ、家なればお露と小兵衛の談判せる聲所と、新吉銀次が源左衛門と應接なす玄關とは僅々の離隔なれば、時々彼等の聲、イナ彼等が御家内といふ言の耳に入にぞ、何者の來りて何事を談ずるかと、フト聞耳を立れば、一人の老たる聲は更に聞覺ゑ無けれど、一人の若き聲は頗る耳慣たるやうなれば愈々不審に思ひ、益々聽心系を其方に傾くれば小兵衛の言は浮の空、小兵衛も亦同じく玄關の應接が耳に入れども、お露とは反對にて、若き聲と感じ無けれど、老たる聲は覺ゑあれば其方に聽心系を奪はれつゝ、流石默止ても居られねば前の語を繼ぎ

小兵「オイ、お露、何を汝は他の方を見てゐるのだ、サア、渡邊さんが留主なら、父御の源左衛門さんとかに、逢してくれ

お露も據ろ無く

露「だッて、お前、玄關へ誰か來て、今應接をしておいでなさるから、お父さん、オイ、小……イエ、お前も何か聽耳をして……ヤヤア待てゐろと仰しやるかも知らないが、マア、一寸お話申して……

お露は之を機會に玄關の聲の氣に掛れば、急に其處を立て仲の間に來り、先に嚴が透見した

る次い室の襖の陰より覗き見れば、思ひきや二人の内の若き方は、容貌こそ變りたれ、己が爲に寺を開き、加之へ自身の過失よりとも云ひ或は人の爲めとも云ひ、兩說確實かならねども入水せる由の風聞さへある、日正寺の住持笠原道隆其人にてありければ、ハット計りに大きに驚きたるが、元來此の道隆は、己が心に左して憎くも思はざりし男なるに、己が爲めに寺を開き、此く賤しき姿にまで成り下りたるかと思へば、卿か氣の毒なる感じもあり、繼母と情愛の二つにひかされ、流石の毒婦も尙人情の感覺は備へたれば、遂ふて久濶の罪を謝せんか、左すれば旦那の前に憚りあり、兎やせん角やと思ひ煩ふ所へ、背後より不意に袂を引く者あれば、驚いて見返れば、旦那の殿にてそのまゝ、居間へ進行き

殿　玄關へ來てゐる男は何だ、お前の事で來たと言てゐるが

お露は忽ち虛僞を構へ、何氣無く

お露　「旦那、アレですよ、ソヲ、此間申した兄は、暫く逢は無い內に、如彼な形に成て……一人の方は知りませんが、大方兄の朋友か何かで……實に……夫にしても臺所に居る小兵衛から先へ歸したいのですが、眞に恐入りますが、委細は迯からとして、兎も角も何程か持せて、今日の處は……

殿　「度々で困るが、阿父もをるから、ヂヤア穩便に……　弐拾圓も遣て……

お露「貳拾圓……夫では貴郎……」

源「マア、今日の處は、お前から程好く云て……然しお前の兄なら小兵衛とは……」

お露「イヱ、兄に逢せましたら、格別面倒になるといけませんから、早く貳拾圓だけ……然し何と申しますか

奥にてはお露が程好く處を欺してゐる、玄關にては源左衛門が眞面目に

源左「コレ、お前達のやうに、然う無法な、イヤ解らん事を云ふては不可ん、余が何も知た事では無し、誰か媒妁して、イヤ周旋に依て、アノお露を、悴が貰ひ受けたか如何いふ約束に成てをるか、余は四五日前に當家へ參つたのだから、一向心得んので……元來お前達はお露の爲には何に當るので……」

源吉「何も彼も當人へ逢へば解りやすから、一刻も早く……」

源左「ソシテ、お前達の姓名は」

源吉「私ッかへ、私ッは……」

銀次「己ア鶴龜の銀次と言ッて、此新吉の爲めにや、及ばずながら親分と云はれてゐるのでッ、私ッが、イヤ、銀次が此らして附いて來たからにや、柔弱こい臺詞をして歸るのぢァ、でせへせんから、早く旦那なり、お上さんにお逢はせなせへやし、愚圖々々すると却てお

爲めになりやせんから

源左「フトーン法華に、鶴龜とは稀らしい名字だ、祝儀と不祝儀と連立て來たやうな譯で……

新吉「其樣な事は如何でも好うげすから、早くお蓮に……

源左「マア、待テ今に、臺所へ來てゐる客人が返るだらうから、イヤ、モウ歸る樣子だから、今暫く待てをれ、イヤ、ハヤ、怪も飛だ婦人に懸り合て……ナニ懸りかけた話がすむと、すぐ此處へお露を呼でやるから

源左衛門は武邊者なれば此の二人を少も恐れねども、お露の親族の者と思へば、格外疎暴な應對をしてもと、聊か遠慮して穩便に取扱ッてゐる折しも、臺所の庭口なる障子を內より推開け「ヂヤア、お露、今夜旦那がお歸りなすッたら汝から話をして、迯金を急度だせ、好いか間違はねへやうに、川上からの談所は又何とかするから、エ、間違ふと聞かねへせ、難波新地の音五郎の處に待てゐるから」と聲高に言捨て、表の方へ立出る小兵衛の背後を玄關より銀次は目早く見認めて

銀次「オイ、新吉、小兵衛が……

新吉「彼奴か、盜賊野郎は……ウヌ太へ奴だ……

跡を逐はんするトタンにお露は襖をサラリと開て立出れば、新吉は此音に不圖此方を振向き互に顏を見合して一瞬に

新吉「オヤ……

第十三回　暗殺

難波の新川に架渡せる遊連橋を西より東へ渡り來る一個の婦人が月の光りに向ふを透し見るトタンに、風が誘ふて聞もるは溝の側の學校の十二時の大鼓の音

女「オヤ、モウ十二時だ、夜の短いこと、サゾ……

口の內にて呟きつゝ、限界鐵道會社の板塀の土地まで來かゝりし出合頭に一個の男

男「オイ、其處へ來るのはお蓮さんぢやア無へか、大層待せたぢやア、無へか、約束の時間はモウ疾うに過ぎたせ、格外遲いから迎ひがてら、此處まで出て來たのだア、甘く總公を喃着して……幾程に成た、エ、お蓮さん、今日の應接は如何だへ、親の威光を見せた處なんぞ、敵役は本物だらう、琥珀郎跳足と云つて賞めても好からぢ

お蓮「サア、まんざらでも無へが、妾が弐拾圓渡した時ゐ、遽て、把て、一寸妾の顏を見たとこなんぞは、不味かッたよ、ア、云ふ時にはモット、突込で、イ、エ、濟してんで、手にも取ら無へで、鼻の先で、笑ッて、一分で歸る塩處もありと、與三郎を摸擬ッて、モウ一遍突返さなくッちやア、不可へよ、妾もモウ一息張込でと思ッたが、生憎、玄關の方へ不時の珍客

が無込で來たもんだから、サッと遣っておいた……

小兵「お前は實に旦だ、己達のやうな端敵は迚も適は無へ、時に姉公、今夜實は少しナア是非といふ事があるので、持て來てくれなすつたか

お蓮「何を……

小兵「何をッて、先刻の約束の一件サ、今夜是非一百に纏めて持て行くと言ッたぢや無へか、アノ時、渡邊が内に居た事も、殿さんと相談づくで、貳拾圓持して返した事も、大体察してゐるから……ヨーお蓮さん、山分けとも言ひてへ處だが、お前のこッたから、其樣な事を言ッても迚も無益だから、野暮は言はず無ェ、拾圓だけ貸してくん無へ

お蓮「オヤ、拾圓、一割で好いの……

小兵「好かア無へが、言ても無益だと思ッて……

お蓮「然う、大層温厚しいねへ、ヂャア、小兵衛さん、妾も都合があるから、今晩……

小兵「ツィッハ難有てへ、實は急に入る事があるので……

お蓮「オヤ、妾の方へ、請取のだよ、サア……

小兵「手を出すのか時代に……

お蓮「手ぢやアねいよ、お前拾圓くれるとおいひぢや無いか

小兵「ダカラよ

お蓮「サア、前刻、内で貳拾圓渡した内から、差引殘りの拾圓をサ、早くお出しよ出し樣ッ

ヒ

お蓮の言の意外にいでたるに小兵衛は大に驚き

小兵「コレ、姉公イヤ、お蓮さん、お前、己に、何てッた、今日の狂言をうまく演ッてくれ、は謝儀は澤山遣ると言ッたぢや無へか、ダカラ己も慾と二人連で……痩ても枯ても姐公の内だ、如何な逆捻を喰ふか知れ無へ處へ……度胸を据ゑて怨嗚り込だのだ……夫に此間川上が持て來た百圓も、己の手へ請取たと云は名計り、直お前の手へお取次で、己への分配は、タッタ、大紙幣一枚よ然し、アリヤ、己の骨折が少ねへから苦情は云はねへが、今日の一割は格外殺生だア、オイ、お蓮さん、默止てゐちやア判ちねェ、是非半額と云ところを、お前の顏を立て下から出りやア、最前の二〇で差引くなンて……アリヤ、お前約束外の己の得益だ、オイ何とか云ひ無へな……ハ、ハ、ア、判ッた、先刻渡邊の内を出て、己がアノ銀次に見認ッて、呼留められた時、銀次の傍に居た、小意氣な野郎、姿態は變ッてゐるが、確かに蠣殼町へ時々遊びに來た、笠原とかいふ野郎に、イヤ、腥坊主に遇へ無へ、彼奴にお前何だな、未練があつて、己が歸ッた迹で、大概彼奴と相談して……

お蓮「小兵衛さん、年はとうたく無へヲヘ、お前も格外愚痴に成たよ、お察しの通り、妾もあに如彼に成た道隆さん、坊主の時から、憎くは思はあかッたのに、今ぢや立派な遊人ま成て、法華小僧の新吉といふさうだから、似たもの何とかの喩もあり、義理と人情を一荷に荷ッて、一番苦勞をして見る目的サ

小兵「オイ〳〵、危嶮い處で、恍惚ちやア不可へヱ、如此な事を言たら又愚痴を言ふと云ふかも知らヲヱが、お前も東京から流れて來た以來……

お蓮「判ッてゐるよ、其樣な事は、店受にも成て貰ひ、親類にも、親にも、種々世話に成ッたりゃアこそ、縱令拾圓の金でも只上げるのだ

小兵「世話に成たと言ながら、他に相談相手か出來たからッて、今更遊足で砂は弱いぢやア無へか、モウ拾圓是非貸してくんヲヱ

お蓮「何分名が深見だからッて、大休慾の深いことを云ておきヲヱ、お前を相棒に背水の内へ偽筆の軸物を持て行て、七拾圓を喃着かした以前、拾は好し貳拾はござれと、儲けた度に夫相應に、幹折料は上げてあるよ、晝間の貳拾圓だけ上るから、姉公お添じけと禮を言て、今晩の處は默止ッておいで

小兵「ヂヤア、如何あつても

お蓮「ヱ、五月蠅ヲヱ、老人は

小兵「好いよ、汝がッウ圖太く出りゃア、此方も意地だ、共謀の罪はあるが、從是の犯罪を……

お蓮「オホ、、、、其樣な恐嚇を喰ふ荷葉のお蓮ぢや無いから、自首でも、告訴でも勝手になし、お前も一緒に麥飯のお相伴をするだけで、金には一文もならないよ、少し金になる相談があるから、今夜故々出て來たのだが、お前が否なら仕方がヲヘ……オヤ、何だヘ戻ッて來て……自首の一件は如何するの……

小兵「アリヤ、戯語だ、拵辨してくんヲヱ

お蓮「ヂヤア相談に乘る氣かヘ

小兵「當然よ……

お蓮「チョッと耳を

小兵「お安い御用だ……

小兵衛は何心なく脫組ーながら、兀頭をさしのべ、お蓮の傍へ身を寄するトタンにお蓮は小兵衛が首に掛けた手巾に手をかくるや否や、力任せにグット一締、小兵衛は不意を喫れてアット一聲、手足を漠搔いて息絶えたり

男「オイ、起きヲエか、オイ〳〵

女「ア、ア—

男「ア、アーぢやヲエや、如何したのだ、世間の人は對飯を喰ふ時分に魔されたり何かして、モウ好い加減に起ヲエな、馬鹿々々しい

揺起す男は法華小僧の新吉にて、揺起さる、女は荷葉のお蓮なり、然して男女が朝寢イナ朝寢を通過ぎて、晝寢をしてをるは、北堀江上通りなる庚申亭の一室なり

新吉「お蓮、見ヲエ、鉢植の朝顔は、モウ疾うに萎ンで仕舞ッたア、マア汗を拭きヲエ、額の……强い汗だア、餘程怖い夢でも見たと見えるナ

お蓮「ア、、妾は今、何か言つたかへ、ヱ、忌な夢を見た

新吉「イヤ、別に何も……

お蓮「笠……イエ、新さん、憚りですが一寸其手拭を

新吉は椽先に掛し手拭を把て渡しながら

新吉「忌な夢ッテ、如何な夢だ、渡邊に間夫見つけたでも、喰た夢か

お蓮「ナア——ニ、其樣な夢ぢやヲエよ、最うお前と此ちなるからは、縱令渡邊が親子連で今此處へ押込で來ても屁とも思はないが……

新吉「フン、うまく言ふぜ、己の今のお身の上を聞いて、氣の毒だと思ッて、此うして一寸親切は見せてくれたが、昨夜のお前の魂膽談話、アノ小兵衛を相棒に遣ッて、己の持てゐた僞筆の鯉の掛物で、青木の内で七拾兩、其上今度は川上と小兵衛と、二人を道具に遣ッて、渡邊を欺して仕事をした手際、度胸といひ、策畧といひ、迚も己なんザア、適はヲエから、到底永くは交際てくれめへと、心の内で斷念めてゐるのだ

お蓮「アレ、マア、お前でもヲエ、其樣な疑ぐり深いことをお言ひでヲエ、先刻お前の顏を一目見てから、急に彼處に居るのが否になつたので、煙草代だと言て上げた、金包の中へ、ソッと書狀を書いて入て置て、此處でお前に待てゐて貰ッて、故々此うして脫けて來て、人に言はヲエ魂膽まで、不殘明した妾の心底、未お前にゑ屆かヲエの

新吉「フーン、夫が夢か

お蓮「お惚けで無い……妾の見た夢と子

新吉「ウン

お蓮「アノ慾深老爺の小兵衛に昨夜難波の遊廓橋の詰で逢ッて、晝間の貳拾圓の其上にモウ拾圓くれと慾張るので、格外面が憎いから、靡手拭で、アノ白髮首をグーッと……

新吉「ヤヤア、殺害げた夢を見たのか、然らかソイツハ好い氣味だ、夢でも氣が清々すらア、先刻渡邊の玄關で、小兵衛に逢た時、親分の銀次さんに不義理が有るので、お前に受取た貳拾圓の内の、拾圓だけを已に費して是で親分の前を宣敷頼むと、兩手を合して、拜みやアがッたが、其晩のお前の夢に、ヤッパリ拾圓で殺害げられるとは、能々拾圓に祟られる奴だ呵々々イヤ夫よりは、先刻渡邊の内で、お前の顏を見ヲエまでは、嚴とかいふ野郎と、十分談判する目的でゐたが、お前が出てくるが否や已に向つて、オヤ兄さん、久しぶりでと、思ひの外の挨拶をされたので、少しドギを喰ッて、エ、と言テる内に親分が何を思ッたか、渡邊の老爺に向ッて、是はお連イヤお露の兄だと言たので、今更然でヲエとも言ヘヲンので、據ろ無く、兄貴ですまましたが、迹で熟々考へて見ると、亭主だと言やア程好くいつた處が、絶縁の金ハ一回切り、兄だと言やア五本の指切ても斷れヲエ血縁だから、尙幾度でも仕事が出來る、過失の功名とは此事だと、親分と話しながら歸る途中で、貰ッた金の包みを開けて見ると、此所で待てゐろとのお前の書狀、すぐに眞毛で出かけて來たが尻の先へ三尺を絶め、肩へ拳子を造へて、形容だけは破落戸がッても、根が長袖の法華小僧、名も新吉の新枚野郎だから、何分姉御のお引立てを……

お蓮「お止よ、戯語は……姉御テパ昨夜の話の中に、天神橋で災難に逢た時出會した娘が、妾に似て居て、妹かと思ッたくらゐだと、言ておいでた許りか、何だか妾が軸物一件で、吹替に成て青木へ行た、お時とかいふ娘らしいとお言ひだが、其後何處でも見掛けないの

新吉「妙な事を尋ねるなア、好いぢやア無へか、其樣な事は……夫よりは如何する目算だお前の身の方向は……

お蓮「方向なんテ、尙お前漢語を遣ッてゐるの……

新吉「イヤ滅多にやア遣はヲエが、お前の顏を見たところからッイ元の……こはだの鮓まで賣らせて見たが、如何もお經の節があるの方だなア呵々々々

お蓮「新さん、到底渡邊の内へは歸らヲエ目的だから、先刻お連に見せた百圓の外に、尙是だけ占めて來たよ、オヽ、夫でも二百圓わすりあるよ

新吉「眞正にね前は好い度胸だなア、相手の渡邊は官員なり、小兵衛といふ厄病神もあるから、高飛でも仕ヲエと危嶮だらら

お蓮「ナアニ、小兵衛の老爺は何でも無いし渡邊と言た處が言はゝ飼犬に手を嚙れたやうなもので、他の窃盗とも理が違うから、容易に暗中の恥を明處へも出すまいけれども……然し用心に如くはヲエから、炎熱の冷めるまで京都へでも行て藏れてゐる目算だよ、ソシ

テ、お前の了簡は……

新吉「サア、一處にも行きてへけれども、命の親の親分に無斷しにも行れチェとら、お前の居所が極ッたら知らしてくんチェ、時に腹が北山だから、朝飯兼晝飯の膳の上で一杯飲みながら、緩々話さう

此時明樂座の劇場の開場と見えて拍子木の音チョン〳〵〳〵

第十五回　後の祭り

却説難波村なる渡邊嚴の邸宅にては、お露が脱走したる迹にて、彼是家内を取調しに、紛失せる金子及び書類等もれども、公然屆出の手續を爲す時は、暗中の恥辱を明處へ出すやうな理由にて、自然己身の名譽にも關係する所あり、殊に又源左衛門は老人の過慮しをして、頻りに嚴の職務を氣遣ひ、成丈け穏便に事を濟すやうとの考へなれば、敢て其事を公にせざりしが、嚴はお露に未練もあり、弱々にて、流石悉皆斷念も爲し難ければ、此る事には物慣たる下役の其を使ひ、密にお露の行方と小兵衛の擧動を探索してゐたるが、夫より四五日を經て、嚴は暑中休暇も滿期となりて官廳へ出勤なし、例刻に退出したれば、父の源左衛門は例の如く袴を着けて、嚴格に待受てをり

源左「久々の出勤で、サゾ、大儀で有たらう、今日お前の留主に國許から郵便も屆いたし旁々以て余は翌日神戸出港の便船で歸縣する目的ぢやが、夫に就いて一寸……

嚴「左樣ですか、偶々の御上阪に、碌に御待遇も申しませんで、種々な御心配を懸けまして……

源左「過去た事を彼是云ふでも無いが、ア、いふ間違が出來るといふも其原を糺せば、何日までも獨身でゐるから起るのぢやから、今度國へ歸つたら、お澤(嚴の母の名)にも相談して……

嚴「阿父さんの仰せでございますが、家内は交際上の第一の器械で、殊に官員は交際で世を渡るものでございますから、何分か世事に馴た者でなければ、家内に持ても不都合でございますのに、田舍の者では……

源左「何ゾと言て又、藝娼妓でも引せる目算だらう、お露に微誠も無く……

嚴「イエ、何も左樣な理由ではございませんが……

源左「左樣で無れば、田舍の女でも當今は、高等女學校を卒業して、隨分人間の交際の一端ぐらゐは辨知てゐるものがあるから、正格い手續をして、立派に貰ひうくるが好い、イヤ、夫はマア余が歸縣して、親類共とも相談をしてからの事として、差當り一條の相談があるが、余が先刻、土産物を調へる心算で、心齋橋の方へ參ッたら、途中で、ソラお前も記

聽てゐるだらう、お龍を……ソレ、アノ、舊藩の元締をしてゐた甲州屋金六の家内を……彼に聞らず山會して……

藤「へー金六の事は承まはつてゐましたが、家内や何かの事は一向……

源左「ホンに然うで有う、金六が藩邸へ出入したころは、お前は尚幼少であり、殊に大阪にはゐなかつたからアハ、、、、イヤ、そのお龍は御一新前から江戸、イヤ、東京に葬してをつたさうだッだが、金六が死ンだので、再度……又妹、娘のお何とかを連て、當地へ歸ッて、今では大寶寺町とかに親子二人で、幽かな生活を立てゐるが、其娘は頃日或る親類の方へ手傳に行てゐるので、自分も内に居て針仕事をしたり、人の内へ洗濯の手傳ひなどに雇はれて行たりしてゐると云ふてゐたが、お露は居らなくなる、お前は出勤する、アノお梅のやうなものでは、何分内が不取締だから、アレを貰方に雇うては如何ぢや、此家の町名番地を申しておいたから、是非近日參るに違ひないから、お前逢ふて見て、氣に入たら相談するが好い、アレニハ娘が二人有て、姉娘の方は、尚乳臭兒で有たころ、度々邸内へ遊て來た事が有て、眞に綺麗な可愛い子で有たが、夫で東京で金六が死ンだ時、都合が有つて人に遊たとかいふやうに申してをつたが、今同居してをるといふ娘は如何な、子か知らん、可愛想にアレも五十六十に成て、強い苦勞をしてをるが……留知事樣が東海道を參勤交退遊ばした時分は、アレの亭主の金六は、甲州屋と言て、中々派の利いた道中師で有つたが……

藤「殿は又舊知事樣が始つたと心の内に五月蠅く思ひながら

源左「貴君はお龍とやらにお心安いでせうが、僕は初對面ですから、尋常普通の雇人も同樣で……

源左「イヤ〳〵、左樣な冷淡い事は言んものぢや、金六は古く藩邸へ出入したものだ……ソもお龍が能く余の顔を忘れずにゐた、二十餘年ぶりて逢ふたのに、シテ見ると昔の人間はドウでも實意が有る、方今の人間は兎角游情だ呵々々

藤「殿は父が方今の人間の一語は暗にお露を指したる者と察しられれば、恥かしくもあり、腹が立ちて、面白からぬ感じを生じ、暫時談話の途絶し處へ、自分よりは數等下級なる雇官吏の佐藤某、役所にても有名なる叩頭學博士なるが、豫て内命を蒙りたる、お露探索の復命に出來りたるものと覺しく、次の間の敷居の外で幾拜に兩手をつかへ、謹間然たる擧動言語にて

某「御前、先刻は……

藤「オ、佐藤……構はんから此方へ、例の事は如何なつた

某「ハイ、もう當人は當地にはをりません、ソシテ、小的も……

源左衛門は佐藤の樣子を見て不審氣に

源左「歟、此のお方は……

婦「ハイ、實は意外遭慽ですから、お露と小兵衛の探索を此の人に……

源左「ア、、左樣か、佐藤さんとやら、萬望此方へ……

今日しも郵船會社の瀬船山城丸が、神戸港出帆の當日とて、夫に乘込む爲に大坂を出立する人も夥多あり、且つ之を餞別る人さへ附添ひ來れば、午前八時二十五分二番列車出發前の梅田停車場は、又格別の繁昌にて下等は更なり、上中等の待合室さへ人の雜沓ふ程なるが其下等室へ片手に中草履を提げ、片手に蝙蝠傘を携へて入來るは、彼の渡邊撮の父の源左衛門なり、生憎床几に空處無れば、白髮交りの眉を皺めて其處此處と見廻しながら、運動してゐると、南手の窓の側に年齢二十あまりの息子と、五十あまりの老人が、何彼頻りに談話せる其言語の内に、時々お蓮……露野といふ聲の耳に入れば、忽ち聽神經を其方へ誘引はれて、視神經をさへ併せて奪はれて、距離近き處の柱に身を寄せ、漫に耳と目とを傾けゐたり、彼の老若二人の談話なす床几のすぐ左隣は琉球人、又其隣りは十六七の容貌美き少娘と其母親らしき品格悪からぬ老婦、又右隣りは田舍の人と覺しく、此待合室の輪奐なる洋風の構造に目を眩かしけん四邊を虚呂々々見廻しつゝ大和飛白の洗ひ晒せし單衣の袂よ

り、煎豆かと思はる、食物を摘み出し、口一杯に含みてむゞ〳〵然と噛りたるが、其眼の圓き、其鼻の低き、其頬の凹みたる其顔の出たる、眞に能く猿猴に似て、ダルウヰン氏が獸類進化の說を確かむるに足る男、其又向ふに腰を懸けたるは、是も亦田舍漢にて六條參詣にても する者と想像され、總身の粧節一ヶ所も洋風に模倣せる處なく、頭に結髮を戴せ、手に珠數を掛けたる、近來流行の國粹保存論の先生に見せたらましかば、可憐美妙き吾黨の人よと、賞贊の聲を發するならんと思はる、男、此く近處合壁イナ向ふ三軒兩隣りイナ、立聽せる渡邊と談話せる兩人の周圍は孰れも種異類の人物にて、更に關係無もの、みなれば、互ひに交際無き合長家に住居せる如き考へにて、談話の聲は漸次に高くなれば、や、老矣の源左衛門の耳にも、大略は聞きとられけり、今其老若兩人の談話の要を筆記すれば

若「今お話の其お時と詐稱ッて貴家へ參ッた婦人は、恐くお蓮に相違ございますまい、アノお蓮には小兵衛といふ其謀者が有ると申すことですから、其奴が、必定眞田と詐稱て一處に軸物を持て參ッたのでせう、今更思ふと實に面目次第も……

老「イヤ、彼事は余も不注意で有た、從來余は骨董類に氣が無い物だから、眞僞の判別が附ないのだから……

若「其小兵衛といふ奴は、其後も森川さんが松島の露店で、客人と喧嘩してゐるところを

見たさうで、格外悪い奴と見えます

老「お連は東京へ歸ると云て、お前の方から多額の入費を取ておきながら、依然當地にをるさうで、憎い女ぢや、時に峰雄さん、要一か其軸物の事で、西京からお前の方へ郵便を出したので、夫で登るのだらうが、夫にしても此の滝車は神戸行きだが、大層時間を早く……

若「乘り遲れると不可ソと思ッて、格外宿を早く出過ぎました呵々々、貴君と神戸へ……

老「イヤ、私は乘るのでは無い、此滝車で東京へ立つ人があるので餞別に……中等の待合に居たのだが、一寸此室の景況を見に……中等と云へば、貴公、赤い符とは倹約だ、感心々々

若「イエ、實は據ろ無しで、近來は品行改良の一件で、何彼に倹約と勉強を心がけてをりますので、呵々々々

老「夫は結構、其お心がけが、長く續らなければ、所謂雨降て地固るで、貴公の幸福、阿母さんの喜悦……ソシテ仇敵のお連が却て恩人になるといふものだ呵々々々

若「イヤ、モウ、懲り〳〵いたしました、是からは減多に貴君にも、阿母にも、御心配はかけない目的です、實に色と酒は悪魔です、仇敵です、イヤ、酒といへばお店の市藏どんは此間の晩、酔た揚句に松島で財嚢を……

老「サア、金子と少額だッたが、入用の書類が其中に混入てゐたので……森川が迯で來ての話に依ると、同人は現場の樣子を通りがゝりで暫然と見たが、市藏が時計に價をつけた爲めに噴嚏を仕掛けられたは、ヤッパリ、小兵衛で、然も其財嚢も市藏が最初時計に價を附ける際、誤つて取落したのを、小兵衛が拾ッたらしいと云ふことだ

若「若然ならば、其金を盗ンだ上に喧嘩をしかけたので、重々太い奴です、アノ小兵衛は……

同人が此く談話してゐながら老人は窓より外を眺むれば、今や切符の發賣を始めしと思はれて乘客は百足の如く居並び、員一文字に成て運動を始めたり

老「オ、、モウ、切符を賣り始めた、サア、一寸見送ッて、夫から又話しに來やう、お前の方は、尚餘程の時間があるから……

と其處を立出れば、源左衛門と此の兩人の談話のお連のイナお露の身の上に關係あれば煩る心にかゝれど、切符を買はねば乘り遲るゝにぞ、老人の迯につきて、餘儀なく、其處を立出るトタンに今しも人力車にて走來りたる五十あまりの老婦と顔見合せ

老婦「オ、渡邊の旦那樣、未お乘込にならないところで……御出立前に一應お目にかゝら

うと存知まして、只今、昨日伺ひました難波のお宅へ出ましたら、若旦那がお見送りにお附き添で、今梅田へといふお迷で有つたので、すぐ人力車を飛しまして、夫でも好いところで、妾の念が届いたといふものでございます、ソシテ、若旦那は……

源左「オ、お瀧、好く來てくれた、殿は最前まで、此處に居ッたが、出勤の時刻の差閊になると不可ンから、今方強いて歸した處だ、昨日殿に云ふておるたから、お前面倒でも彼處へ住込で、余に成替ッて、萬事の監督を何分宜敷く……

老婦「とても監督何ゾと、其樣な事は出來ませんが、女子衆の手傳ひに……妾が切符を……

源左「然うか、夫でも氣の毒ぢやが、三十錢あるから、是で……

老婦「オホ、、、、貴卿、赤い切符でございますか、大層御儉約で

源左「悴は、余の名墨に拘とるから、瀧車は中等、瀧船は上等に乘れといふけれども考へて見ると物態ないから、お瀧、今ではお前、從四位樣でもイヤ、舊知事樣でも、僅か家從を一人お伴にお連れ遊ばして御歩行で御他出遊ばすと云ふのに、吾々風情が、下等瀧車でも分に過た贅澤と言はんければならない、ノウ、然らでは無いか、呵々、、、、

第十六回　木賃宿

京都下京區塗師屋町なる大和屋と云ふ安泊りにて、壁破れたれば秋既に深けれども、歩未だ消滅せず、庭荒れたれば風頗る冷れども、蚊尚は生活する、八畳の一室の内に、秋雨といふ大敵の爲めに攻られて、此の四五日籠城なす三人の客の内、一人は年紀二十五六、東京語にて其名を喜蝶と呼る門附けの新内語り、一人と年紀四十近く其名を周作と呼る、辻八卦の先生、一人は年紀二十前後、疾病の爲めに此家に滞留せるものと見なして、瀧縮の破蒲團をうちかつぎて、晝夜横になりてをり、只時々小用に行く毎に、相宿の二人に目顔で挨拶するのみなれば、言語も姓名も判然せざる可怪の婦人、辻八卦周作先生の判斷にては、年頃と云ひ、容貌と云ひ、擧動と云ひ、左の頬より右の咽へ、肩までかけて、膏藥をベタリと貼附けたる容體、橋下か、上七軒の娼妓あがりならん、新内語り喜蝶子の想像にては、是京產にあらず、東京より北越へかけて、旅より旅をかけて、稼ぎ廻りたるまた、び猫、彼の一枚の鑑札を二枚に使ひたる隱密商法、無檢査の報ひは早き二ッ玉ならで、雨横根の結果が上へ登りて、惡い處へ寶永山を噴出したるなるべし、加之一層、時々僕に向ッて秋波を送るは土地がら、時節がら、眞正の北山時雨ならんと、瘡毒に自惚をも添へたる念の屆きし推測を下すも可笑し、今日も秋雨の徒然に周作は何處で買うて來たか、イナ借りて來たか、イナ貰うて來たか、五六日前の新聞を讀でゐたるが、卽て傍に坐つて新内の本を讀でゐる喜蝶に向ひ

周作「喜蝶さん又、温習か、治に居て亂を忘れずで感心に勉強するチエ、然し折角の勉強も

お瓦ひに此雨では仕方が無いネエ

喜蝶「サア、雨にも恐れやすが、一昨日からお梅が、大阪の千日前へ、約束が出來て出掛て行たので、格別困るンです、今にもイヤ雨が晴ても、一人で流して歩くのも都合が惡し、さうかと言て引込でゐれば、口が干上りやすから……

周作「成程――御尤――高音を入れてチンチンと意氣に流して歩くから、客人の方でも、夫に流されて呼込ンで、蘭蝶とか明鳥とかを一段とくるのだから、相方が無しでは困る子エ

喜蝶「商賣といふ奴は、何でも調子もんで、先生が、運氣、繊談、待人、夢判じと、新地邊を歩くのも同じやうな理屈でさア、お前さんの年齢は若くなし老込すぎず、格好が一寸品位と來てゐるから、易者ゴは打ッてつけとさてゐるので……然し其結髪を斬て惚髪にしなすッたら好ちう、あんまり舊弊すぎやすから……

周作「同々々々此結髪を保存して置のも、ヤッパリ商法の種で、賣ト、喧に成ると、按摩に出かけなければならず、其上又畳は六條參詣の同者の道案内サ……モシ田舎漢の信用を得る招牌には貴重な結髪ですから、ドウして〳〵滅多には切られません

喜蝶「同々々々、登り詰たる二階の梯子といふやうな色情と同様で、他人の意見位では滅多に切られないのですか同々々々

周作は此の一語に何か感じたるか、一隅に臥しゐたる病婦の方に指を差し

周作「エ、モシ、喜蝶さん、お前さん、何と鑑定が附きました、小指は親指でもあるのだらうか

喜蝶「今はコレでコレだらうと小指と親指を出せば、喜蝶は右の手掌を横に振り顔に膏藥を貼りたる眞似をするトタン、病婦は咳きをしながら寝返りをする樣子に、喜蝶は傍に置たる古三味線を手許に引寄せて

喜蝶「オヤ倘此雨は晴れない、梅雨の時分のやうに、此棹が濕ッて居やすから　實に怖いもので、毎晩私が精神を込て、イヤ辛い〳〵と思ッて握る手から出る鹽で、こんなに濕るのです

周作「上手の手なら水だが、下手の手だから鹽ですか同々々々デも膿……

とウッカリ言ひかけてフト病婦に心づきて

周作「イヤ海から鹽の出るのは當然だが、人間の手から鹽の出のは妙ですなア同々々々

と可笑くも無に笑ひて言ひ紛らし、即て言語を改めて病婦の方に向ひて

周作「モシ、姉さん、如何です今日は
喜蝶「然う寢てばかりおいでなさると、餘計お身体に觸りやすから、チット氣紛れに此處へ來てお話しなせへやし……情夫の身上か何かを、心もかしに、周作さんに占ッて貰ッては如何でげす
周作「イヤ、僕の中らない八卦よりは、喜蝶さんに何か面白いものを一段發聲ッて……然し智惠の無い子に智惠を附げるやうなもので、餘計思ひ出させるやうなものかナ阿々々……
喜蝶「何にしても、ソウ寢て計りゐちやア、却て毒になりやす
病婦「ハイ、毎日の雨天に妾が此うして寢て計りゐますから、餘計陰氣でお困りでせう今日はお蔭で餘程快いやうで……
と言ひつゝ、婦人は蒲團を挑除けて起上り、此方へ膝行り寄り、垢染た手をのべて「チョット」と周作の前に置たる管の中央を紙にて卷きし煙管を取上げ、己が枕頭に西洞院紙と合併に置たる古新聞に包みし煙草を詰いで一喫吸ひながら、又たも「チョット」と周作の横に置たる新聞紙を手に把り、雜報を逐件より口の中に讀み、何か心に感じたるか目をばしばたゝき唇を動かして居れど、喜蝶は何の感じも無く

喜蝶「姉さんは、新聞がお好きと見ゆますネ、何ぞ珍らしい事でも出てゐやすか
病婦「ハイ……別段……
周作「姉さんも、大概新聞に出るやうな意氣な理由で、有て、今の……
喜蝶「周作さんの判斷なら、イヤ、他の事は中にならないが、此事は違ひさうもない阿々々々
病婦「そんな意氣な事だと宜うございますが……
見かけた紙間紙を下に置、又煙草を一喫吸ひて喜蝶に向ひ
病婦「そんな意氣な事だと、宜うございますが……時に貴君、最前のお話に、逃彈きのお方が大坂へお下りで、お困りだと仰しやいましたが、妾が此腫物が無いと、好くは出來ませんが、少しは新内を習ッた事もございますから……
喜蝶「そいッァ難有へ、ナニお前さん、夜る歩くのだから腫物が有たッて、手巾を吹流しに冠ッてゐれば判りやァしません、お前さんセェ、構はなければ、私ナの方は願ッたり叶ッたりで……然し幾許の賃錢にもならないから夫丈がお氣の毒で……
病婦「イヱ、今の妾の身体では、何程か飯代の足しにさへなれば結構なので……
周作「是は宜い相談が出來て何奇だ、天氣になり次第三人連で働きに出掛けやせう、時に姉

さん貴女さん、生國は何處で、お言の樣子では關東らしいが……何で美麗な顏へ汚穢い書
藥を……オヤ又新聞か
病婦は周作が此の問ひに答んともせず頻りに紙閊紙を默讀せり
周作「姉さんも新聞が好きと見えるが、近來は漸次新聞が嚴格しく成て、兎角理窟が多く外
報だの通信だのと、吾輩等が讀ても面白く無い事ばかり載せてあるが、其新聞には珍らし
く、寡婦の話が出てゐますなア、欺された官員の名と判然と書いて無いが、獄した女の名
はお露と出てある
蝶「お露、お露とは可愛らしい名でげすな、名を聞いたところでは、別嬪で溫厚しさうに
思はれる子ェ
女「尤も若い別嬪のやうに書いてあります、實に惡い女もあればあるものでございますね
ヘ
蝶「シテ其女は如何しました、イヤ、何處の話です
女「妾は傍訓を當に讀むのですから、確乎は判りませんが、大坂の難波の話で、何でも其女
は自分の世話に成て居た、旦那のお金を持て、情夫か何かと逃去でもしたのだと見ねます
蝶「ハーン、ヂヤア、落人の爲めかや今は……といふやうな、意氣筋の新聞ですナ、其女は
捉りやしたか
周作「イヤ、その旦那が身分のある人なのが、職掌と名譽に關係する事を恐れて、公然には
しないで、或る筋の手で內々探偵をしてゐると書いて有たが、其女は尙其他に種々犯罪が
あるさうだ
蝶「情夫と共謀でか子
周作「ナニ、新聞の樣子では、他に共謀が有てその情人には久しぶりで會ッて、急に旦的の
家を脫走と出かけたらしい、古い文句だが、外面如菩薩內心如夜叉で、容貌の美麗な女は
兎角油斷が出來ない、呵々々々姉さんには差合で有たッケ
女「オホ、、、、妾のやうな三平二滿で然も病氣と來ては話はありません
蝶「新聞より商賣が肝心だが、そんなら姉さん、翌日にも天氣に成たら、私と一緒に出か
けておくんなさるか
女「ハイ……然し致へて頂かないと……夫に何程夜るでも、此垢だらけの姿ではあんまり
ですから、一遍風呂へ行て、髮でもすいてから……
周作「失禮ぢやが、貴女の御病氣は
女「ハイ、氣の凝りから齒が痛みだして、夫から此樣なに首筋の方へ……

喜蝶「ソシテ、お前さんは、關東ですか、生國は……」
女「ハイ、神奈川在でございますが、去年良人と二人で江州まで出稼ぎに來ましたが、良人は瘧瘧で亡なりましてから、妾は伊勢の方へ仲居奉公に行てゐましたが、種々不幸な事が續いて、後月から此京都へ來ましたが、少しの貯蓄と詰らん男に掛り合ッて、無くなして仕舞ふ、泣面に蜂で病氣は出る、此間まで上京の方に居ましたが、御存知の通り四五日前から、此うして此家へ……ハイ、名でございますか、名は……アノみやと申します」
喜蝶「オヤおみやさん、おみや……ヂヤア蘭蝶の……」
周作「成程、是は妙だ、喜蝶さんの十八番の蘭蝶の……イヤ喜蝶さんにおみやさん、何だか新聞の原稿になりさうだ呵々々々」
喜蝶「呵々々々其樣な意氣な話になれば難有いが……イヤ戯語は戯語、ヂヤア、おみやさん、お前さん、氣分が宜れば、此うして居る内に、一寸私が地を彈いて見やすから、お前さん高音を掛けて見て下さい、幸ひお梅の置いて行た三味線がありやすから」
周作「妙々、喜蝶さん、地と言はんで、例の緣でこそあれ末かけてといふのを一段、何卒聞せておくんなさい」
女「ハイ、デスガ、一遍風呂へでも行て、爪を少し如何かしらいと……」
周作「ナニ爪……爪を如何するの」
女「如此なに延て糸道が少しも……」
喜蝶「ダッテ、お前さん、身体の惡いのに無理をして、風呂へなんぞ這入ても宜うげすか」
女「ナニ熱があんまりありませんから、構やアしますまい」
喜蝶「お前さんが、私と一所に稼いでおくんなさりやア、實に難有へので、お梅は一寸手は廻るが、何分アノ通りの醜婦だから、御座敷となると客人の方で二度喫驚りで、何日でも、彼が爲めに、儀祝の一段になると、幾許かの損をするので……」
女「夫では妾だつて矢張り……然しお客に呼れると座敷へ出るのですか」
喜蝶「ナアニ、心配には及ばないので、私の得意場といふのも可笑いが、定例の廻り場で、先ず町から上へ行て、三條の旅宿屋を流して、繩手から新地、夫から宮川町、事に依ると木屋町邊へも行く事があるが、マア、新地までが場所で、通筋の立派な青樓より、三條邊の宿屋が、新地なら膳所裏がお得意で、一寸客人が娼妓に勸められて、其妓の恍惚の遺情とも知らずに、呼込で遣らせる位だから大体は別に一間を借してくれて、滅多に客の前で語るなんテ事はないから……」
周作「ソシテ、大概一曲で……」

喜蝶「規則が拾錢だが、客に依り、又娼妓の氣前や、其座敷の場合に依て、別に祝儀をくれる事もあるので、ソシテ偶にはむつかしい物もあるが、大体定例の蘭蝶明烏、梅忠に毫上伊多八とらいサ

女「妾は今お言ひの外に權八、お染、千兩幟ぐらゐよりか知りませんが……

喜蝶「夫だけあれば結構です、然し時々宿屋の田舎客が全段に語れといふ野暮な注文をする事があるから其時には掛合で、ナアニ、聲は如何でも好いのサ、其處は女といふ一得があるから……夫につけても早く其顔の膏藥を……

周作「呵々々々ソロ〳〵御亭主が氣を揉み出したから大笑ひだ、イヤ喜蝶さんの云ふ通りチンチン、チンと往來を流して歩いてゐるのを、遠音に聞いてゐると、如何な意氣な人が三味線を彈いてゐるかと思ふ事があるが傍へ來て顔を見ると二度喫驚、多くは喜蝶さんのやうな、ヒョッ……呵々々々ヒョッとすると眞成の好男子も偶にはあるが……

喜蝶「嫌め〳〵、嫌み玉へ、私はおみやさんと相談が出來たから、子ェ、おみやさん、オヤもう日が暮れたア、秋の日は短いなア、おみやさん、ヂヤア今の内にお湯は如何です、失敬ですが、錢は

女「ハイ、難有う

周作「空も晴て來たらしいが、いよ〳〵といふ天氣を見定めたら、僕も御一緒に出かけるか、しませう

女「ヂヤア一寸お湯へ行てまゐります

喜蝶「緩くり行ておいでなさい、お前さんが枕にしてゐる、其風呂敷は、慥かにお預り申しておきやすから

女「何卒お願み申します

第十七回

仇名草

重助「傳七さん、計算は迹にして、徐々膳の上で始めませうか

傳七「サテ、貴君マアお構ひ無く、お始めなさい、一寸此の紙幣だけを、此らして革袋へ入ておきませんと、時に前刻貝田が持て來た、掛物の賣買定約書は……

重助「貝田……ハア、アノ、何ですか、探幽の鯉の畫の……彼なら確か其革袋へ……

傳七「イヤ、宜しいでざりました、マア、此の紙幣は此らして……貴君がわんまり美味さに、お始めなさる依て、私も咽がゲピ〳〵して……

重助「ヂヤア、一杯獻じませう

傳七「左樣か、ハイ、是は大きな猪口だ、オット……

京都三條小橋近傍なる、三芳屋といへる旅籠屋の表二階にて、膳酒に愉快を極むる二個の客人は、共に播州姫路の豪商にて、吉田重助、堅田傳七の兩人なるが、京阪の間にて、珍奇の骨董を購求の爲め、出京なし、二三日以前より此三芳屋に滯留してをるなり、重助も傳七も共に上戸なれば、互に杯の、獻酬をして、暫時の間に、一二本の壜子を傾けしが、重助は所謂陽上戸の癖として

重助「此うして手酌で飲でも無味は無いが、若婦人に酌でもさせるか、但は三味線でも彈せて飲だら、又格別でせう呵々々々

傳七「左樣ぢや、今夜のやうに、此ら風が吹ぬと、久々で河東へでも行くのやけど、何分此の暴風では……

重助「昔から云ふ二八月で、今ごろは、エテシテ、如何な事があるものです、然し雨の休だいけが尙可ぢや

傳七「せゝて、此家の內の下婢にでも、酌をさせて、ソシテ破三絃線でも彈らせやうか

重助「今夜は誰も外へ出ぬと見へて、何だか格別忙がしさにしてゐて、此處も此うして、放棄て置く位ぢやから、其樣な事させるのは氣が無いやうで……夫に下婢の酌といふやつは、何處となく氣忙しないもので、却て酒がうまく飲めんから……イヤ何處でか好い音が……

傳七「貴君は耳が早い……ウ、成程、アリヤ、流しの新內ぢや、大層意氣な……ダガ稼業と いふものは、强いものぢや、此のマア、風の吹く晩に……

重助「アレヲ呼で一段語らせませうか

傳七「サア夫も好うございませう

重助は早速下婢に命じて、往來を流し歩く門附の新內語りを呼込、何彼と餌物を極めて、次の間にて語らせながら、耳と共に杯を傾けつゝ、

重助「傳七さん、一個は婦人ですナ、何うも美聲だ、孰も……

傳七「聲は美いが、顏を見たら、二度吠驚でせう然し三味線もなか〳〵

重助は少しは遣れる口と見へて酒と三味線の調子の二つに浮されて吾を忘れ

重助「腹が立ッやら、悔しいやら……

傳七「呵々々々重助さんが、トウ〳〵釣込れた、マア靜かにお聽きなさい、今が肝心のところだ、一盞獻じませうか……其樣に聽き惚て、酒が溢れますせ

重助「時に女夫でせうか、アノ男女は……

傳七「ソラ始つた、例の嫉妬が……女夫でも兄弟でも構はんぢやありませんか

重助「ダッテ、格外意氣な聲だから……」
傳七「其樣なに氣になるなら、語ッてしまつたら、此處へ呼で、履歴を……」
重助「呵々々々、朝顔の宿屋ぢやないが、身の上語も又一興か、マア然うあると、差詰め私の役が駒澤で……」
傳七「ソコデ、彼の婦人が盲目とくれば注文通りぢや呵々々々」
重助「顔も見ん内から、然う怪癖をつけては不可ん、呵々々々
次の間で語る若木仇名草も早一段落の終局と成り
「お前も心入替て、勤め大事にさんしたら、親方の喜び、其身の出世、三方四方の好い事は、唯此方さんの胸一ツ、サア、思ひ切て呼ぶまいと、ツイ言ふて下さんせと、事を判たる眞實を、聞いて道理と、此糸が唯伏轉ぶ計りなり
傳重「ヤア、ヒヤ〳〵」
傳助「モシ、濟だら、此處へ來て、傳七さん其紙障を、イヤ是は憚り
重七「サア新内屋さん、ヅヽト……」呵々々々、新内屋さんも可笑しいが、マア此方へおいで
此の男女の新内語りは、前回に其籠城の狀況を描し出したる、喜蝶おみやの兩個あるが、兩個とも呼るゝまゝに、重助傳七等が、坐敷に來りて頭りに頭を下げながら

喜蝶「〳〵イ日那今晩は、眞に荒吹きまして、〳〵イ只今は難有ら
重助「イヤ、誠に面白かッた、姉さんも、御苦勞だつた、三絃といひ、聲曲といひ、實に感服ぢや、如何だへ一口……」
喜蝶「イヱ、是は恐入ります、私が手酌で……」
此内重助傳七の兩人はおみやの擧動を見るに、客貌といひ、愛嬌といひ、頗るの語を用ゐべき美人なれど惜哉頬に膏藥を貼附たるを、羞らうにや、兎角洋燈の燈を厭ふ風情せるを、重助は心もつかず
重助「サア姉さん、お前も、最少此方へ……」ハ、ア齒痛かな、夫にしては能く語れますナ、背後の紙障を締めて……是は憚り……風で洋灯の火を取られると不可ンから、此イヤ風では、往來を流して歩くのも、サヅ、强いだらう
傳七「マア、緩りと休んで行くが好い、重助さん、此の姉さんに盞を……オヤ酒は不可ン、ハーン毒忌みか、ヤレ〳〵、ソシテお前方は夫婦かナ呵々々々不用ぬ探索ぢやが、最前から此のお人が强う氣を揉で居られるから呵々々々
喜蝶は流石遊人の一端なれば、是までにも度々客の座敷に招かれたる事あれば場席にも世辭にも馴て、然も極めて酒を嗜めば、御返盃は却て失敬ですからと手酌で得意の連飲、お宮

は今宵が皮切なれば、何か休裁の悪きにや、洋燈の光りに顔を背け、酒も飲ず、物も言はず、只モチ〳〵と遠慮の体に、重助は氣の毒とや思ひけん

重助「姉さん、お前の美麗で一寸瀟洒したものを、端歌でもト、一でも

お宮はさも羞然に

お宮「ハイ、妾は誠に不調法で

重助「然う云はずに何でも好いから

喜蝶は微醉機嫌に浮れて漫に亭主氣取になり

喜蝶「折角、旦那の御所望だから……エ、オイ一寸一ツ端歌か何かを……」

お宮「ハイ……アノ失敬ですが一寸小用にまゐりまして夫から……」

お宮は已が背後の紙障に手を掛け、颯然と開くるトタンに、倏樹と吹込む暴風に忽ち洋燈の火は消へて一室は暫時真の闇

お宮「オヤ飛た粗忽を……一寸燒火を……」

と言捨てお宮は下へ降て行く迹に喜蝶は心づき

喜蝶「オイ下へ行かなくッても、私の袂に燐火が有ッたのに……トレ……」

と言ひつゝ燐火を把出して火を燈り、邊て、火舎にて燒偽するやら、非常の騒ぎをして漸

〳〵元の如く火を點し

喜蝶「ヤットの事で、天の岩戸が開いた、此の風では迚も今晩は稼業に歩く事は出來ない……

……へイ〳〵難有う、又お盃ですか、御覧の通り私の膝の前は、目鏡に團子三ツ、此のお盃を此うおくと、恰是炬燵矢倉で……イヤ是は旦那方の御存知無い事です呵々々々

博士「其位用水桶が置てあれば、何程暴風でも、火の用心は確かだ呵々々々

重助「コレ、新内屋さん、お前のアレハお内儀か……

博士「顔に膏藥が貼てあるが、中々別嬪だ、夫に第一好い咽だ

喜蝶「へイ、ナニ、女房といふではございませんが……イエ彼女は例も長小便で……今にまゐります、今晩はお陰様でエ〳〵〳〵、到底モウ此風では……

重助「何程何でも、長い小用で一遍下婢に聞いて見るが好い、酒が不飲ん樣子だから先へ逃げたかも知れん

喜蝶「イエ、如何しまして、私を置て一個で歸る何テ、其樣な氣遣ひは……

此の談話の最中へ、他の坐敷へ通ふ爲めか、幸ひ下婢が廊下を通ると、喜蝶は氣の毒さらに呼止め

喜蝶「モシ一寸、女中さん……オヤ又洋燈が消ると大變ですから、紙障をッと開けなすッ

で……

下婢は靜かに紙障を開けて

下婢「ハイ、何ぞ御用で

喜蝶「アノ、モシ妾の連の女は

下婢「ハイ唯今、何だか、三味線の糸を買て來ると仰ッて

喜蝶「困るなア、糸は妾が持てゐるのに、馴れないから……是は御面倒さま、歸ってまゐりましたら早く來いと仰しやッてエヘ、、、、、毎も御繁昌で御結構で……お内は……

下婢「和郎の先の合彈さんは

喜蝶「ヘイ彼女は大坂の方へ行て仕舞ました

重助「ハア、ヂヤア、アノ別嬪は後妻かナ

喜蝶「エヘ、、、、

堅田傳七と重助と喜蝶の談話の内に、一隅に置きたる手提げ革袋の見わすなりしに不圖紙の附き、四邊を見廻しつ、

傳七「重助さん、此處に置た革袋が無いが若貴君……是は妙だ

重助「革袋……エ、今貴公其處に

傳七　サア、置たに違い無いが、見へないのが不思議で……アノ中と……是より一座大騒ぎとなりしが、此室内には重助傳七の外は喜蝶とお宮と此家の下婢が時々出入りせるのみなれば、何にしても、お宮が中座して此席を退きたるこそ不審なれと、兩人の疑點はお宮の一身に集りたれども、其同行の喜蝶が平氣にて此席に居り、且お宮の三弦さへ置てあれば、強て其賊とも定め難く、兎に角お宮の歸るまで喜蝶は人質なり、取逃しては警察の種を失ふ道理なりとて左右より之を取圍み、警察へ紛失屆をやせん、お宮の安否の判るまで暫時猶豫やせんと、宿の主人も出來りて共々に心を惱め酒さへ興も醒果て頗りに評議を凝しけり」同じ夜の事なるが、彼の永井峰雄は鯉魚の一軸を詮議の爲め頃來京地に滯留せるが、或る親戚の家に招かれ、酒宴に夜を更せしが、十一時過ぎに至りて稍暴風も小止みしければ、即て暇を告げて該家を立出で、己が旅寓なる西石垣の方へ立返る途中、豫て認め置たる一葉の端書を郵便函に投入れんものと月の光りに其處此處見廻しつ、來かゝりしが、トある四ッ辻に郵便函の有りければ、足を早めて進み近く處へ、向ふより歩み來りし一人の人物、吾より先に歩を進め、彼の郵便函の傍へ立寄りしかば、峰雄は此方に足を停め、其何者なるかを透し見れば、年齢と衣服は、夜目にて定かならねど、手に革袋を提げたる女にて、郵便函の上に革袋を置き、その口を開けて、手を差入れてをるにぞ、サテハ投入るべき書狀

を探りをるにやと、尚も目を留めて、様子を伺ひゐたるが、何を探りをるか、容易く立去るべくも思はれねば、今は待兼て、自分の端書を先に投入んものと足音高く進み近けば、其婦人は是に驚かされて、始めて此方を振向きしが、端無く峯雄と顔見合せ「オ、」といふより早く、革袋の中より何か把出して、懐中に捻込み、そのまゝ、革袋を峯雄を目懸けて投附け一目散に逃出しけり、峯雄は其女の顔に膏薬を貼附けたれば、其何者たるを辨へず、又何故に投打を爲して逃去りたるや、更に合點の出ねば其革袋を手に取り逃行く婦人の迹を見送りて小首を傾くる折から東山の方に當りて十二時を知らする梵鐘の音ボ――ン

第十八回　寫眞

却説小泉要一は永井の秘藏の一軸の失措より其身に受たる嫌疑を晴さんと彼是奔走中、彼の現品の預り主なる眞田五兵衛も大阪に居らずなりしかば彼の所在をも探索してゐる折から西京の同業の者より、眞田は西京に滯在して其一軸を賣買せんとて密に買人を尋ねてゐる樣子なりといふ通知を得たれば、早速上京して其實否を探りしに果して其事の實説なれば、急に神戸の永井方へ此由を報道したるが、峯雄は此くと聞て金子を携へ上京なし、四條西石垣なる旅亭津四樓方に宿泊なし、要一諸共眞田の居處を探りしが、彼の東路に有りといふなる逃水ならねど、居ることは判りながらも其何處といふことの判然せざれば互に手を分けて其所在を探る折から昨夜峰雄が不慮も河原町にて、怪しき婦人に出會ひ革袋を投附けられ、早速其筋へ訴へたる旨を傳ひ聞きければ、要一は翌朝早く津四樓に音問て

要一「ヂヤア、其お投附けなされた革袋の中ゴ、眞田からの、アノ一軸の賣買定約書が……」

峰雄「當名は堅田傳七殿と記して有たが、何でも其革袋は堅田といふ人の所持品で有たのを、掏賊が途中で窃盗て、金を出した迹を僕に投附けたのだらう

要一「掏賊と仰しやるは、婦人でしたではございませんか、如何な風体な奴でございました

峰雄「夜目なり、急劇の場合だから、確とは見認んが、顔に膏薬が貼附て有たやうだ、時に今お前の話では眞田は大津に……」

要一「其事です、一昨日伏見に用が有て、歸りに稲荷から瀧車に乘る目的で、停車場へ來ましたが、尚時間が早過て、恰是大津行の瀧車の通る處で、其下等列車の一室の窓から顔を出してゐたのが五兵衛で、オーと互に顔を見合すトタンに、瀧車が出て仕舞ッたので、すぐ京都へ引返して、最初五兵衛が上京した事を知せてくれた男の所へ行て、大津の同業の樣子を尋ねて、昨朝一番瀧車で大津へ行て、五六軒の同業を聞合せましたが、モシ若且那……」

要一「イエ、五兵衛は探し出ませんが、其代り妙な事を聞いて来ました

巣雄「妙とは……

要一「昨日大津の停車場で有た事ださうですが、西京から著いた中等列車の中から、髪を束髪に結ふて、小荒いお召の袷に紋純子の黒の帯を締めた、官員の令閨然とした二十前後の婦人が出るトタンに、其處へ來かゝッたのは五十五六の男で、然も此の寒天に向ふのに、汚れた單物を一枚著て、尻の破れから色の褪めた花紋を出してゐる、惡漢風の老爺でしたが、其婦人を見るが否や「オ、姉御」と聲を掛けたのに、其婦人は知ん顔をして、通り過ぎやうとしたのを、老爺と矢庭に引止めて、夫から互ひに大聲を出して議論を始めましたが、何しろ場所が場所だのに、喧嘩の相手が相手ですから、ソラと言ッて見物人が黒山のやうに集りましたので、婦人も老爺も何か言ひ合ひながら、大津の町の方へ行ッて仕舞ッたので、男女とも何者か判りませんが、その婦人の方は是でございます

要一は袂より二ッ三ッに引裂たる寫眞を把出して巣雄の前に置けば、巣雄は何心無く其裂れ〴〵を繼合して見て駭き顔

巣雄「オ、此寫眞はお蓮……コレ、是が又何で、其婦人の……

要一「私の朋友が、現場に居合せて、其男女の喧嘩を目擊して居ましたが、喧嘩の最中に其婦人が、袂から其寫眞を落したので、混雜の紛れにソッと拾ッて來まして、右の話をした後で、此寫眞を出して見せて、現場の模樣と結髪風俗は異ッてゐるが、相手の婦人は此顔だと言ッて出された時は、アノ……私は然うで無いと知りながら、万一お時では無いかと、實に驚愕さましたが、夫ではお蓮さんといふのは……

巣雄「是だ、吃度お蓮だ、其束髪は官員の細君に成てゐるといふ噂も聞いたから……此間大阪の停車場で青木さんにも、お話をしたが、其老爺は小兵衛だらう、恐く其奴に違い無い、實に恐るべき奴輩だ、イヤ憎むべき奴輩だ、然し彼奴輩が此邊を彷徨いて居るかはら、又如何な奸策を仕をるかも知れんから、一時も早く眞田の所在を探して、一軸を取退さんと不可よ

要一「サア、其事でございます、貴君が例の革袋を警察へお届け遊したので僥倖で、孰れ被害者からも屆けてあるに違ひございませんから、警察へ出て尋ねたら、被害者の堅田とかの宿所が知れませうから、その堅田に就いて又、眞田の所在を聞いたら恐く判りませう

巣雄「如何にも、眞田も堅田に向ッて買賣定約書を渡す位だからマサカ、他へ相談する事もあるまい、夫に彼の一軸は僕が金を借りるに就て、敢て抵當といふでも無く、只信用を添る爲めにと言て預けて置たのだから、即ち所有主たる僕に於て故障か有れば、預り主が

勝手に他人に賣却の出來る道理は無いから、眞田といふ男に面會して、先の出やうに依ては、法律に訴ても話は附く理由だ

要二「世の中の事といふものは、妙なもので、私の手にお蓮さんの寫眞が這入り、又貫卿のお手に落た革鞄の中から、尋ねる一軸の關係の書類が這入て居るとは、とんと演劇のやうで、實に小説のやうで……

峰雄「小説と言へば、不思議の事から、彼の一軸に關係ッて、飛だ苦勞をしたアノ子は……

イヤお時さんは如何したへ

要二「ハイ矢張富永の方へ手傳ひに……

峰雄「アノ子は兩親や兄弟があるのかへ

要二「イヱ、當時は母親許りでございますが、アレの身の上についても、種々複雜だ履歴があるのですが……

語る折しも津四樓の下婢が一葉の差紙を持來り

下婢「旦那樣、警察署から、如此なものを……

峰雄「ドレ……

と手に取りて讀下し

峰雄「要二、今ので、卽刻の招喚だ

高麗橋二丁目の青木彌兵衛の宅へ峰雄の母の永井政子は一人の娘を伴ひて入來りしが、折しも家主彌兵衛は西京より到着せる峰雄の郵書を讀でゐたるが、夫と見るより書狀を傍に置き、

青木「オ、御隱居、好うこそ、今お宿へ使ひを出さうと思ッてゐたところ、京都の峰雄さんの處から、郵便が來たので、實に好い都合でした、サァ、ズッーと、お伴は……

政子「ハイ、今日は、ヂャア、悴から郵便が、好い所へ出ました、此のお子と何ですよ、豫てお話し申した、軸物の事に關ッた、辛い目にお逢ひの、アノお時さんですよ

お時は慇懃に手をついて、青木へ初對面の挨拶をすれば青木も程好く辭誼をして掛けし眼鏡の上よりお時の顏を熟々詠め

青木「ハテ不思議だ、此娘の容貌は過日來た僞物お時といふ娘に彷彿だ、只軸物が似せてある許りか、夫を持て來た人間まで似せてあるとは、實に念の入た仕事だ……

と言ひつゝ、傍に置たる書狀を政子の前に出し

青木「御覽なさい、此らいふ書面が來ました、此の通り破れた寫眞まで添へて、夫が毒婦のお蓮とかの寫眞だと、其處においでのお時さんに似てゐるが妙だ

政子は峯雄の書狀をくりひろげて口の内にて讀下し

政子「此の書狀の文句では、要一の馴染の人が大津で此の寫眞のお蓮にも、小兵衛とかいふ同謀者にも逢たやうに書いてありますが……

青木「左樣、軸物の一條で要一も非常に盡力をして、頻りに眞田の居處を探索する中に、三條の三芳屋といふ旅籠屋に泊ッて居る、播州の客人に、五兵衛から、彼の軸物を賣込むべしで有た處を、不思議な事から、峯雄さんに其事が判ッて……

政子「左樣……即て軸物を取返して歸るから安心して待て居ると認めて有りますが、此の樣子では、要一も悴も心配甲斐がありるといふものです

青木「此間から、アノ軸物の騙盜はお蓮と小兵衛だらうと推察てゐるが、二人とも高飛をして大阪に居らないやうす、殊に確乎な、證據も無いので、迂濶な事も言へ無いと思ッて默止てゐたが、イヤ夫にお蓮は峯雄さんが關係が有た婦人だと云ふので、尙更躊躇てをつたが……モシ御隱居、惡い事は出來ないもので、如何して洩たか、アノ詐斯の一條がお上へ聞へたと見えて、お蓮を密々探偵に成てゐると見えます

政子「サア、其事、今此方へ參る途中でお時さんの話には、此娘の方へも、お上から、穩密のお調があつたさうで

青木「ハア、左樣か、お時さん、お前の方へは、何といふて

お時「ハイ、妾の居ります內は、御存知の人集り商賣でございますから、各種なお客が入ッしやいますが、一昨日、三十餘りの好男子て温和しさうなお方が、內へお出なさいまして、お前の內に居るお時といふ娘に、好く似た者が有て、其者の事で取調る事があるが、お時といふ娘の寫眞があるなら貰ひたいと仰しやッて、何だか大層むづかしい肩書のある御名刺をお出しなすッたので、內でも何事か起ッたのかと、大層怖がッて、有合した妾の寫眞をお渡し申しましたら、又御面倒をするかも知れんか、其時は宜しく賴むと仰しやッて、叮嚀に挨拶をして、お歸りなさいました

青木「ウン、夫だ、其人だ、內へ來たのも、何でも秘密に探偵なさる事と見て、私の內へいでの時も、叮嚀に挨拶をして、軸物を持て來た男と、附いて來た娘の年齡恰好と如何なだ、物の云ひやうは純粹の大阪言葉で有たか、但は轉訛が有たといふ事まで、お聞糺しなすッて、近日にその附て來た娘の寫眞を持參して、尙實否を糺して貰うから宜しく賴むと言ひ置れてお歸りに成たが、モシ、彼がお蓮の探偵なら、尙何か他に犯罪が有るに違ひない……お時さん、アノ軸物に就いて、種々御苦勞に成た上に、人違ひで此上御迷惑をかけるとお氣の毒だから、能く氣をつけて居て下さい

お時「妾も氣味が悪うございまして……
青木「爾らしてお前はお袋と御兩個限り……御兄弟と……」
お時「ハイ姉が一人でございましたさうで……
政子「その姉さんは……
お時「ハイ、妾の乳飲の時分に人に遣たさうでございますから、今は何處に如何してをりますか……
政子「ヂヤア、雄の兄の新太郎と同じうやな譯で……夫に附けてもアノ軸物が……
青木「軸物は取戻せるに極てゐるが、新太郎さんの安否は如何も……
政子「今更急に氣に掛けるやうですが、今度の軸物の間違から頻りにアノ子の事が氣に成りますが、新聞へ廣告して、アノ子の安否を聞合したら如何でございませう
青木「夫は好いお考へだ、私も其處へは氣がつかなかつた、然し萬一當人が其廣告を見て、名乘ッて來た時お前さん、新さんの顏を記臆しておいでなさるか
政子「顏は記臆えてゐませんが、彼は證據に成る品を持てゐますし、夫に明細な履歷を言ひませうから……
青木「成程、證據の品と履歷の話で眞僞を定めたら間違は有りますまい、此間の軸物一件に

懲てゐるから、ッイ思ひ過しをして、又僞物でも出て來はせまいかと思ッて、呵々々、イヤ僞物と言へば、尙例の僞筆をね目にかけなかッたが、一遍見て下さい、實に能く出來てゐますせ

と言ひつゝ、彌兵衛は床の間の地袋に貯藏おきたる僞筆の鯉魚の一軸を把出し、政子とお時に見せてゐる折から青木の店頭へ「ハイ御免、彌兵衛さん、お内ですかと言を懸けて入りくる者あり、誰でございませう此の人は、署者の他は恐く誰にも判りますまい

青木の主人彌兵衛は、是非已に逢ひたき由なる客人の有りと聞て、何者にて何用かと、心に考へつゝ、政子とお時に暫時失禮する旨、挨拶して、片手に釣瓶形の煙草盆を提げ其人を通し置きたる中の間に來りて見れば、客人といふは五分刈の散髮頭に青髭の剃立て、藍の千筋の秩父縞の袷の下に荒き薩摩飛白の單物を襲ね、白木綿の三尺帶を締め、年之未三十に成るか成らず、演劇でする、切れ兎三郎に疵の無きやうなる俠客風の男が、兩膝を出して坐ッてをるにぞ、更に不審を重ねつゝ、靜に坐に就きて時候の挨拶をすまますが否や

青木「貴郎は何處から、何の御用で……
突然問掛れば、客人はニタリと笑ッて
客人「エヽ、私は松島の者で、用といふのは、先達てお内では、探幽の僞筆の、鯉魚の軸物を

お買ひ成すッたといふ事を、或人から一寸聞きやしたので、其事に附きやして……

青木「ハイ、別段アノ品は購求めたといふ理由でもありませんが……

客人「ヤヤア、如何したのです

青木「マア、質受をしたやうな理由で

客人「質受け……アノ軸物を……モシ、旦那、お前さん、何日アノ軸物を、典物にお置き爲すッたので……イヤサ、何處からお買爲すッて、質にお遣り爲すッたのです

青木「イヤ、是には少し事情のある事ですが然し何も貫郎さんが、其樣な御詮議を爲さるには……

客人「イヤ、詮議をする理由が有るから出て來たので、御面倒ながらアノ軸物がお手許にあるなら一寸お見せ爲すッて……

青木「御覽爲すッて、何に爲さるのです、貫郎がアノ軸物に關係があると、仰しやれば、私方にも少し故障があるのです

客人「ナニ、故障がある、面白へ、故障があるなら、聞きやせうが、夫より先に私の方で聞いて呉れ事があるので……自分の品でも無エものを、質受けするとは如何した理由です、又買ひなすッたのなら、賣渡証書が有りやせう、夫をドウジ……

青木「イヤ、縱令他人の所有品を、買うが、質受しやうが何も關係の無い貫郎さんが、彼是仰しやる理由はございますまい、夫ともアノ軸物は貫郎さんの……よもや然うでは……

客人は彌兵衛の言葉を半途にて遮り

客人「オイ旦那、オイ〳〵、人を輕蔑した事を言ひなさんナ、今ぢやア如此な見る影も無エ野郎で、數にも足らヌ エ遊蕩客だが、其以前は舊幕の旗本の次男で……イヤ、此ら序品から觀發品まで法華八の卷を悉皆諳み上げちや、短けへ秋の日にやア話し切れ無エから、ザッと略して轉讃しておくから、其氣で難有く聽聞しヌエ……幼少へ時ユ發心して、深川の妙導寺で出家を遂げ、何でも高祖の迹を遂て、學識共に世に優れた、名僧智識と云はれやうと、四書に學問に勉强したので、京都の本山でも評判が好くッて、三十に足ら無エ身を以て、此の寺町の日正寺の住職に直されて一時は笠原道隆と云はれ、お上人樣、御院主樣と立られた身の上だッたが、肉身凡夫の悲しさにやア、ツイ詰らヌエ女に掛り合て、トウ〳〵お定りの傘一本で、今ぢや昔の身分を肩書、法華小僧の新吉と云はれて居るが、アノ偽物の鯉魚の一軸は少し子細が有て日正寺に居た時に、已が秘藏をしてゐたのだ、サア、此ら毬栗頭の皮を剝いて、綺麗に說教をしたからにやア、今まで他人の物を偷盜ておゐた、その御冥加錢と心得て、軸物の外に御布施を添へて、早く私にお渡しなせへ

新吉が何心無く其身の素生を明したるを、前刻よりの高談に不審を抱き、お時と共に奥と中の間の障子の陰に身を密め、紙の破目より様子を伺ッてゐたる、政子は揺なく之を聞いて、心に思ひ中る事あれば、ハッと許りに驚くのみか、お時は又新吉と名乗る其の人は、先夜天神橋にて其身の危急を救ひくれたる上人なれば、是も亦一驚を喫し、互ひに堅唾を飲で控へてゐる、此方の彌兵衛も亦政子と同じ感情を抱けば、故意と少しく言を和げ

青木「夫で様子は判りましたが、ヂヤア、貫郎さんは、以前は笠原道隆と言て、アノ軸物の所有主で……」

新吉「其様ナ事は、今更如何でも好いので、早く今の返事を爲せへやし」

と言ひつゝ、奥と取合の障子の方に屹度目を附け、己が威勢を視さん目算にや、突然身を起して障子に手を掛け

新吉「誰だ、拙劣を極めやアがるのは、己の顔が見たきやア、此處へ出て拝みやアがれ」

とヤコハにガラリと引開くれば、政子もお時も勃ひ詮方なく、怖々其處に立出るを、新吉はお時の顔を見て

新吉「ヤア、お前は何日か天神橋で……」

と言はれてお時も口を開き

お時「ハイ、アノ時は、貫郎のお陰で……」

新吉「おめへは此處の娘か……」

お時「イヽエ」

新吉「娘で無けりやア、客人だらう、過去ッた禮は云ふにやア及ばネエから、早やく話をつけるやうに、おめへも旦那に云てくんネ」

青木「イヱ、お話は附けますが、元來貫郎さんのお内と松島の何處で……」

新吉「今ゐる處ハ松島だが、イヤ其様な事は問かなくッても好いから、早く軸物と酒手ン……」

新吉は彌兵衛が何を考へてゐるか、政子の何者であるかと知らねば、頻りに催促してゐる處へ店の方にて聲高く「新吉、倚話がつかネエのか」

新吉と彌兵衛の談判最中へ「新吉来話が附かネエのかと言ひつゝ遠慮柄杓も無くノ來りし」は新吉に親分と頼まるゝ鶴亀の銀次なるが、彌兵衛と政子の胸中を知ねば何の感じも無く

銀次「ヤイ、新吉、何をグッ〳〵してゐるのだ……話は未だか、ヘラボウ長げへぢやネエか日本人は氣が短けへせ、面白くも無エ」

新吉「親分お待遠う、今談判最中だ、何日かお前さんにも話した事のある、ソラ、天神橋で……

件の時の娘が、此處の内に關係かあると見て……御覽なせへ、妙ぢやァ有りやせんか

銀次「ホンに是りやァ妙だ

と言ひつゝ、銀次は懷中より、一葉の寫眞を把出して、お時の容貌と競べて見てゐるを、新吉は不思議想に

新吉「親分、ナ、何故其寫眞を……

銀次は新吉の耳に口を當て何か囁やけば、新吉は點頭きて

新吉「ウン、ヂヤァ、モウ、探偵が……

其儘寫眞を把て懷中せんとするを、何思ひけん青木は急に言語を懸け

青木「イヤ、モシ、新吉さんとか、此軸物に就いては少し複雜たお話もあるが、御朋友がお待兼の御樣子だから、孰れお宅へ伺ッて、お話申す事にいたしませうが……

新吉「如何なお話か知りやせんが、夫はおめへさんの御勝手になせへやし、夫よりは私が先刻からお引合へ申してゐる、軸物と價金の一件は如何して、おくんなさる

銀次「モシ旦那、此の新の野郎にやァ、餘儀ェ、金の入ることがありやすから、お前さんの方でも、不正な品を默ッて秘藏ておゐた科料に、ドウゾ、澤山償金を出して遣ておくんなせへ

新吉「何だおめへッらは、人が物を言ふのに返事もしねへで、顔許り見合ッてゐて……顔が見たけりやァ、涙とで綴り見るとして、此方の話を早く着けておくんなせへやし

青木「軸物のお返事もあるが夫よりはァァ、その御朋友の持てござッた婦人の寫眞を、私の方へ賣て戴きませうか

新吉「ナ、何ですと、此の寫眞を……買ひたきやァ隨分賣ても上げやせうが、是は寫眞屋の看板に晒してある、俳優や藝妓の寫眞とは理が違ッて、私の方にも無くッてならぢェ、品でげすから、チッと價が高へが夫せェ承知なら……

銀次「オイ〳〵新吉、汝その寫眞を他人に渡して……コレ例の一件が……

新吉「好いテことよ、己に任せて置きなせへ……モシ旦那、實は百圓とも言ひテへ處ですが大貧けに負て、五拾圓にいたしやせう

新吉はよもや買うまじと思ふより、思ひ切た、高價を吐出し、鉈豆の煙管にて、烟草を薫らしつゝ、彌兵衛の顔を上眼にて睨ンでをりしが彌兵衛は頻りに點頭つゝ

青木「ハヤ承知しました、五拾圓で申し受けませう

新吉は彌兵衛が意外の返答に少し遽込み。

新吉「エー此の寫眞をアノ五拾圓に……

と言ひつゝ、銀次の耳に口を寄せて

新吉「親分、仕方が無エから賣らう……

銀次も新吉の耳に口を寄せて

銀次「ダッて、アレを賣ッちやア、彼の、口の……

新吉「ナアニ、好いよ、大丈夫だよ

此く囁き了りて新吉は彌兵衛に向ひ

新吉「ヤヤア旦那、安いけれども仕方が無エ、五拾圓で賣りやせう、サア金と引替ッ！

彌兵衛はそのまゝ立て居室に行き、小箪笥の抽斗より拾圓紙幣を五枚持來りて、新吉の前に置き、新吉よりその寫眞を受取て熟々見入てゐる新吉は紙幣を碌に改めもしないで、頂掛のカクシへ捻込み

新吉「ヤヤア、旦那、今日は是で歸ッて上げやすから、今何か話が有るとお言ひ爲すッたが、其話しと一所に、此の鶴龜の親分の内へ、エ、松島へ來て銀次親分の内と言へば、すぐ判りやす……オイ親分、歸りやせう

銀次「歸るは歸るが、汝アノ寫眞を

新吉「親分未其樣な愚痴な事を……已に任せてみさッ エといふに、サア、歸らう

新吉が頻りに歸りを促すに銀次も據ろ無く

銀次「コレハ大きに、御邪魔をいたしやした

新吉「返事が遲いと又出やすせ

此時お時は始めて口を開き

お時「夫では、貴君、お歸りでございますか、あまりお妻がお替り爲すッたのでッイ彼時のお禮も碌に申しませんで……

新吉「イヤお禮で却て痛み入りやす……ヤヤア、其方においでなさる御老母さん、左樣なら……

新吉は銀次の袂を曳いて急いで門口へ出掛け、五歩六歩歩いて反顧り

新吉「親分、青木の内から誰も來やアしねへなア

銀次「ウン、誰も……新吉、汝も餘程、惡漢に成たぜ……

新吉「何故ッて……自分が抱寢をした女が、見すゝ探偵になッてゐる事を知てゐながら、その證據イヤ人相を探る、目的になる寫眞を、如何に金に目がくれても、あんまりぢやア無へか、敵の手へ賣る何ッて

新吉「呵々、、、

銀次「オイ、笑ひごッちやァ無エせ、可愛相に……

新吉「親分、アりやァ、お前、誰の寫身だと思ッてゐなさる

銀次「誰のッて、汝が持てゐれば、問くまでも無いぢやァ無エか、先刻汝が出掛けた迹から、己も加勢ながら出掛けやうと、三尺帶を締直してゐる處へ、探偵らしい奴が遣て來て、汝の所持品を調べるから、汝が毎も大事に掛けてゐる、アノ寫眞だけッッド拔いておいたのだァ

新吉「ヂヤァ、お蓮だと云ふのか……フ、ン

銀次「イヤに鼻で笑やァがるナ

新吉「親分アノ寫眞は、お蓮のぢやァ無へ、言はゝアノ青木が手盛りを喰たやうなもので、アりやァ、彼處にゐた、お時とかいふ娘の寫眞だ

銀次「然うか、ヌッテ、能くお蓮に似てゐるぢやァ無へか、ッシテ如何してアノ兒の寫眞を……

新吉「ッコが大笑ひだ、何日か千日前を散歩いて歸りに法善寺の境内の二十軒の寫眞店を素見すと、アノ寫眞が有たので、お蓮の寫眞かと思ッて手に把て見たら、トッカ違ッてゐ

るので、一度は放擲出したが、あんまり能く似てゐるので、若や天神橋で助けた娘か、何にしろ買ておけと大枚三錢といふ大金を擲ッて買ておいたのだが、三錢が五拾圓に成らとは夢にも知らなッた呵々々々

銀次「フン、夫で判ッた、ヂヤァ、本人のお時に見認められねへ内にと思ッて、夫で急いだ、ナ實に驚いた、此の仕事には……

新吉「親分來やしたせ

銀次「フン犬か……

二人が此く語りつゝ、歩み行く向ふより此方に來かゝる人の顏を新吉は目早く見とめて

西京八阪新地なる或る料亭の深邃たる一室の内に酒酌交す兩個の客あり、甲は年齢二十五六にて、色白く、背高く、可成りの美男子なれど、冒語ふ時に身を反し頭を掉り何と無ふ俳優擬なる否味の癖あり、乙は年齢三十七八にて、色黑く、身肥へ、温和しげなる人物なれど、他人の談話を聞く中に、拳子にて膝を打き、頻に目をしぱたゝく一種の癖あり、共に羽織は身に適へども、商人に非ず、職工に非ず、官員か否、會社銀行の役員か否、上等とも見へず、下等とも思はれず、到底其業体の何たるを判じかぬる人物なり、甲は乙の膝の前に置たる杯に酒を酌ぎつゝ

甲「成程、今君の說く處も稍、イヤ中らずと雖も遠からずだから、或は然うかも知んが……
然し夫にしては……
と言ひつゝ、迹は言ずして考へてゐる間に、乙は口を開き
乙「僕が今お話し申した奴が、萬一夫でわると、實に容易ならぬ奴で、曾て上州高崎の、二
、本町の江戸屋といふ絹商人の內に雇れ中、その江戸屋の主人といふのが……
と言ひさして甲の顏を見て少しく笑ひを含み
乙「君に彷彿なる好色家であつて……
甲「イヤ、是は怪しからん、飛だところへ引例に出して……夫子自道ふとか、又はお手許自
見とか云はざるを得ずだ呵々々、、、
乙「ソコデ其主人が、遂に其奴と何したので、昨日の下婢が今日の權妻、果は正妻に齊しい
位置を、イナ、權力を占めたので其奴は漸次に女權を擴張して、時としては金箱の鍵まで
預かるやうに成たが……
甲「時に其時分の彼奴の年齡は
乙「左樣……尙ヤット十七八……十九とは成らなかったらう
甲「ソシテ、夫はいつごろで

乙「五年前で有った……
甲「十八……十九……
と指を折て
甲「成程……本年が二十二……其迚なものだらう、一寸と見ると尙十八九にか見ねんとい
ふことだが……
乙「夫から、その絹商人をイヤ、主人をうまく瞞着して、或る晩、タソト酒を飲して、醉潰さ
せて、其寢入端を窺ッて、例の鍵で金箱の……弗筐でないから……造作も無く蓋を開けて
金銀には手を附けないで、紙幣で許り二千圓近く窃盗で、逃去した奴だ
甲「フーン、女にしちゃア强い奴だネエ
乙「トコロが間給へ、君の知てる通り、僕は暫時此職掌を止めてゐたが種々の失敗で、又
元の水工阿彌と出かけて、トウ〳〵神戸港まで流れて來たが、頃日その高崎の絹商人の過
下長が商賣用で出港して、途中で圖らず出會したが、其鼻下長の曰くに、彼奴が近來、京阪
の間を彷徨いてゐるに違ひないから、是非探ッて見てくれろ、若見附けてくれたら、相應
の謝禮はする、幸ひ寫眞を持合したから、君に上げておくといふ開た口に牡丹餅の注文だ
から、委細承知と受込だが、その寫眞と云ふのは……

と言つ、懷中に手を差入れて目をパチつかせ

乙「失措ッた〳〵、今日に限ッて、宿へ置て來た、遺憾々々……先刻からの君の談話の樣子では、頗る似た處がある、ソコデ、君の談話の婦人、イヤ其奴は東京出生だと言ッてゐゾですか

甲「左樣……其奴か其奴で無いか、尙瓦の想像中に描いてゐる人物だから判然はせんが、何でも當時は此西京にをるに違ひない、僕も尙本人にイヤ當人に逢ゾから其容貌は詳かにしないが、ヤッパリ、寫眞を證據にしてゐるのだが、困ッた事には、其奴に瓜二ッといふ人間が他に一人あるので……

乙「其奴もヤッパリ犯罪人か

甲「イヤ〳〵是は其樣な惡人では無い、時に少しは目的が附いたのか

乙「附いたといふ程の事も無いが、當地に住居してゐる、服部といふ朋友から、當今束髮に髮を結ふて、如此々々云ふ風体の女が、市中を徘徊するが、君の盡力してゐる品物に似てゐるやうだから知せると、郵便で知してくれたから、四五日前から上京したのだ

甲「僕も此間から此地へ來て頻りに奔走してゐるのだが、ドウも目的が附いたやうで附かないやうで……コレ見玉へ、僕の持てゐるのは此寫眞だ……

と甲は反身に成て袂より寫眞を出して見せる、乙は寫眞を見て例の目をパチつかせ

乙「成程……能く似てゐる美人だ、成いやうだ、コレ〳〵、此奴に違い無い、シテ見ると彼奴は相變らず、惡事を働いて居ると見える、實に太い奴だ、恐ろしい奴だ、外面如菩薩內心如夜叉とは此樣な奴だらう、世の中に不釣合な物も澤山あるが、美人の惡心を抱いてゐる許り不都合な事は無いと、誰やらが云ふて居たが、眞正に然うだ、その容貌は神聖だ、その心術は惡魔だ

乙は頻りに寫眞に見惚てゐる間に、甲は何か考へてゐたるが、少しく膝を進め

甲「昨日警察で聞いたら、三條の旅亭へ、門附の新內語りに成て入込で、幾許の紙幣の入て有た客人の革袋を攫ッて逃た惡婦が有ッて、其女は年齢は二十五六で、咽喉へ瘡でも膿出してゐると見へて、大きな膏藥を貼ッてゐたと、被害者からの口仲だと言てゐたが、僕の想像では、恐く彼奴では無いかと思ふのだ、年齢の相違と顏の膏藥が却て……

乙は甲の談話を聞ひて點頭きながら尙寫眞に見惚てゐる、甲は笑ひながら

甲「君、大層其寫眞に見惚てゐるが、夫ア毒婦に似てゐる娘の寫眞だぜ

乙「エ、是は僞物か……能く似てゐるなア、然う成てくると實に判らないなア……時に僕は少し思ひついてゐる事があるが、頗る秘密に屬してゐる事だからチョット耳を……

乙は甲の耳へ口を寄せて囁けば甲も頻りに點頭きて

甲「妙計々々、ウン、遣て見やう、面白い〳〵、君、いよ〳〵然うずるな

乙「尤も……何も君職……イヤ君に此地で逢ふたは、第一の僥倖だ

甲「サア、今一盞……

乙「久々だ……誰か呼で、愉快にやらかさうか

甲「ソヲ又持論を主張し始めた呵々々々

みやこ人今日もとひ來と秋萩の、花のむしろを敷て待つ、洛東高臺寺の園内に、酒瓶割籠を携へて、處狹きまで群集ふ、多くの遊客の其中にて、一層目に立つ男と女、男は二十五六、華美なる洋服を着け、金側の時計を胸に掛け女は十八九、お召縮緬の單衣へお納戸繻子の丸帶を締め、兩手に金剛石入の指環を穿てるが、男は手に持てる細き胡麻竹の竹杖にて萩の下枝を拂ひて先に立ち女は舶來の小サな革袋を提げて後に隨ひたり

男「お秋、お前は、東京出生で西京は始めてだと云ふから、未知るまいが、此處は高臺寺と云ふて、秀吉の奥方の高臺院といふ人が、其亡母の爲めに建た寺で、西京の名處の内でも、尤も名高い土地で、近來の名妓と云はれた來歴の句に、名も高き露の臺やはぎの花、といふのが有るが、高臺の二字をうまく詰入て然も能く實況を述てある、東京の向島の花屋敷にも秋萩は多く栽てあるし、柳島の押上げの土堤にも萩は澤山あるが、如此いふ風趣は無いではないか

女「ハイ、左樣でございます

男「余り當地へは久々で歸ッて來たから、明日は又松ヶ崎の方へでも案内しよう

女「ドウゾ、お伴をお願ひ申します……お伴と申せば、御前、御歸京の節は是非お伴を……

男「アは……敗ッて何を言ふか……此間フトした事から

ト言ひ掛し折から、此の男女の先に立て何か談話を仕ながら歩み行きたる二人同伴の紳士

紳士「ヲ、戸賀君……

此方の男の話聲が耳に入りしかフト反顧りて端無く顔を見合せ

男「少し都合がわるから汝は一足迹から……モシ事宜に依たら人力車に乘て、宿へ先へ歸ッて待てゐておくれ

ト男は舌疾く命令けて、足を早めて彼方の二紳士に追縋りけり、女は少しく不平なるイナ失望なる面色して其處此處に咲き亂れたる萩の花を眺めつゝ、徐かに歩を運びて、男の去りた

る方へと練行きぬ」彼方此方の掛床几には、瓢箪の底を叩いて空也踊りを真似る純粋の舊弊家あり、洋瓶の殻を握って、停車場の鈴振を攪倣する似非開化人あり、熊野の獨吟は京四季の連節に交り、舞妓の振袖と官女の詰袖と長短を爭ひ、束髪と捻りづつと新古を競ふは、外にて見られぬ京都の繁昌にこそ、其の雜踏の中に三人同伴の男が一脚床几に腰を掛けたるが、孰れも縞の羽織の手輕き風体なり、中にも一人と近來此地に來りたるものと思はれて外の二人に對して少しく遠慮せる樣子なるが

甲「チョッと御覽なさい、アノ束髪を、頗ると云ふ字に適當の美人ですなア、同伴の、洋服に離れて、獨りで淋しさうに歩いてゐる樣子の可憐らしいこと、此の庭の栽の花も迚も及びませんなア

乙「左樣……アレは何者だらう

丙「何者ッて、今向ふへ廻て行ッたお人の正妻か權妻だらう、君、アノお方を知んの……

乙「知ッてゐるとも、僕の内は以前アノお方のお邸宅へ出入の町人だッたから……アノお方は華族の戸賀篤義樣だらう

丙「ウン、然うよ、夫が判れば、アノ女の何者だといふ事を尋るにも及ばんぢやア無いか

乙「イ、エ、今の身分では無い、醫の履歴をサ

丙「然うか、成程……孰れ素人では無いなア、旦那は當時東京にお勝めだから、多分柳橋か新橋の藝妓を受出したのだらう、此地の藝妓といふ樣子は無いから……

乙「オヤ〳〵、アノ女中の背後から乞食のやうな奴が附いて行きます世、然もアノ女中の風体をヂロ〳〵見ながら、頭髪の飾か、懐中物でも狙ッてゐるのでせう、憎い奴ですなア

丙「お知らせ申して上げたいが、アノナ奴い、兎角、仇をするものだから、後が怖いから、汪濁した眞似も出來ず

乙「アヽ、花に毛虫とは、アノナ奴の事でせう早くお氣が附けば好いのに、アノ女中も、女中だ、何を漠然して……

乙丙が彼方へ歩む女の上に就て、床几より腰の外るゝを知らぬまで、頻りに氣を揉でゐるを、は、甲は更に知らざるもの、如く、手酌で瓢箪の酒を飲みながら

甲「エ、モシ一昨日貴卿等が僕の宿へお越しに成て、フトお心安く成て、此うして栽見の御案内まで願ひましたが、此上のお願ひに、今のお話の華族の戸賀樣とやらのお邸宅へお伴れ下さる譯にはゆきますまいか、僕は少し彼のお方にお願ひがございますが……

乙「如何なお願ひか知らぬが、夫はモウ容易い事で……僕は今云ふた通り、親の代からのお出入だから……

甲「夫は難有うございます、戸賀様へお願ひの次第は既れ宿へ歸ッてから、緩々申上げますが、ドウゾ、是非御同伴を願ひます

丙「アノ篤義様の御父様は名代の貧乏公家で僕が以前、アノお邸宅へ茶を納めてゐたころは、一枚の小判を振廻して、拂ひをするのかと思へば、然うでは無いので、僅か懸けが一貫四五百か二貫足ずの處へ……當今の一圓紙幣と違ふて……昔の小判は過剰を出すのが面倒だからツイ取らず返る者許りなので、その小判はホンの見せる許りで、辯解の種に遣ッてゐるやうな体裁で有たが、其お子はアノ通り大したもので、是も全く御一新のお蔭だ、同々々如此な古い事をいふと年が知れる呵々々々

乙「イヤ、云はなくッても、頭の白髪で大体判ッてゐる呵々々々

丙「オヤ、アノ汚い乞食が、此方へ來ました

といふ内に彼の非人体の男は此の床几の前に歩み來りしが、何か憚るところの有るもの、如く急に顔を背向けて足を早め、總門の方へ立去りけり

前回は其狀況の一端を記したる、京都大佛前の安泊り、大和屋の一室の内には此四五日以前より滯留なす、新米車夫の謙田芳三といふ男が、仕慣ぬ仕事に足を痛めて貴重の光陰を一日休んで、臥たり起たりしてをり、其他の合宿の人々は既も晝の稼業を營む者のみなれば、各自他出して、迹に殘るは、例の周作といふ賣卜者のみ、夫も日暮より辻店を張る用意をして居る傍に、芳三は煙草を飲みながら

芳三「周作さん、モウお仕度かな、今お話しの、災難に遭ふたといふのは、如何な話しです

周作「イヽエ、其災難に逢ふたのは、私ぢやない、先月の事で有たが、ソレお前さんが、此家へ泊りに來なすッた、その翌日又宿を借りに來た、喜蝶と云ふ人、アレは元來新内語りで有た、合宿の婦人が事で、とんだために遭ふて、長く、拘留に成てゐましたが、實に氣の毒な事で有た

芳三「ハヽア……ソシテ、お前さんも、其婦人の顔を能く覺えてゐなさるか

周作「左樣ぢや、顔に膏藥を貼つてゐたが、中々別嬪で、三味線も能く彈きました

芳三「元來何處の者ですな、其女は……

周作「武州の神奈川在で貰人と一處ま江州の方へ出稼ぎに來たと言てゐましたが……モシで、此の間喜蝶さんが拘留中にも度々探偵方が此處へ調べに見えたが、私が見たところでは、アノ女は一月餘も病氣で有たと思つて居たのに、全く夫は製作ごとで、此處へ泊ッた前日とか、前々日とかに、大阪から逃げて來たのだとかいふ事でした、夫に昨夕の喜蝶さ

んの談話では、上州の高崎で二千圓とかの大金を盗ンだ上に、放火までして逃げ出した、お尋ね者の毒婦があるが、夫にアノ女の人相が似てゐるから、萬一其女ぢやアあるまいかと言つてをつたです

芳三「ハ――ソコデお前さんの卜筮では、其女が其毒婦であるか、毒婦でないか分りやせん呵々々々

周作「夫はお前、稼業だから、筮竹さへ持てば、すぐ判るが、イヤ此處でお前の爲に只占ふより、ドレ店へ行て、錢儲けに掛りませう

芳三「ヂヤア、澤山儲けて、早くお歸りなさい

此の挨拶を迹に聞いて周作は紺の小風呂敷の包みを提げて出て行きし迹へ、引違へて歸り來りしは今しも二人が話してゐたる新内語りの喜蝶と今一個は年齢二十五六にて身粧も至つて見苦しき一人の男、悪さうな顏して入り來れば、芳三は夫と見るより

芳三「オ、内藤君、お歸り、喜蝶子……も今日は如何だッた、内藤君、早く着服を被替て、樂子を語し玉へ

内藤「如何も此姿では不可ンから、明日から粧致を替て、何か物質に成らうと言ひつゝ、破襖の押入を明けて、柳合李の中より秩父縞の綿入を把出して手早く衣替へて坐に就き

内藤「鎌田君、君は不相變車夫か

鎌田「車夫に就いて一條の失措談話があるよ、昨日、寺町の角で、客待をしてゐると、西の方から頭を束髪に結ッて、チョコ〳〵遣て來た女が例の寫眞に似てゐるから、直代に拘はらず乘せこひと、君――強いぢやア無いか、最初に繩手の元結屋へ行て、夫から三條へ出て、西陣へ行けといふので、小橋の端までくると、此道は不可ンから、木屋町を二條の方へ廻ッてくれといふので、例の旅亭の門先を避けるのだらうと、心に推測を下して、モウ占めたと、一廻腕によりを懸けて、木屋町を二條へ出て、西の方へ一散に驅けて行くと、西の洞院の邊で、向ふから來るのは、ソラ、君も知てゐる栗原だ……彼奴と、近來有名な探偵じ成て、此の京都府下と勿論、滋賀縣までにも、彼奴の手の者は幾人も居るくらゐだ……イヤ其樣な事は如何でも好いが、僕は職掌が肝心だから、故意と知らん顏の半兵衛さんで「ハイ御免」と道を避てけ驅けて行ふとすると……君、あんまり馬鹿氣て居るぢやないか……

内藤「何が……、道を避ける汝斷にその、婦人を逃したのか

芳三「イヽエサ、夫が大笑ひなので、其婦人が栗原の顏を見て、「オヽ」と吐すと、栗原が何堀

へ行くと」言ひながら僕の顔を見て、氣の毒さうに笑ふから、僕も本性を顯はす譯には不可が「オヽ」と一言栗原に挨拶をすると栗原は小聲で「君は間違ッて此の女を乘せてゐるのだらう」と注意してくれたが、僕はゾッコン、彼女だと思込で居から、傲然とイヤ判然と「イヤ目的を指してゐる」と答へると、栗原は尙笑つて「イヤ、コレは僕の愚妻」だと吐したので、腹が立つやら、馬鹿らしいやら「フーン然うか」と言て而も膨脹しながら汗を拭いてゐると、其女め、車から降りて栗原と何か耳コスリを仕やアがッて、僕に向ッて叮嚀に頭を下げて、眞に失禮をいたしましたと、挨拶をされたので、引込だ汗が又出直しサ呵々々、

内藤「呵々々々夫で足を痛めたのなら、實に澤山だ時に今日僕は確かに突止めた、僕と喜蝶と二人で堺町御門の處を歩いてゐると、昨日高臺寺で遭ふた戸賀といふ華族と、例の女が馬車の相乘で遣て行たから、僕は愈々アノ茶商の香林園の主人をうまく說附けて、翌日からアノ邸宅へ出入して、探偵を遂る目的だ

芳三「夫は好都合だ、然し喜蝶、お前は見證人の爲めに、此うして、毎日相當の費用を賄ふて伴て歩いて居るのに、アノ周作見たやうな老爺に、上州高崎での、舊惡一條などを、饒舌ッては、不可せ萬一如何な、邪魔になることがあるも知れんから……ヂヤア、内藤君、いよ〳〵戶賀の邸宅へ乘込むのか

内藤「サア、勿論だが夫にも策があるが、君此うしてと如何だらう

と芳三の耳に口を寄せて囁けば

芳三「ウヲ〳〵、又此間とて思想が變ッたナ

爰に又毒婦お蓮が共謀者たりし深見小兵衛は、愛に難波村なる渡邊巖の邸宅へ强談に行きたる後、お蓮が高飛したる由を聞て已も氣味惡く思ひ、お蓮より嘗ひたる割扶持を路用にあて、東京へ脫走せんと、道を東海道に取り、大津まで至りしが、該地は近來益々繁華を添へて、隨分仕事もあるべく思はるれば、同業なる虛僞師の方に身を寄せて、夫等の奴輩と同謀にて彼是惡事を働きをりしが、所謂惡錢身に着ずして、飲酒と賭博との二ッの爲めに、毎も懷中は無一物にて、漸次に衆天に向へども給の用意も出來ねば、愈々惡意を增長させ、乘車下車の雜踏紛れに、旅客の提袋か、時計にても窃盜せんものと、一日大津の停車場を彷徨をりしが、不慮もお蓮が束髮に頭を結ひ、半婦人然と華美に粧飾ひて、中等汽車より下りるを見とめ、是ぞ奇貨措くべしと思ひつゝ、直に「姉貴」と呼びかけて强請りしが、さしものお蓮も他人の見聞を憚りけん、そのまゝ或る料亭に誘ひて一杯飲せたるナにて、幾許の金を惠み

「少し職業の都合もあるから、爾來途中で見掛けても、知損なんぞと、野暮なこと言ておくれでないと」と暗に絶交の意を告げ、小兵衛が只飲む酒よと卑劣なる心をいだして頻りに塩子の代りをしてゐる間に、何所にか立去りけるが、小兵衛は迹にて夫と氣の着きたれど、最早間に合されば悄々其處を立去り、その後尚暫時の間大津の市街に彷徨ひしが、あまりの不行狀に果て仲間の者さへ愛想をつかして、寄せつけずなりしが、東京へ行くにも路費の貯蓄なければ、今一回京都に還り、何か花々しき仕事をして夫を機會に東京へ赴かんものと、即て京の町に來り、豫て馴染なる、祇園町の町小使○市といへる者の方に足を駐め、藝妓や娼妓の使ひ歩行きをしながら、密に惡事を働きゐたるが、一日小兵衛は例の青機使ひに三條邊へ行きて、黄昏時に四條の繩手まで歸り來りしが、吾より先へ歩み行く女の後姿、束髪の結樣、羽織の着こなし、總てお邇に能く似たれば、逐ひつきて、小遣錢に有りつかんものと、足を早めて迹を逐ひしが、其女は都湯と記せる行燈を掲げたる風呂屋へ這入ければ、小兵衛は勢ひ見遁し難く、共に引續いて都湯へ這入りけり、此時又小兵衛の跡をつけて來りし探偵らしき一人の男がそのまゝ、此方の派出所に赴きて甲の巡査に向ひ

「ヤア君

と一聲高く言ひしまゝ、跡は小聲にて囁けば甲の巡査は點頭きて

甲巡「堀田君、ヂヤア、今其處で、非常に好都合で有た……

と言ひつゝ、休息せる乙巡査に向ひ

甲巡「オイ君、此間からの……ソラ九一の一件の事で、堀田君が……

後ろ向を掲げて乙巡査は身を顯はし

乙巡「ヤア堀田君……

と言たキリ跡は何にも言はず、洋服のポケットより手帖をいだして手早く繰りひろげ

乙巡「君のお話しに依て、注目すると、如何にも擧動が怪しいので、尚聞合して見たが、大阪及び滋賀でも彼是犯罪がある樣子だが……尚判然はせぬが……今日は如何したのだ

堀田「今彼處の都湯へ還入たのを確かに見認たが、時刻が時刻だから、恐く板間を働く目的だらうと思ふのだ

甲巡「ヂヤア、君はアノ小便所の横に藏れて居玉へ、僕等は支度をして出掛けるから、君は、元より、彼奴の顏も、着用の衣類も

探偵「立縞の汚れた双子の袷に、一寸市の眞田の帶を占めて居る奴ぢやから、其目的で……

探偵は巡査と手筈を示し合せてそのまゝ、都湯の前なる小便所の陰に潛みて埋伏せしてゐたるが、即て湯屋の障子を内より開けて手拭片手に立出る一個の男、年齢は五十五六、日暮

にて縞柄は判然ならねど、秩父縞の薄綿入と覺しき衣裳を着け羽織を脱ぎ懐中へ入れたるが、戸外へ出るが否や足を早めて南の方へ走り去らんとして一寸此方を振返るトタン待儲けし探偵が小便所の陰より立いで、

探偵「マテ――

と一聲かくるや否や矢庭に其老人の右手を執へたれど衣服の滑ひたれば若やと残念を抱きてサッと顔を見直せしが紛ふ方なき其人なれば吃度詞に力を入れ

探偵「ヤイ神妙にして

小兵衛は心に驚きながら悪漢の癖としてか、る場合には尤も落附たる容子にて

小兵「ハイ何でございます……貴卿私を執へて如何なさいます

探偵「コレ此の着物は如何したのぢや……此處に於て彼是申すには及ばん、其方は深見小兵衛で有う

小兵「エ――

探偵「エ、も何もいるものか、サア只今着してゐる此の衣類は如何したのぢや、アノ湯屋さでチョッとまゐれ

小兵「是は私の……

探偵「馬鹿な事を申すな、最前其方が風呂へ這入る時、其方の衣類は確かに見ておいたぞ……

小兵「イエ、今日は、一寸尋ねる者が此風呂屋へ這入りましたから……板間を働いたに違ひあるまい

探偵「其尋ねる者といふのは其方の共謀で有らう、其方の……

小兵「イエ……

探偵「ソシテ、其尋ねる者には逢ふたのか

小兵「イエ、似ておりましたが、全く別人でございまして……

探偵「夫で板間を働いたのか

此る問答をなせる其間にも小兵衛は暇だにあらば逃んと氣をあせる折から、都湯の上り場にては被害者某が衣類の無きに心づきて、ソレ盜賊と騒ぎ出しければ、湯屋の男衆が斯くと聞て、戸外に馳いだせしが、小兵衛は此の騒きを聞付けて、内外に敵を引受けては適はじと思ひけん、懐中の羽織を放出すが否や、花紋の裘びし細腕を振ひて打てかゝるを、示合せし巡査も現場に出張して、右左より折上なりて何の苦も無く捕縛なしけり

第二十一回

富蒲草

車夫「奥さん、お安くまゐりませうか、御都合まで……

女「ッィ富永町まで行くのですから……
車夫「富永町まで、大負けに負けて、二錢でお伴いたしませう
女「妾は、一向此地の地理を知らないから、ヂヤア、言ひ直で乘て上げるから、急いで行てお
くれ
車夫「サアお召しなさい、大急ぎで參りますから
西京四條御旅町の往來にて客待せる車夫と賃錢の應對して腕車に乘りたる婦人は、新京極
の方より歩み來りし者にて髪い流行の束髪に束ね、舶來の薔薇の簪を挿し、黒縮緬の羽織を
被り、お召縮緬の口綿の小袖を着たる、十九か二十の別嬪なるが是なん前回より度々讃者諸
君とお馴染になりたる、小泉要一の情婦お時なり、己が身を寄せて居る南地の青樓富永の客
人にて泉原といへる金満家が島の内なる遊妓を二三人携へて、京都の紅葉狩を催し、一昨日
こ高尾、昨日は逓天と各地の名所に腕車を飛せしが、今日は眞如堂、永觀堂、若王寺など東山
邊を彷徨ひその歸途に八阪新地の芳春樓に立寄りて酒宴を開きたるが、泉原は貴重なる品
物を己が旅宿なる麩屋町の西村方に遺失れて來りしとて、其品物を取寄する爲め、仲居代り
に附添ひ來りし此のお時を使ひに遣りし卽ち夫が歸途あり、車夫はお時のいふがまに〳〵
富永町の芳春樓の門口に楫棒を下せばお時は財嚢の中より二錢銅貨を一枚把出して「ハイ

御苦勞と車夫に渡しそのまゝ、泉原の坐敷に通れば泉原は夫と見るより
泉原「お使者御苦勞、確かに莨袋の中へ入て置いた心算だッたのに、見えないので……
傍に坐りたる小芳といふ藝妓がさしいで、
小芳「泉原さん、貴重な物ッて、何をお忘れなすッたの
お時は嫣然笑ひながら
お時「妾の持て來たものを、皆さん中てごらん、手に把ては不可ませんよ、誰でも嫌ひなも
のは無いけれども、小芳さんは就中好きなものでオホ、、、、
小サな帛紗包を前に置けば一坐の藝妓舞妓は其包みに向ッて一齊に視線を注ぎつ、
歌子「姉さんの好なものなら……
泉原「小芳の好な物だッて紙幣ぢやァ無いせ呵々々
小芳「否ですよ、旦那、何程妾が慾張だからッて、紙幣より好なものが有りまさァね
泉原「是は失敬、貴嬢樣は、紙幣より、無眉漢がお好きだッけ……
小芳「アレ又如彼な憎まれ口を……モウノ〳〵惡口家さんには構はないで、お時さん妾が先
へ中てますよ、アノ——聖護院の八橋でせう
泉原「呵々々々、慾張と色氣を禁じられたものだからトウ〳〵食氣と出かけおッた呵々々

〃

小芳「妾の好きなものだとお言ひなさるから

お時「小芳さんは、八橋ですか、キット……

若松「妾は双眼鏡かと思ひますは……此格好では……

泉原「好きなものだといふのに、幾許若松が歯が好くてもマサか……イヤ然うも言へぬ、金時計や指環を飲んだり食ッたりする豪傑もあるから呵々々々

歌子「妾はアノ……今日、ソレ、アノ……

泉原「今日、ソレ、アノ……とは何だ、假令東都だッて、其樣な名の食物はあるまい

歌子「オホ、、、、名ではありませんよ、名を忘れたので……アノ……ス……スカ、然う〳〵スカオコシでせう

小芳「オホ、、、、スコオコシですか

お時「スカ〳〵、夫こそスカです、何誰も當りません、オホ、、、

此るあど無き事も却て愛嬌を添へ、一層酒宴の興を増して笑ひ聲さへいと賑はしき坐敷の紙障をソッと開けて此家の下婢が手をつかへ

下婢「一寸お時さんアノ……

とお時の顔を見れはお時は此方を振向きて

お時「お竹どん何ぞ用事でッか

下婢「ハイ、今貴女を乘せてまゐりました車屋が……先刻私の乘せて來た、婦人のお客と倘おいでるかと尋ねにまゐッたさうですが、貴女何ぞ言ふてお置き爲すッたのですか

お時「イヽエ何にも、言ては置きませんが、妾を用事が有て此家へ來た客人だと思ッて、歸りにも乘せる心算で待て居るのでせう、妾と倘急に歸らないから、待て居ずに、先へ歸れと云てやッて頂戴、モウ賃錢は遣ッて有りますから……

下婢「ハイ、然う申して遣りませう

此の二人の問答の内に小芳は狡猾にもお時の携へ來りし帛紗包みをソット探ッて見て探索らぬ顔を粧ひつゝ

小芳「オホ、、、、好いこと〳〵、泉原さん判りましたよ

泉原「何だ當ッたか

小芳「ハー、骨牌でせう、例り……チェ、お時さん、妾の鑑定は違ひますまい

泉原「呵々々々、夫丈け判れはきかいでも好い……ドウダ秀逸だらう上等の酒肴だらう

若松「ホ、、、、きかいでも好いか知れませんが、聞いても判らない酒肴ですオホ、、

、、

歌子「妾はゾッコン食物だと思ッてゐましたが、例のですか、彼ですかオホ、、、、成程小芳さん、姉さんのお好なもんです子ヱ……能く知れました子ヱ

小芳「蛇の道は蛇ですよオホ、、、、

若松「ナーニ、探ッて見たのでせう

お時も此時此方を振向き

お時「探ッて當たのは、當たのではありませんよ、小芳さん

小芳「虚々、妾は何も……夫より泉原さん、貴重の光陰を徒費にするより、骨牌のある以上は始めませうか、オホ、、、、

若松「オヤ、誰かさんの聲色です子ヱ、オホ、、、、

泉原「小芳は骨牌さへ見ると全是狂人だなア、待て〳〵、此運中許りでは、同士打だから津四樓にゐる永井を呼びにやらう、彼奴も好きだから

小芳「ヂヤア、車夫に腕車を持して……

お時「萬一ね差支があると不可ませんから、妾が一走り行て來ませう

泉原「そんなら手紙を書く世話も無くて尚更結構だが、度々氣の毒だなア

髪を束髪に結ひ、身に羽織を被り、年齢は二十前後の女にて、高尚と云はんより寧ろ意氣と云ふこそ批評の當を得たらめと思はるゝ一個の女が西石垣四條下る處を此の方よりさも忙しげに來かゝる其後邊より隨ひ來るは浴衣にひらくけの帯をしめたる賤げなる男なるが、矢庭に逐縋りて聲を掛け

巨蝶「お宮さん、オイ、お宮さん

と言ひつゝそのまゝ右の手を確と執もれば其女は驚ける樣子にて

女「オヤ、お前さんは何誰です、妾はお宮といふ名ではございません、何を爲さるのです、

巨蝶「思らしい、此手をお放しなさい

矢庭に振放さんとすれど、尚も其手を放さゞれば愈々遽込みて

女「モシ如何なさいます、妾の手を執へて……

巨蝶は熟々とその女の顏を眺め

巨蝶「オイ、お宮さん、顏の膏藥をへがしたからッて、其樣にシラを切ても不可ヂヱ、私は喜嶲だよ、お前のお蔭で青天な身体を共謀と間違へられて、久しく麥飯を喰ッされてゐたのだ、サア强情張ると旦那方に渡やすぜ

女は更に合點の行かざる樣子にて尚お宮にあらざる旨を辯解せしが、物見高きは都會の人